

青少年健全育成啓発 詩・作文集

# 「か・が・や・き」

令和6年度



越谷市 越谷市教育委員会 青少年育成越谷市民会議

# こしがやし こ けんしょう 越谷市子ども憲章

(平成 10 年 11 月 3 日制定)

みず みどり たいよう めく こしがやし みらい にな  
水と緑と太陽に恵まれた越谷市の未来を担うわたしたちは、  
ゆめ ほこり も なかよ たす あ い ちか  
夢と誇りを持ち、みんな仲良く助け合って生きていくことを誓い、  
ここに「越谷市子ども憲章」を定めます。

じ  
自

りっ  
立

わたしたちは、<sup>たが</sup>互いに<sup>みと</sup>認め<sup>はげ</sup>励まし<sup>あ</sup>合い、  
<sup>じ</sup>自分の<sup>ぶん</sup>道を<sup>みち</sup>歩<sup>あゆ</sup>んでいきます。

せき  
責

にん  
任

わたしたちは、<sup>れい</sup>礼儀<sup>ぎ</sup>正<sup>ただ</sup>しく、<sup>まも</sup>きまりを守り、  
<sup>せき</sup>責任<sup>にん</sup>を持<sup>も</sup>って<sup>こう</sup>行<sup>どう</sup>動します。

けん  
健

こう  
康

わたしたちは、<sup>いの</sup>生命<sup>ち</sup>を<sup>たい</sup>大切<sup>せつ</sup>にし、  
<sup>あか</sup>明る<sup>く</sup>、<sup>い</sup>たくましく<sup>い</sup>生きていきます。

かん  
感

しゃ  
謝

わたしたちは、<sup>おも</sup>思い<sup>こころ</sup>やりの<sup>こ</sup>心と、  
“<sup>き</sup>ありがとう”<sup>も</sup>の<sup>も</sup>気<sup>つづ</sup>持<sup>づ</sup>ちを<sup>も</sup>持<sup>づ</sup>ち続<sup>づ</sup>けます。

かん  
環

きょう  
境

わたしたちは、<sup>し</sup>自然<sup>ぜん</sup>や<sup>ぶん</sup>文化<sup>か</sup>を<sup>たい</sup>大切<sup>せつ</sup>にし、  
<sup>かん</sup>環<sup>きょう</sup>境<sup>じょう</sup>に<sup>やさ</sup>やさしく<sup>く</sup>します。



越谷市子ども憲章石碑：越谷市科学技術体験センター（ミラクル）

## はじめに

越谷市長 福田 晃

青少年健全育成啓発詩・作文集「か・が・や・き」が、関係者の皆様のお力添えにより発行できますことに、心より感謝を申し上げます。

この詩・作文集「か・が・や・き」は、青少年健全育成事業の一つとして、毎年発行しており、市内全校から応募された五百九十六作品の中から、青少年育成越谷市民会議の役員・理事の皆様により選考された、百六十作品を掲載しています。

今年度は、家族・友人に関することや学校生活における出来事のほか、「将来の夢」について書かれた作品が多くありました。これらの作品からは、家族や学校の先生などの身近な人たちへの「憧れ」や「尊敬」から「将来の夢」を見つけ、これからの自らの生活の中で、夢に向かって行動していく意欲や決意が感じられました。夢を追い求める過程での挑戦は、自分の成長につながるだけでなく、新たな可能性を切り拓くこともあります。「将来の夢」を持つことは、自己実現のための第一歩であり、大人へと成長するために重要なことであると考えております。また、応募いただいた作品はどれも自分の言葉で丁寧に表現されていると感じました。文章を考えていく中で、自分の気持ちや考えと深く向き合ったことは、子どもたちにとって、大きな財産になります。

子どもたちの笑顔は、社会の希望の源であり、未来を担う子どもたちが夢や希望を持って健やかに成長することは、すなわち健全な社会を築くことにほかなりません。

この「か・が・や・き」を青少年健全育成に携わる皆様や多くの市民の皆様にご一読いただき、子どもたちの思いを受け止め、今後の様々な取組みの一助としていただきたいと思います。

近年は、情報化社会の進展により、インターネットを通じて手軽に情報収集やサービスを利用し、子どもから大人まで誰もが自分の主張を自分で発信し、様々な価値観が認められる時代になりました。

しかし、多様な価値観が尊重される一方で、地域社会での人と人とのつながりが希薄化し、子どもたちが地域コミュニティの中で成長することが難しくなっています。

このような中、令和五年四月に施行されたことも基本法の基本理念を踏まえ、未来を担う子どもたちが、自らの目標に向かって努力を重ね、学ぶ楽しみを知り、自立して生きていくための基盤づくりをすることが教育行政の果たすべき責務だと考えております

詩・作文集「か・が・や・き」には、「未来に向けて考えること（希望・提案・将来の夢・私のまちの未来について）、日常生活や学校生活の中でチャレンジしていることや感じていること、大人に訴えたいこと」などをテーマとして児童・生徒が日々考えていることを綴っております。本年度は全ての公立小中学校から五百九十六作品もの応募がありました。

児童・生徒が日々感じていることを自分の言葉で改めて文章にすることは、自分自身を見つめ直す良い機会になり、また、児童・生徒の気持ちを多くの方々へ伝えることは、子どもたちに対する社会全体の意識の向上が図られ、地域の教育力の推進につながります。

青少年健全育成に携わる関係者の皆様並びに、多くの市民の皆様におかれましては、この「か・が・や・き」を通じて、これからの時代を担っていく未来ある子どもたちの等身大の思いをお読みいただき、子どもたちへの理解を深める契機としていただければ幸いです。

このたび、青少年健全育成啓発 詩・作文集「か・が・や・き」が、関係者の皆様の多大なるお力添えにより発行できますことに、心より感謝を申し上げます。

青少年育成越谷市民会議では、「あいさつは 心をつなぐ 愛ことば」を統一テーマに掲げ、越谷市・越谷市教育委員会をはじめ、青少年関係団体との連携はもとより、学校・家庭・地域が連携し、市民総ぐるみの青少年健全育成活動を展開しています。

この詩・作文集「か・が・や・き」では「未来に向けて考えること（希望・提案・将来の夢・私のまちの未来について）、日常生活や学校生活の中でチャレンジしていることや感じていること、大人に訴えたいこと」をテーマとし、市内公立小中学校の小学四年生から中学三年生までを対象に作品を募集いたしました。

本年度は市内全ての公立小中学校から、詩部門で百五十五作品、作文部門で四百四十一作品、合わせて五百九十六作品の応募をいただき、選考の結果、百六十作品を入選作品として本書に掲載させていただきました。

応募いただいた作品には、子どもたちが自ら学んだり、体験して得たことなどが素直に綴られており、これからの未来に羽ばたいていく子どもたちの頼もしさを感じることができます。また、子どもたちが自分の思いを文章に表現し、あらためて自分を見つめ直すことは、物事を様々な角度からとらえ、自らを成長させることにもつながります。

このすばらしい作品を、子どもたちをはじめ、保護者の皆様、地域の皆様など多くの皆様に御一読いただきたいと思えます。そして、詩・作文集「か・が・や・き」が今後の青少年健全育成の一助となり、未来ある子どもたちが夢や希望を持つて成長し続けられるよう心から願います。

《作文の部門》 ☆印は優秀作品

目次

☆女性や子どもの人けん	篠原 董	1
いじめでの「言葉は絶対けせない」	江原 真心	2
自分の明るい未来	小泉 杏	3
プロ野球選手への道	小貫 泰知	4
友達とは何なのか	金田 菜	5
ぼくの家族	速水 里	6
将来の夢	坂本 結那	7
世界をめざして	須藤 彩	8
さべつをしないで	中本 茉莉	10
勇気を持つこと大切に	金川 心花	11
お年よりにやさしくしよう	粕谷 匠	12
「あいさつですてきなかんきょうへ」	平野 愛菜	13
わたしの未来	春山 雫	15
音のない世界	池見 優花	16
少しでも人の役にたてる薬ざいし	三ツ本 咲希	17
言葉の凶器	佃 百花	19
明るくて、やさしい世界にしよう	齋藤 実玖	20
将来の夢に向けて	安松 芹夏	21
「ありがとう」の言葉	山田 青葉	23

あきらめないことと友達の大切さ	柳	恵理香	桜井小四年	24
良いところをたくさん見つけよう	根	宗 範	出羽小四年	26
たったひとつの命	佐	栗 奈	東越谷小四年	27
やさしいお父さん	本	昂太郎	大袋北小四年	28
「幸せになりたいだけだから」	齋	初依花	蒲生南小四年	29
わたしへの提案	上	あかり	平方小四年	30
今がんばっていること	漆	月 姫	平方小四年	31
☆僕に似ている最高の弟	佐	咲乃丞	平方小五年	32
祖母が私に教えてくれたこと	松	こなつ	大袋東小五年	34
全力プレーで恩返し	千	清之介	平方小五年	35
本当に大切なもの	氏	采 愛	平方小五年	36
私の「命」と「病気」のこと	加	心 愛	平方小五年	37
先生との約束	平	心 彩	千間台小五年	38
障がいのある方への差別	石	塚 美 有	大袋東小五年	40
「自分らしさ」を大切に	齋	藤 あずさ	大袋東小五年	41
未来の地球が大ピンチ!	岩	本 紗 季	南越谷小五年	43
人種差別はダメ	狩	野 湊 斗	大沢北小五年	44
学びから広がる多様性	中	山 桃 佳	大沢小五年	45
目の不自由な人が安心できる社会	武	村 望 愛	大沢北小五年	47
心のかべをなくすために	須	田 陽 仁	大袋北小五年	48
夢に向かって	倉	淵 葉 月	千間台小五年	49
私の相棒	竹	本 千 咲	花田小五年	50
すぎなチームでみんなが楽しく	浅	沼 花 那	蒲生小五年	52

私のあこがれの人	茂木友里	西方小五年	53
いろいろな優しさ	日野真緒	千間台小五年	55
トラブルが私に教えてくれたこと	小川柚菜	蒲生小五年	56
いじめをなくすために	佐藤花保	鷺後小五年	57
北朝鮮による日本人拉致問題について	早川まい	大間野小五年	58
☆介護を知って	金子奈央	蒲生小六年	59
ぼくの夢	田中俐壹	川柳小六年	61
「子ども達にきつかけの種を」	黒田華蓮	千間台小六年	62
あこがれの人たち	亀山華樹	蒲生小六年	64
障がい者によりよい生活を	田口彩未	大袋東小六年	65
幸せのパティシエ	加藤百夏	南越谷小六年	66
みんなおなじ	堀琴葉	桜井小六年	68
少子高齢化と子どもたち	田端千夏	大沢北小六年	69
アレルギーについて	本田慎翔	大袋北小六年	70
大事なおじいちゃん	鈴木美空	大袋北小六年	71
目標に向かって	小島粹	宮本小六年	73
高齢者にも優しい社会を	高松咲太郎	西方小六年	74
将来の夢	横瀬結菜	鷺後小六年	75
みんなの努力が世界を変える	成田唯花	明生小六年	76
あの子に負けないように	木村晴乃	新方小六年	77
人々の自由をうばった戦争	加藤凜愛来	桜井小六年	79
支え合う世界をつくろうよ	浅川真奈	大袋北小六年	80
「不適切」とは	厚澤朱里	大袋北小六年	81



夢のきっかけ	水田梨心	蒲生小六年	82
世の中の男女差別	大島彩花	大袋東小六年	83
「一つに共通しているもの」	九ノ里湊人	平方小六年	84
戦争のこわさ・おそろしさ	長野清十朗	大沢北小六年	86
言葉づかいで	樫村汐梨	大袋小六年	87
より良い生活のために	八田琴羽	花田小六年	88
親戚との約束	磯野由奈	蒲生小六年	90
みょう字が変わること	葛西菜摘	大沢小六年	91
「震災と復興」	徳留爽斗	大袋小六年	92
とどけ私の声	澤城莉那	大袋東小六年	94
僕の憧れに向かつて	上田晃誠	平方小六年	95
☆将来の夢	工藤凜子	大相模中一年	96
「私の将来の夢」	仁科凜香	富士中一年	97
素敵な個性だと思える世界を	水口和奏	大袋中一年	98
「普通」	平林功雅	大袋中一年	99
ちりも積もれば山となる	久保はるか	光陽中一年	101
夢に一步近づいて	會田柚月	栄進中一年	102
自然の魅力の宝、越谷市	加藤千咲	新栄中一年	104
私の決意	上原凜華	大相模中一年	104
将来の夢	坂庭美心	大相模中一年	106
「私の楽しいしゅん間」	松田美咲	南中一年	107
毎日が幸せに感じるために	関根沙織	南中一年	108
今の地球の姿	関根沙織	平方中一年	110

将来の夢・・・・・・・・・・吉岡和哉・・・・・・・・南中一年・・・・・・111  
☆私の人生という物語・・・・・・・・・・矢部実花・・・・・・・・武蔵野中二年・・・・・・112

否定の意味・・・・・・・・・・石原広大・・・・・・・・千間台中二年・・・・・・114  
座右の銘・・・・・・・・・・野元麻央・・・・・・・・南中二年・・・・・・115

世界一の宝物・・・・・・・・・・持地栞奈・・・・・・・・武蔵野中二年・・・・・・117  
「社会問題と私たち」・・・・・・・・・・久保美優菜・・・・・・・・南中二年・・・・・・118

入学式・・・・・・・・・・内田莉緒・・・・・・・・武蔵野中二年・・・・・・120  
新しい世界・・・・・・・・・・山口亜子・・・・・・・・武蔵野中二年・・・・・・121

自信を持つこと・・・・・・・・・・漆崎李歩・・・・・・・・中央中二年・・・・・・122  
「カラフルな世界へ」・・・・・・・・・・金子由奈・・・・・・・・南中二年・・・・・・123

「機械化による人への影響とは」・・・・・・・・・・佐藤宏樹・・・・・・・・光陽中二年・・・・・・124  
心のつながり・・・・・・・・・・森田涼子・・・・・・・・大相模中二年・・・・・・126

身体的な障がい者・・・・・・・・・・岡田獅央・・・・・・・・大袋中二年・・・・・・127  
福祉の今とこれから・・・・・・・・・・秋本結音・・・・・・・・光陽中二年・・・・・・129

十年後の未来の私へ・・・・・・・・・・小山維月・・・・・・・・大相模中二年・・・・・・130  
夢を与えてくれた人・・・・・・・・・・橘高実胡・・・・・・・・栄進中二年・・・・・・131

会話・・・・・・・・・・坂梨葵・・・・・・・・光陽中二年・・・・・・133  
☆楽器から学ぶこと・・・・・・・・・・有村まこ・・・・・・・・東中三年・・・・・・134

満たすもの・・・・・・・・・・水越さわ・・・・・・・・北中三年・・・・・・136  
ゴールド金賞に向けて・・・・・・・・・・小賀野琴美・・・・・・・・栄進中三年・・・・・・137

便利な世界で生きていくために・・・・・・・・・・高橋真結子・・・・・・・・北中三年・・・・・・139  
私に「しか」できないこと・・・・・・・・・・勝占幸花・・・・・・・・光陽中三年・・・・・・140  
私の将来の夢・・・・・・・・・・佐藤樹菜・・・・・・・・平方中三年・・・・・・142

あなたの勇気がみんなを繋ぐ．．．．．賤  
 日本の伝統文化の魅力に気づけるか．．．．．大  
 一人でも多くの命を救いたい．．．．．内  
 人間未満、怪物以上．．．．．堀  
 受験に向けての心ざし．．．．．井  
 「失いたくないもの」．．．．．葛  
 終わり方から学ぶ経験．．．．．中  
 個性を認める「○○らしく」．．．．．濱  
 濱口直子．．．．．東中三年．．．．．154  
 中村茉広．．．．．東中三年．．．．．152  
 貫陽頼．．．．．栄進中三年．．．．．151  
 井上愛琉．．．．．栄進中三年．．．．．149  
 堀越友陽．．．．．栄進中三年．．．．．148  
 内田爽．．．．．光陽中三年．．．．．146  
 大野彩華．．．．．光陽中三年．．．．．145  
 機瑠花．．．．．東中三年．．．．．143

《詩の部門》

☆夢への道．．．．．千  
 悠斗．．．．．蒲生小四年．．．．．155

きれいな地球を守るために．．．．．村  
 桜．．．．．大間野小四年．．．．．155

優しい自然．．．．．濱  
 菜摘．．．．．新方小四年．．．．．156

わたしの家族．．．．．山  
 田知帆璃．．．．．大袋小四年．．．．．156

「わたしのゆめ」．．．．．黒  
 須佑菜．．．．．南越谷小四年．．．．．157

願うこと．．．．．濱  
 中結愛．．．．．鷺後小四年．．．．．158

人の心．．．．．寺  
 田将生．．．．．川柳小四年．．．．．158

あいさつ．．．．．田  
 中陽都．．．．．大袋小四年．．．．．159

あいさつで気持ちを変える．．．．．小  
 林優莉菜．．．．．大間野小四年．．．．．159

☆言葉の力と影響力．．．．．家  
 村美羽．．．．．大間野小四年．．．．．160

大切な家族．．．．．澤  
 花英．．．．．川柳小五年．．．．．161

「言葉の刃物」．．．．．加  
 藤蒼乃．．．．．新方小五年．．．．．162

ファッションデザイナー．．．．．栗  
 原希実．．．．．蒲生南小五年．．．．．162

	ぼくのおとうと	徳田	瑠輝	蒲生南小五年	163
☆私	みんなと私	細谷	宇	南越谷小六年	163
	今の自分と未来の自分	金子	花愛	新方小六年	164
	「失敗」	今泉	杏俐	弥栄小六年	164
	「希望の星」	平野	月海	蒲生南小六年	165
	ポジティブ	久米	希智	蒲生小六年	165
	個性って何だろう	浅野	礼奈	蒲生南小六年	166
	私は思う私思うぼくも思う手をさしのべられたら	加藤	紗也	弥栄小六年	167
	昔のわたし、今のわたし	岡安	藍九	大間野小六年	167
	大切な家族と友達	松本	恵奈	桜井小六年	168
☆帰り道		中島	優芽	弥栄小六年	169
	いつもどおり	小船	なつみ	武蔵野中一年	170
	夢の世界	大塚	芽依	武蔵野中一年	170
	朝虹	松本	星凜奈	武蔵野中一年	171
	自転車帰りの遊水池	三好	深月	武蔵野中一年	171
☆季節図書		本田	和蓮	新栄中一年	172
	思い出春夏秋冬	吉田	ちひろ	新栄中二年	172
	花鳥風月	石野	優茉	新栄中二年	173
	四季折々	岡田	大輝	新栄中二年	174
	「他人事じゃない」	戸ヶ崎	莉緒	新栄中二年	174
	「自分らしく生きる」	石井	里衣菜	北陽中二年	175
☆人生の木		小林	ひかり	平方中二年	176
		関	郁哉	北陽中三年	177

言葉と心	久米悠愛	177
四季という名の地球の宝	篠原せり	178
大きな世界で	若林花奈	178
宝物	藤江泉誓	179
私の見る景色	丸岡舞莉	179
大袋中三年	大袋中三年	179
新栄中三年	新栄中三年	178
北陽中三年	北陽中三年	178

《佳作者名簿》

作文の部門（小学生）	181
詩の部門（小学生）	186
作文の部門（中学生）	188
詩の部門（中学生）	191
作品選考役員・理事紹介	193
青少年・保護者の悩みごと相談（各種相談窓口案内）	194

## 女性や子どもの人けん

優秀作品

蒲生小四年 篠原董礼

人けんとは何だろう？人けんについて調べてみると、人間が人間らしく生きるために、当然なこととして認められている権利、自由や平等などの権利、人間が生まれながらにして持つ、幸せに生きるための権利ということが分かりました。

私は、二年生のころに、友達とうでずもうをして勝った時、クラスの男の子に「メスゴリラ」と、からかわれて、いやな気持ちになりました。他にも、体が大きいことや力が強いことで、「女なのに……」と言われて、悲しくなりました。この事から、女性の人権や女の子の権利についてきょう味をもったので調べてみると、世界中ではさまざまなことが起きている事を知りました。その中でも一番おどろいたことは、児童婚です。児童婚とは、十八さい未満の男女が自分の意志に関わらず、お金や労働力のために、親や親族に強制的に結婚させられることです。それにより、子ども達は学ぶ機会もなく、他の生き方を知らずに子ども時代をうばわれています。また、体が未じゅくなじょうたいでの妊娠や出産は自分も赤ちゃ

んも死んでしまうきけんがあります。結婚は、好きな人と好きなタイムミングですることだと思っていたので、とても悲しい気持ちになりました。早い結婚が起きる原因は教育のおくれ、まずしき、古くからある習かん、女性差別など、様々です。アフリカでは、すでに結婚している十八さい未満の女の子は、一億三千万人いて、しかも、児童婚をしている十八さい未満の女の子達は、現在の日本の人口とほぼ一緒だそうです。その中にも、児童婚がいやで自さつしてしまう女の子もいるそうです。

親が児童婚を決めているのは、親も児童婚をしていて、それが当たり前だと思っているからです。昔からの習慣や、自由を知らない親世代が多く、いまままだ児童婚が続いているのだと思います。そのために、今私たちに出来る事は、ユニセフ募金を通じて、児童婚をなくそうとがんばって活動している人たちのしえんをすることや、差別や人権について、もつと知ることだと思います。少しでも多くの人に児童婚で苦しんでいる子どもたちがいることを知ってもらって、早く自分達で自由に結婚相手をえらべる世界になるといいと思います。

いじめでの「言葉は絶対させない」

蒲生小四年 江原真心

わたしは、いじめられている子を見たことがある。それは言葉のいじめであった。わる口やかからかいといういじめをしていた。

「うるせえー」や「あつちいつて」という言葉だ。とても辛い言葉。きいた人はとても苦しみその言葉はかせない。けすことのできない言葉はらくには言えない。言葉はぼう力といえる。

しかし守りとも言える。なぜならいじめをされたときに友達や先生に伝えられるし、相談できる。

なぜこのテーマにしたかという、わたしにはみんなに伝えたいことがあるからです。

言葉はかせないことを知ってほしい  
いじめをしないこと

それぞれの人生があること  
人生につながる

口にだした言葉がいじめにもなる  
このようなことをわかってほしい。

なぜなら、いやなことをいわれ、きずつけられている人はこの世に何万人

もいる。みんなしらないと思う。

わたしは、言葉を上手くつかうことがあまりできないので自分の言葉をきにしながらつかっています。また、みんなにいやがられないような言葉をつかっています。

わたしは、言葉となかよく生活していきたい、と思つた。

この世には、言葉で学校にいけない人がいる。それをきいてわたしは、

「言葉でのいじめかなあ」と気になっていた。しらべてみると「言葉」で不登校になっている人は、約二十九万九千人もいるそうです。だからわたしは、クラスのみんなや友達をきずつけて学校を不登校にさせたくない。また、「言葉」を大切につかいたい。

「言葉」のいじめは六百六十三千の人たちからの相談がきている。

「いじめでの言葉はかせない」  
とくにこのようなことを気にしてほしい。

わたしは、大切な「ことば」で「いじめ」はやめてほしい。全国の人たちが、学校生活を楽しくおこつてほしい。また、きずつけられている人たちをへらしていきたい。

みんなは本当はいい人たち。だからこそ、いじめにな

らないように言葉を気をつけたい。

わたしは、みんなの輝く未来のために人をきずつけさせたくない。また「言葉」はけせないということをおぼえてほしい。

わたしは、いい人たちがわるい人たちと思われてほしくない。このようなことにならないようにこの文章をかいた。

わたしはみんなに、ことばは「一生」けせないと分かってほしい。



## 自分の明るい未来

花田小四年 小泉 杏咲

わたしが今、一番がんばっているのは、バスケットボールです。きつかけは、いとこがキャンプの時に私にバスケットを教えてくれて、それが楽しかったからです。わたしのお姉ちゃんもバスケットをしていたので、わたしも体けんしてみることになりました。体けんしてみてもやっぱり楽しいと感じたので、わたしもバスケットを習い始めることに決めました。習い始めてみて、うまくいかないこともあります。大事な試合でシュートを決めなければならぬところを外してしまったり、パスするのをミスしてしまったりコートにおこられたりすることもあります。うまくいかないことが続いてしまうと、悲しい気持ちになり、時にはバスケットをやめたいと思うこともあります。それでも、シュートやパスがうまくいった時やそのことをコートにほめられるとすごくうれししいし、今までがんばってきたことができたという達成感を感じられ、またがんばろうという気持ちにもなります。次もあきらめないでがんばろうという強い気持ちを少しずつ持てるようになります、その気持ちの大切さをバスケットから今も学んでいます。



わたしには、今ゆめがあります。それは、いつか日本代表の選手になってオリンピックなどの大会で金メダルをとることです。そしてこれまでバスケットを教えてくれたコーチにお返しをしたいです。今やっているミニバスではバスケット部に入り、県選ぼうや全国大会にも出れるような強い選手になりたいです。バスケットを続けていく中で、今までよりもつと苦しいことや大変なこともあるかもしれない。それでも強い気持ちをもち、あきらめずに何事にもチャレンジしたり、ど力していきたいと思いません。なので、バスケットだけでなく、色々なことにチャレンジしていきたいです。まずは、自分の苦手な算数や組んでいこうと思います。授業では集中してしっかりと取り組む、分からないところは先生や友達に聞いたりしながら、どう考えればよいか分かるようにしていきたいです。また学校生活の中で学んだ、あいさつや返事なども自分の生活にもつなげ、たくさんの人たちと関わり合い、自分の世界を広げていきたいです。そしていつかゆめをかなえたいです。

## プロ野球選手への道

大袋東小四年 小貫 泰 知

ぼくの将来の夢は、プロ野球選手になることです。チャンスに強く、けん実な守備ができ、ほかの野球選手から一目置かれる選手になりたいです。

ぼくが野球を知ったきっかけは、家でおじいちゃんとお父さんが見ていた野球中けいでした。はじめは「つまらない番組だ。ほかのチャンネルに変えてほしい。」と思っていました。なんとなく見つけかけていたある日、バッテリーがヒットを打って、得点が入りました。次々にランナーがホームに帰ってきてきました。気がつくともぼくはその中けいに夢中になっていました。お父さんにバットとグローブ、ボールを買ってもらい、休みの日にお父さんと野球の練習を始めました。

ぼくが、プロ野球選手になるために頑張っていることが二つあります。

一つ目は、体そうです。体そうは、体を柔らかくしてけがをしないために続けています。プロ野球を見ていても、けがをして試合に出られない選手を見かけます。ぼくは、プロ野球選手になったら引退するまで毎日試合に

出たいので、怪我をしない柔軟な体づくりを目指して、続けています。

二つ目は、少年野球です。少年野球では、キャッチャーを任されています。扇の要の大切なポジションです。盗塁を百パーセントそ止できるキャッチャーを目指しています。キャッチャーをやっていると、ピッチャーによって、球速や変化球の曲がり方、フォームが違うことがよくわかります。試合中に、速い球がくるとボールを後ろにそらしてしまうことがあります。もつと練習して絶対に後ろにそらさないキャッチャーになりたいです。

これから、少年野球で試合に出られるチャンスがたくさんあります。その時は、きれいなセンター返しヒットを打ち、ピッチャーの球をすべて捕球し、ランナーを全員アウトにできる選手でいたいのです。

夢を実現するために、プロ野球の試合を見てよい動きをたくさん勉強し、少年野球では、分からないことはコーチに聞いて、力をつけていきたいです。いつか、ぼくがうごきをまねされる選手になりたいです。

友達とは何なのか

大袋北小四年 金 田 里 菜

わたしたちは、学校に行くと友達に会います。友達は、いっしょに遊んでくれる大切ななかまです。友達がいると、毎日がより楽しくなります。でも、友達は家族でも先生でもありません。おじいちゃんやおばあちゃんでもありません。では、友達とは何なのかでしょうか。わたしは、友達とは何なのかを三つ考えました。

一つ目は、いっしょにいてくれるけれど、時々けんかをしてしまうそんざいだと思います。いつも大人数で遊んだり、三人くらいで遊んだりしますが、たまにけんかをして、いっしょに遊ばない日がつづくことがあります。でも、何日かたつとわすれて、いっしょに遊んでいます。けんかするほどなががいいということだと思えます。

二つ目は、相談相手になつてくれるそんざいだと思えます。

「○○君に悪口を言われてるんだ。」

と言えば、自分の気持ちがちよつとでも分かってくれし、先生に言うよりも友達の方が言いやすいからです。

それに、もしかしたら、自分では考えても思いつかないことを言ってくれるかもしれないからです。

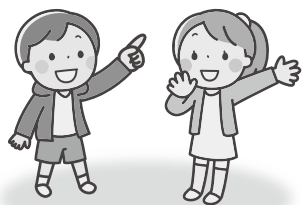
三つ目は、ライバルのようなそんざいだと思います。

「どっちの方が速く走れるか、きょう走しよう。」

「どっちの方がテストの点数がいいか、勝負しよう。」

など、どっちが一番なのか勝負したくなります。負けたりとうぜんくやしいので、そこで勝った友達に悪口を言っけんかになっけしもうこともあります。

このように、友達はいつもなががよくて相談にのってくれるけれど、時にはライバルになったりする人だと、わたしは思います。もしかしたら、明日、友達とけんかをするかもしれません。それでも、わたしは友達を大切にしていきたいです。



## ぼくの家族

大袋北小四年 速水 暁

ぼくには、しょうがいを持った家族がいます。それは、ぼくのお姉ちゃんです。そのしょうがいは、「自へいしょうスペクトラムしょうがい」です。そのしょうがいは、コミュニケーションのしょうがいと、きょう味や行動への強いこだわりがあります。また、自分の気持ちをコントロールしたり何かに集中したりすることがむずかしいです。

ぼくのお姉ちゃんの場合は、大きい音や大きな生物のおき物、人ごみが苦手で、感じようの差がはげしく、気持ちの切りかえがとくいではありません。すぐには思いうかばないけれど、他にもあります。例えば、はく物館のはくせいや大きな生物のこつかく標本をとてもこわがり、てん示の部屋に入ることができません。ぼう音のヘッドホンをいつも持ち歩いて、大きい音がするとヘッドホンをつけます。ヘッドホンをわすれた時は、耳をふさいで動けなくなり、ないてしまいます。ぼくには分からないいきっかけでおこるので、

「またか。」

「家族だし、発達しようがいだからしかたない。」  
と思つて、気持ちが変わるのを待つています。他の家族ははげまします。時には、お母さんがお姉ちゃんんと落ち着くのを待ちます。その時ぼくはお父さんとぼくべつ行動をします。

家族ではない人達からは、どう見えているのか。家族みたいに向つたりゆるしたりしてくれるのか。なれてくられるのか。それとも、悪口を言つていじめたり、むししたりするのか。そう思うと、もしぼくのクラスにそのよくな子が来たら、やさしくせつしてあげたいと思います。いつしよに行動して気持ちの切りかえを手伝つたり、時間がかかる時はなるべく待つてあげたりできたらいいなと思います。

さい後に、ぼくがみんなにおねがいしたいことがあります。それは、しょうがいでもまつている人がいたら、やさしくせつしてほしいし、苦手なことを手伝つてほしいです。そうすれば、しょうがいを持つている子もみんなとやることで苦手なこともできるようになつて、みんなとなかよくできると思います。

## 将来の夢

蒲生南小四年 坂本 結那

私の将来の夢は、助産師になることです。助産師になりたいと思つた理由は二つあります。

一つ目は、小さい子どもが大好きだからです。休みの日はいつも、公園などで妹の友達と遊んでいます。小さい子と遊んでいると、元気になる気がします。

二つ目は、お母さんから私が産まれたときのことを聞いたことです。産まれたばかりの私は、羊水をうまくはき出せず、すぐに他の病院に運ばれたそうです。そのとき、一番に動いてくれたのが、助産師さんと婦人科の先生であり、この話を聞いたことで、私の助産師になりたいたいという思いは強くなりました。私と同じようなけいけんで命を落としてしまう人をへらしたいと思うようになりました。

新しい命が生まれることは、とてもうれしいことで、それを近くで手伝つたり、見守つたりすることができると助産師という仕事はすばらしい職業だと思ひます。新しい命の誕生を近くで見守り、お母さんたちが笑顔になれるようなお手伝いのできる助産師になれるよう、今自分

がやるべき学校での学習をがんばりたいです。また、自分の周りに困っている人や悲しい顔をしている人がいたら、声をかけて笑顔にしてあげられるようなやさしい人になりたいです。



## 世界をめざして

平方小四年 須藤 彩

わたしが今がんばっていることは、バレエです。バレリーナになることが、わたしのゆめです。

バレエを習い始めてから、五年くらいたちました。始めたころは、ここまでつづけることができると思っていました。れん習に行くことがめんどろで、バレエに行くくらいなら本を読んでいたと思うと、れん習にあまり行きませんでした。でも、たまにれん習に行くと、みんながわたしにやさしくせつしてくれるので、れん習がどんどん楽しくなりました。ここまでバレエをつづけることができたのは、やさしく教えてくれる先生やバレエを習わせてくれた両親のおかげです。

バレエをつづけてきたことで、わたしには大切なゆめができました。それは、バレリーナになって、バレエのみ力をたくさんの人に伝えることです。

そのためには、バレエでつかうシューズをはきこなさないといけません。今年の四月から、トウシューズという、つま先で立つことができるくつをはき始めました。自由に使うことがむずかしくて、初めは立つこともでき

ませんでした。そのため、ころんだり足をくじいたりして、うまくおどることはできませんでした。でも「このくつをはきこなして、自由におどってみたい」という思いで、れん習をがんばっています。今では少しずつなれてきました。いつかかた足で、立ったり回ったり、さまざまなポーズをとったりして、自由におどってたくさんの人を感動させたいです。

でも、バレエを習うには、お金がかかります。バレエを習いたくても、かんたんにはできません。ある日、お母さんに、バレエを習っていてもだいじょうぶか、聞いてみたことがあります。その時、お母さんは

「子どもにはいろいろな未来がある。未来を切りひらくのは子ども自身だけど、それをサポートするのが、親の仕事だと思っているんだ。」

と言ってくれました。バレエのれん習などでつらくなる時は、いつもこの言葉を思い出して、自分に言い聞かせています。そのくらい私にとつて、うれしい言葉でした。だから、バレエをつづけることができた、「バレリーナになつてみ力を伝えたい」というゆめは、わたしにとつて、とても大切なゆめです。

自分のゆめは、両親が見まもってくれたおかげでできた、大切なものです。いつかかならずそのゆめを達成し

て、かんしゃの気持ちを両親に伝えたいです。そのため、今日もわたしは、バレエをがんばります。



さべつをしなないで

明正小四年 中本茉莉

わたしはこの前、動画を見てみると、三才ぐらいの男の子がなっていて、それを見た、知らないおばあさんが、「男の子なんだからなかないの。」と言ったという動画が出てきました。

わたしはその動画を見て、どうして男の子だからと言って、ないてはいけなのだろうと、感じました。男の子だからと言って、ないてはいけない。という決まりはありません。なのでわたしはその男の子が、かわいそうだと思います。わたしは、「男の子だから。」「女の子だから。」というさべつをなくした方がいいと考えました。理由は、一人一人みんなちがいます。みんなが不平等に生きるより、みんな一人一人が、たかさんの笑顔で、幸せに生きた方がみんなが楽しく人生を進めると思うからです。みんながちがう生き方をしてはいけないという決まりだつてありません。わたしは、みんな一人一人が、たかさんの幸せを持ち、ちがう人生でも「こうした方がいい。」「これはダメ。」「みんなはこうしてるんだからこうして。」などみんなとちがう人生でも、人生は一度き

りだから好きに生きていい。わたしはそう思います。

わたしはこれから、人のさべつはぜつたいにしないで、一人一人の人生を自分のペースで歩める世界にして行き、みんなが平等に、たかさんの人がいる、幸せで、生きやすくだれも悪いことを言ったり行動したりしないようなみんなが平和にくらせる世界にしていきたいです。なので、動画の男の子のような子がいたら、やさしく声をかけて、

「大じょうぶ」と、声がけをしたり、悪口を言っている人を見かけたら悪口を言っている人を止め、悪口を言っている子をなぐさめてあげて、よりそつてあげたりしたいと思いました。他の理由でこまっている子がいたりしても同じ行動をしてあげたりして、世界中の人びとが平和にくらせるようにどりよくをしていきたいと思いました。



## 勇気を持つこと大切に

桜井小四年 金川心花

わたしが二年生の時のことです。電車ですわつていると、一人のおじいさんがつらそうに立っていました。わたしはその時、ゆずろうかどうかまよっていました。すると、近くのお姉さんが「どうぞすわつてください。」と言つて席をゆずりました。そのおじいさんは「ありがとうございます。」と言つてすわりました。わたしはそのお姉さんの行動を見て、心から親切な人だなと思ひ、わたしもこういう人になりたいと強く思ひました。

しかし、じつさいは、いざ自分が席をゆずろうと思つてもすぐに行動にうつすことができませんでした。わたしは、なぜあの時できなかったのだろうと考えながら電車に乗り続けました。しばらくして、ある駅で電車がとまった時、またお年よりの人が乗ってきました。でもその時周りの席はもうあいていませんでした。そのお年よりの人は、さっきの人と同じくつらそうな表情でした。わたしは、今度こそはと思ひましたが、やはりなかなか言い出せませんでした。すると今度は、やさしそうなお兄さんが、「だいじょうぶですかどうぞすわつてください

い。」と席をゆずりました。その人はとても安心した様子でした。その様子をまた見たわたしは、自分だけなげできないんだらうとそのことをずっと考えながらその日は家に帰りました。

少し時がたち、また電車で出かけることになりました。今度は家族全員でのお出かけでしたが、また前のよいうなことが起きないか、わたしはとても心配でした。しばらく電車に乗っていると、ある駅で一人のおばあさんが乗ってきました。わたしは、今度こそ言おうと思ひましたが、やはりすぐには言い出せませんでした。

しかし、わたしはその時、とても大事なことを思ひ出しました。それは、勇気です。わたしはついに勇気を出して、「どうぞすわつてください。」と言ひました。

すると、おばあさんは、「ありがとう。」と言つてすわつてくれました。わたしはその時とても気持ちがあつつきりし、なんだか心があたたくなりました。

わたしはこのことをけいけんし、勇気をもつことの大切さを感じました。これからもどんなことにも勇気をもつてチャレンジしていきたいと思ひます。



お年よりにやさしくしよう

増林小四年 粕谷 匠

ぼくは、少し前まで八人家族でした。お父さん、お母さん、ぼく、お兄ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんの八人です。

五年前にひいおじいちゃん、二年前にひいおばあちゃん、ぼくがなくなりました。だけど八人でくらしした時間は、ぼくにとつてたから物です。

ひいおじいちゃんと、ひいおばあちゃんは何でも知っていていろいろなことが出来ました。ひいおじいちゃんは絵をかいたり、とうげいをしたり、お酒を飲みながらぼくにたくさんお話しをしてくれました。ひいおばあちゃんはパズルを作ったり、おさいぼうがとく意で、ぬいぐるみを作ってくれたり、ぼくのまぐらのカバーを作ってくれたりしました。

そんなひいおじいちゃんとひいおばあちゃんでも出来ないことがあります。それは、重い物を持つたり、かたいビンのふたが開けられなかつたり、力を使うことです。車に乗るのが大へんだったこともありました。ぼくはどうしてこんなかんたんな事が出来ないのだろうかとうとふ

思ぎでした。

でもぼくは大きくなるにつれて、どうして出来ないのかが少しずつ分かるようになりました。

それは、ぼくは毎日成長してどんどんせがのびたり、力がついていくけど、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃん、毎日年をとつてどんどん力がなくなつていくからです。

ぼくが、ひいおじいちゃん達が大へんそうなお手伝いをする、「ありがとう」と言つてもらえて、心があたたかくなりました。そこでぼくは気がつきました。やさしい気持ちをお手伝いするとやさしい気持ち返つてくるということ。ぼくは一つだけ心のこりなことがありません。それは、ひいおじいちゃん達がいたときは、ぼくはまだ小さかったのでお手伝いがあまり出来なかつたことです。これからは、おじいちゃんとおばあちゃんが年をとつてお手伝いがひつ要になるときが来ます。ぼくは二人が大好きなので、お手伝いをたくさんして、たくさん「ありがとう」をもらいたいです。

「あいさつですてきなかんきょうへ」

南越谷小四年 平野 愛菜

私がかんばつていることは、あいさつです。なぜなら、気持ちが明るくなるからです。また、一人でもあいさつをして、すてきなかんきょうが作れると思うからです。

私の両親は、知り合いに会った時や、住んでいるマンションの人とすれちがった時は必ずあいさつをしています。私は少しはすかしくなつてかげにかくれてしまっていました。そうすると、お母さんから、あいさつしてごらんと言われました。その度に何であいさつしないといけないのだらうと思っていました。

登校する時と、落ち込んだ気持ちで家を出発する日がありました。通学班の待機場所であつむきながら並んで待つている時にお友達のお母さんが

「愛菜ちゃん、おはよう。」

と笑顔で話しかけてくれました。私は、

「おはようございます。」

と返して、自然と笑顔になっていました。安心感、心強さを感じてうれしくなりました。そこで、あいさつの大

切さに気づくことができました。「自分から進んであいさつしよう。」それから、ドキドキするけれど会う人にあいさつし始めました。あいさつを返してもらえるところらしいし、その場が明るくなります。

ある朝、マンションですれちがった人に、あいさつしましたが、むしされてしまいました。私は、とても悲しい気持ちになりました。その場が暗くなつたように感じました。次にすれちがう人にあいさつをする自信がなくなりました。またあいさつを返してもらえなかつたらシヨックだからです。

それでも、私の心の中で「ゆう気を出してあいさつする」気持ちが勝ちました。あいさつをやめてしまつたら、暗いかんきょうになつてしまうかもしれない。それよりも私があいさつをすることで、明るくできた方が、自分も家族も友達も近所の人もうれしくなると思います。ゆう気があるし、たまにあいさつできない時もあるかもしれないけれど、気持ちのいいあいさつが自然とできる人になりたいです。

もう一つ大切に行っていることがあります。それは、「人の気持ちを考える」ことです。小学一年生くらいの子供、友達といっしょに、お昼ご飯に牛丼を食べました。友達は、とても熱そうにしていってなかなか食べられずにいま

した。私は熱いと感じなかったので、

「全然熱くないよ。」

と言ってしまった。お母さんから、

「もし、自分が熱くて食べづらいつ思っている時に、友達に分かってもらえなかつたらどんな気持ちになる？」  
と言われて、考えました。

「悲しい気持ちになる。」

悪気があつて言つたつもりはなかつたけれど、友達の立場にたつて考えたら、ちがう言葉をかけた方が良かったなと気がつきました。

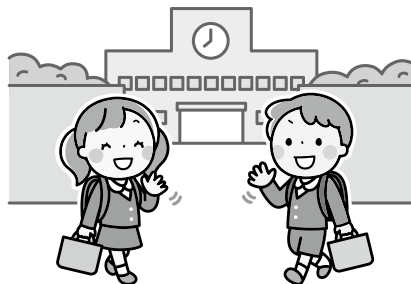
それからは、人の気持ちを考えて行動できるように心がけるようにしています。思つたことをすぐ話してしまつて、後から「ちがう言い方をすれば良かったな。」と反せいすることも多いです。友達に言われてぎずつくこともあります。お母さんにそのことを話すと、決まつてこう言います。

「悲しかったね。その言い方はぎずつくて勉強になつたから、愛菜は次から気をつけられるね。」

算数や国語も大変ですが、こういう勉強もかなり大変だなと思いません。

マンションであいさつを返してくれなかつた人の気持ちを考えたら、もしかしたら悲しいことがたくさんあつ

て元気がなかつたのかもしれないし、おなかがいなかつたのかもしれない。私があいさつする人数は少ないかもしれない。それでも、私とあいさつをして明るい気持ちになつてくれた人が、またちがう人にあいさつをして、明るいかんきょうを広げていきたいです。



## わたしの未来

宮本小四年 春 山 雫

わたしには、しょうらいのゆめがたくさんあります。好きなことがたくさんあるし、なるべくなら好きなことを仕事にしたいと思うからだと思います。でも、やれないうちにもあります。

昔母に「○○向いてそう」と言われ、「○○はむりかな」と言う、「むりと思うとむりになる」と言われ、そのときはそんなことないでしょう、と思いました。だけど、今は、もしかしたら仕事にかぎらずそうかもしれないと思います。たとえば算数で、「できるでしょ」と考える子と、「どうせできない」とあきらめている友達、自分を信じる友達の方がねばり強くやって、早くできていました。

そのときから、+思考で考えて、「がんばればできる!」と思って生活するようになりました。「できないと言うとできない」。そう考えると+思考の方がとくだと私は思います。

話をもどして、わたしのしょうらいのゆめはしほれば二つあります。

一つ目はイラストレーター、もしくはキャラクターデザイナーです。絵をかくのが大好きで、それで人を楽しませたいからです。

二つ目は写真家です。空が好きなので、絵で表せないものを、写真でとって、写真で表せないものを絵で表します。もし写真家になったら、人よりけしきをとりたいです。

この二つはしほったもので、まだたくさんあります。母も、父も、今の仕事を楽しくやっていて、わたしもえがおでできる、仕事をしたと思うし、そのえらんだ仕事を一しようけんめいやりたいです。

もしやりたいな、と書いていたことができなくとも、めげずに、ねばり強く勉強も、いつかやる仕事もやりたいです。だから、わたしは今も、これからますますにえらめずに、ねばり強くがんばりたいです。

「手話」それは、耳が聞こえない人でも会話をして人との関わりをつなげるものです。

わたしは、一年生の時にはじめて「ビリーブ」と言う曲で手話をおぼえました。まわりには、耳が聞こえない人はいませんでしたが、テレビなどで実際にそういう人がいることを知りました。

そこで、わたしは、もしも自分の耳が聞こえなかったらどうなってしまうのだろうと相手の気持ちを考えてみました。

まず、好きな曲が聞けなかったり、友達といっしょに話せなかったり、テレビなどを見ても聞こえないから内容がわからないなどがあると、家族やまわりの人の協力がないと、独りになつてしまい、生きていても悲しい気持ちになるなと思いました。

また、外で車のクラクションの音が聞こえないことがあると、車が近づいていてもわからず、気づくことができませぬ。最近では、信号機の工夫がありますが、命を落としてしまう危険があります。

さらに、学校のじゅ業も分からない。習い事もできない。などがあると、やりたい事も出来なかったり、行事も楽しむことが出来なかったりと、まわりの人は楽しめているけれど、自分だけ悲しく、生きがいを感じる事ができなくなつてしまいます。自分の耳が聞こえないと、知らない人から言われても、分からないから無視されたと思われてしまうなど、耳の聞こえない、音のない世界は想像しただけでもとても怖く、不安に思うことが多いなと思いました。

また怖いだけでなく、鳥の鳴き声や波の音、川の流れる音など、当たり前のように聞こえてくる自然の音も、聞こえないのは、とても悲しいことだなと思いました。音のない世界にいることは、孤独で怖く、辛いものだなと感じました。

耳が聞こえなくなつてしまった人は、生まれつき耳が聞こえない病気や、事故で突然耳が聞こえなくなつてしまった人、様々な理由があると思います。少しでも耳が聞こえない人ともコミュニケーションが取れるように、手話が作られたと思うので、せっつきよく的に話しかけて友達になつたり、困っている人がいたら助けたりして、手話を通じて、相手と自分のできることを広げていきたいと考えました。ビリーブの曲で覚えた手話をきつ

かけに、もつとたくさんの手話を勉強して覚えたいです。

世の中が、耳が聞こえない人向けの習い事が増え、学んだり、楽しめるような場所も増え、ビリーブで手話を覚えたわたしののように、手話の大切さが広がるとよいなと思います。

耳が聞こえない音のない世界でも「手話」という手を使った会話をする事で、不安やきょうふなどの辛い気持ちばかりになるのではなく、少しでも楽しいやうれしいといった温かい気持ちになって、世の中のだけから見ても明るい世界になったらいいな、と心から思いました。私は今回、音のない世界の生活について考えてみて、とても怖くなり、とても悲しい気持ちになりました。また、今まで音のある生活を当たり前のようにすごしてきたことの大切さを、改めて感じる事が出来ました。自分が聞こえていることが当たり前ではないと知り、まわりに感じやの気持ちや思いやりの心をもつて生活したいです。そして手話の勉強をしていつか、耳が聞こえない人と学校の話やふだんの何気ない会話ができたらいいなと思います。ビリーブの歌のように会話できる人が増えてほしいです。

少しでも人の役にたてる薬ざいし

花田小四年 三ツ本 咲 希

わたしのしよ來のゆめは、薬ざいしになることです。そのために、わたしは毎日、体のことや薬のことについて、薬ざいしのお母さんやお父さんと、いつしよに調べたりしています。また、学校では薬のことについて、できるだけ、くわしく書いてある本を選んで、たくさんかっています。でも、薬ざいしになるには、英語がとくに必要なので、習い事や家などでも英語でテレビを見て、練習しています。

どうして、薬ざいしになりたいかという、理由は二つあります。一つは、両親が二人とも、薬ざいしなので大学などに入っても、勉強がおぼえやすくて、一番大学のテストで、テストが受けやすいなと思つたからです。二つ目は、出来るだけたくさんの人を、え顔にしたかつたからです。病気になるつた人がいれば、病気になるつた人の家族も悲しむので、病気の人をなおしてあげれば、病気の人もその家族も、え顔になると思つたからです。

また、わたしは薬ざいしになるために、気をつけていることは、人との話し方についてです。薬ざいしは、か

ん者さんとか、医者ともたくさん話すからです。だから、薬がどのくらいどの量かというのを、しっかりと聞かないといけないので、友達や先生の話の話をさい後まで聞いたり、聞き落としたところは、もう一度たずねたりしています。

それから、わたしが目指している薬ざいしは、ただ薬ざいしになるだけでもゆめがかなったので、うれしいのですが、薬ざいしにもしなつた時に、同じしよく場にいる他の薬ざいしに、少しでも薬にしてあげられる薬ざいしになりたいのです。そんな薬ざいしになるために、わたしが思いうかべたのは、何十という薬を少しでもはやく、薬を見つけることです。そうすれば、きつと仕事へつていくので、よゆうを持つて行動できるようになるからです。

このように、わたしには、薬ざいしになるゆめがあります。また、その薬ざいしの中でも人の役にたてるような薬ざいしです。人の役に立てば、自分にもいいことがかえってくるし、相手をうれしくなると思うからです。そのためには、小さいころからでも、自分のしよく来のゆめにむかつて、何かをがんばることが大切です。これは、どんなしよく業をしよう来のゆめにするにしても、わたしは同じだと思えます。だからわたしは、もし薬ざいしになれないとしても、その時からでも今できること

を考えて、新しいしよく業をさがすなどして、あきらめずにやっていきたいです。また、これからも薬ざいしになるために今出来ることを考えて、いきたいです。



城ノ上小四年 佃 百花

私は、新しい携帯を買ってもらいました。それをきつかけに、よくショート動画を見たり、友達と連絡を取り合ったりして使うようになりました。

いつものように、ショート動画を見ていた時、ある動画を見つけました。それは、ある投稿者さんやそのショート動画の内容にむけてのアンチコメントやよいコメントがかかれたものでした。そのコメントなどに対して、その投稿者さんは、「私はやつぱり消えたほうが良いのでしょうか。」とか、「やめてください。」とか、「そのような言葉をもらえるととても励みになります。」だとかそのような気持ちをショート動画にのせていました。

私はこの事から、全員が、「賛成」と思うのは、滅多にないことが分かりました。また、その動画に対し、「アンチに負けずがんばって。」と、励ましの言葉を与えてくれる人もいます。だから、どうしてもこの人が嫌と言えぬ権利は、世界中の誰ももっていないと思いません。わけては、そのような事は誰が言おうとも、必ず誰かが悲しんでしまうからです。

私は、そのような悲しくなる言葉は、誰しもが持つ、凶器だということが分かりました。だから私は、決してアンチコメントを言う側にはなりたくないし、日常生活の中でも自分勝手に物事を進めると胸が痛んでしまうような人が出てきてしまうので、友達や家族の意見も大切にして生きていきたいです。





明るくて、やさしい世界にしよう。

蒲生小四年 齋藤実玖

わたしのきぼうは、戦争がない世界です。そう思ったきつかけはこども新聞で、中国と台湾が戦争をするかもしれないと書いてあったことと、ウクライナとロシアの戦争から一年以上はたつているからです。

戦争がなくなれば、世界が平和になります。それと、文化が守れます。さいきんは、花火が中止になることがあります。文化が守れませんが、なんと、戦争ともかかわっているのです。戦争のために使う鉄ぼうやばくだんなどに、花火を作るための材料の火薬を使うので、花火があまり作れなくなります。つまり、日本文化の花火が一部地いきで見られなくなってしまうのです。

わたしは思いました。なぜ戦争が始まってしまったのか、なぜ戦争が終わらないのかと。それは、「見た目がちがうぞ」「言葉がちがうぞ」、自分達はちがうというところが始まりです。国ができると自分達のりよう土を守ろうとする争いが起きるようになりました。戦争の始まりは、一万二千年以上前の石器時代にさかのぼります。戦争によるものだと思われるいこつが発見されているので

す。

戦争はなぜ終わらないのか。実は、戦争の「終わり方」というものはあります。一つは、どちらかが国の中心までせめこまれ、国のトップ指どう者が取りのぞかれて終わる場合。もう一つは、そこまでいかななくても、どちらかがこれ以上戦えなくなつてこうふくする場合。第二次世界大戦の時の日本は、さいごにこうふくして終わったそうです。その他、どちらかが勝つこともなくこうふくすることもなく、ぶ器を使つたこうげき戦とうが止まるということもあります。けれど、戦争が始まつてから終わる、ではなくて、もともと戦争はなく、平和なままがわたしはいいと思いました。

ロシアとウクライナの戦争では、約三十一万五千人の人がなくなつてしまいました。戦争で大切な人がいなくなるのは、だれもがいやなことだと思えます。全ての国に戦争がなくなり、なかよくなつてほしいと思えます。だからこそ、わたしは、「見た目がちがう」とか「自分とちがう」ということにとらわれず、男女関係なく、外国人だから、日本人だからとかでさべつしないで平等な関係が作れる人になりたいです。わたしはしょう来、戦争で困っている人たちにやさしくできる人、しえんのためきぶができる人になつていたいです。世界中の人全員

がえ顔あふれるようになってほしいとわたしは思います。

だからこそ、戦争をしないためにできることを考え自分達にできることをしましょう。



## 将来の夢に向けて

蒲生小四年 安松 芹夏

わたしの将来の夢は、かんごしです。どうしてかというと、お母さんに色々な仕事の説明をもらったことがあつて、そのときに、かんごしにきょうみをもつたからです。

わたしが、注射をしにいったときに、きんちようしていたけれど、やさしくかんごしさんが「すぐおわるからがんばって。」

という声をかけてくれてわたしはそのときすこし心がほつとしました。そのかんごしさんが声をかけてくれたおかげで、わたしは、そんなにきんちようしなくなりました。

弟が皮ふ科にいったときに、いたくてあばれていたときにかんごしさんが、「だいじょうぶだよ。」

と声をかけてなぐさめてくれていました。それを見て、かんごしさんはとてもやさしいということがよくわかりました。

わたしは、かんごしさんのようにとてもやさしい人に

なりたいたいと思ったので、きょうみをもったんだと思います。

わたしはその夢をかなえるためにがんばっていることが三つあります。

一つ目は、学校の勉強です。たまにふざけてしまうこともあるけれど、わたしは習ったことをおぼえていられるようにがんばっています。

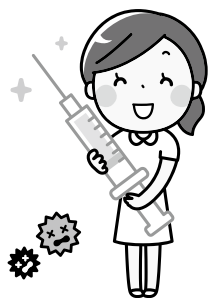
二つ目は、じゅくの勉強です。学校で習ったふくしゅうや、先どりの学習もしています。ふくしゅうは、やっぱり習ったことをしっかりおぼえていられるように、先どり学習は、新しくやるむずかしいところなどにどんどん進んでチャレンジしたいという気持ちからがんばっています。

三つ目は、どんな人にもやさしい言葉を使うようにしています。かんごしさんはいつもやさしい言葉を使っていたので、気をつけています。まだ、強い言葉を使ってしまうことが多いので、やさしい言葉を使うことをがんばりたいです。やさしい言葉を使うには、相手の気持ちを考えることが大切だと思うので、よく相手の気持ちを考えて言葉をえらぶようにしたいと思います。

わたしは、がんばりたいこともあります。それは、心を強く、ゆう気をもつことです。かんごしさんはやさし

い人だと思っていました。ゆう気もひつようなことがわかりました。それは、子どもだけでなく、おとしよりの人や大けがをした人もきていて、命にかかわる大事なこともする仕事だからです。どんな大へんなことがおきても、いつでも冷静にかんじやさんの心をほつとさせられるようにゆう気は、かんごしとしてなくてはならないものだと思います。

わたしは、これからいっしょうけんめい勉強して、将来の夢を实げんさせたいです。やさしくてゆうきのあるかんじやさんの心をほつとさせられるような、かんごしを目ざしたいです。わたしや弟がしてもらったように子どもたちを安心させられるような人になりたいです。



「ありがとう」の言葉

大沢小四年 山田青葉

わたしが、言われてうれしかったことは、二つあります。

一つ目は、わたしが校庭で友だちとタイヤで遊んでいる時に、二年生の子が、

「いーれーてー。」

と言ったので、わたしは、

「いいよ。」

と言いました。そして遊んでいると、その遊んでいた二年生が、転んでしまいました。その子は、足をけがしていました。わたしはどうしたらいいか分からなくてパニックになっている時、遊んでいた友だちが、

「いっしょにほけん室に行こう。」

と二年生の子に言いました。わたしは、ゆう気をふりしぼって、

「わたしも行く。」

と言いました。かたをかしてあげて、がんばっていっしょにほけん室に行つてあげると、ほけん室の、おかべ先生が、

「ありがとう。」

と言ってくれました。そして転んだ二年生の子も、

「お姉ちゃんありがとう。」

と言ってくれました。わたしは、その言葉が気持ちいいということが分かりました。でも先に、いっしょに行こうと言つてあげていたのは友だちなのでわたしは友だちに、

「ありがとう。」と言いました。これからは、友だちのように、小さな子が転んだらゆう気をふりしぼって助けあげたいと思いました。

わたしは、友だちがあ言葉をいわなかったら二年生の子や他の子が助けられないと思いました。なので友だちの言葉がなくても、小さな子を助けられるような人になりたいなと思いました。

二つ目は、わたしが、家でまっている時に、急に雨がふつてきてそれに気づいたわたしは、外にせんたく物がほしてあつてわたしはそれを家の中に入れてだけだったのに、家に帰ってきたお母さんが、

「ありがとうね。」

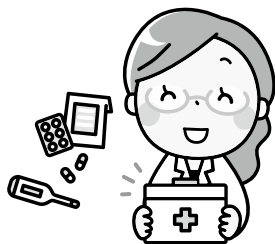
と言われて、ただせんたく物を入れただけでありがとうと言われてとてもうれしくなりました。ほめてもらえるのは、お母さんからだけだと思つていたけど、次の日に

お父さんにも、  
「すごいじゃん。」

とも言われて、おばあちゃんの家に行った時に、おじいちゃんに、

「せんとく物、家の中に入れてあげたんだって。すごいね。」

と言ってもらいました。ただみぢかな事をしただけでたくさんの人にほめてもらえて、わたしは、たくさんみぢかなことでも人がよろこぶことをたくさんしてあげたいなと思いました。



あきらめないことと友達の大切さ

桜井小四年 柳 沢 恵理香

わたしは一年生の時、鉄ぼうがすごく苦手でした。前回りもできなくて、体育の時間に鉄ぼうをやると思うとやりたくありませんでした。

体育の時間になりました。わたしは前回りをしようと思いました。がこわくてできませんでした。しかし、周りの友達みんなできていたので、自分はずかしくなりませんでした。一人で練習する時間になりました。先生が自分の近くに来た時にわたしは、「前回りができないので教えてください。」と言いました。するとせんせいは、前回のやり方を教えてくれました。わたしは、ぜったいにできるようになりたかったので、休み時間にもたくさん練習をしました。したら前回りができるようになりました。そのときはすごくうれしかったし、鉄ぼうをこわいと思わなくなりました。自分が少し成長できたようにおもいました。

二年生になると、今度は友達が逆上がりをするすがたを見てすごいと思い、次の目標を逆上がりをできるようにすることにしました。

しかし、何回練習してもなかなかできるようにはなりませんでした。なのでわたしは、逆上がりがすぐ上手な子と友達になり、教えてもらおうと考えました。

まず、その友達とほじよ板を使って練習することになりました。ほじよ板で練習を続けられるようになりました。次に、ほじよ板を使わないで鉄ぼうで練習を始めました。なかなかできるようになりませんが、何回も何回も練習を続けた結果、ついに逆上がりができるようになりました。

わたしがこの二つのけいけんを通じて思ったことは、最後まであきらめない心と友達の大切さです。練習を最後まであきらめないでやるときつとできるようになります。

だからわたしは、自分を信じてあきらめない心が大切だと知れました。また、もう一つは、友達がいると教え合ったりはげまし合ったりしながら苦手なことにも進んで取り組んでいくことができるということです。友達がいることで学校生活がより楽しく感じます。自分が友達から教えてもらったことや、はげましてもらってできるようになったけいけんをこれから自分でも生かしていきたいです。自分の目標をしつかりともち、その目標に向かってあきらめない心を大切にすれば、ぜったいに自分

の夢もかなうと信じて。



良いところをたくさん見つけよう

出羽小四年 根 岸 宗 範

男子がすぎそうな色といえば、何色でしょうか。多くの人は、青や黒と答えるでしょう。赤や緑と答える人も多少いるかもしれませんが。では、ピンクと答える人はいらっしゃるか。ぼくはあまりいいと思います。なぜでしょうか。それは、ピンクは女子がすぎないイメージがついているからではないでしょうか。でも、実さいにはピンクがすぎない男子もいるでしょう。

ピンクがすぎない男子が、周りの友達に「ぼくは、ピンク色がすぎなんだ。」

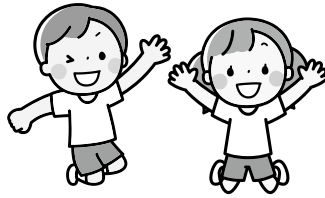
と言ったら、周りの友達はどうするでしょうか。からかうかもしれないとぼくは思います。でも、男子がピンク色をすぎても、別にいいではないかと思えます。

運動でも、にたような事がいえます。運動がとく意ではない男子がいたとします。その男子が、みんなの前で、運動が苦手な様子を見せた時に、周りの人はどんな反応をするでしょうか。気にしない人ももちろんいると思いますが、からかう人も多いと思います。それは、ピンクの色についての時と同じで、「男子は運動がとく意」

というイメージがついているからではないでしょうか。でも、運動が苦手な男子もたくさんいると思います。それを「おかしい」と思う方が「おかしい」と思います。

ぼくは、運動が苦手です。三年生の体育のじゅ業の時に、運動の事だからかわれた事がありました。とてもいやな気持ちになりました。そして、くやくして、悲しかったです。「男子のくせに」と言われましたが、勝手なイメージを持つて、そのイメージとちがうからといって、人からかうのはぜつ対におかしいと思います。また、人の苦手な事に対して、ばかにしたり、からかったりするのもおかしいです。人は、みんなとく意な事と苦手な事があると思います。ぼくは、友達に苦手なところを見つけても、ばかにしたり、からかったりはしたくないと思います。苦手な事がある事は、当たり前だと思っております。でも、人のとく意なところは知らんぷりして、苦手なところばかり見る人がいます。そういう人は、人をいじめたてしまふ事もあります。平気で人をきずつけている事もあります。それは、ぜつ対にいけない事だと思えます。「○○だから」という勝手なイメージで、人をからかったり、人の苦手なところばかり見てばかにしたりすることをやめ、「○○だから」と決めつけないで、その人自身の良いところをたくさん見つけていけば、たくさん

人が笑顔になると思います。「だれがどの色をすきでもいいし、苦手な事がたくさんあってもいい。みんなの良いところをたくさん見つけよう。」とたくさんの人に伝えたいです。たくさんの方がこの気持ちになれば、みんなが必ず幸せになると思います。



## たったひとつの命

東越谷小四年 佐藤 栞奈

十月十五日十七時二十七分、私は、この世界に生まれて来た。この世界に生まれて来れない人や虫や動物、いろいろな命がある中で、私は人間として生まれて来れてよかった。私は毎日がとても楽しい。友達と遊んだり、おいしいご飯を食べたり、大好きなダンスができるからだ。

私は、生まれて来たから、大切な家族にも会えた。お昼ねが大好きなお父さん、おこるとこわいお母さん、あばれんぼうの妹、そして気分屋の私。さわがしいけれど私の大好きな家族だ。

こんな毎日がすごせるのは、うんでくれたお母さんのおかげだ。お母さんとは、ときどき言い合いになる。そしていやな事を言ってしまったり、すなおにあやまれない時もある。けれど本当はお母さんに感しゃしている。元気がない時も、お母さんがおうえんしてくれるとパワーがみなぎる。お母さんは、私のヒーローだ。

そしてお父さんにもたくさん感しゃしている。仕事がいそがしくて、いっしょにすごせる時間は少ないけれど、



仕事が休みの日は、朝ごはんを作ってくれたり、宿題を見てください。

出来る時には、お父さん、お母さんのお手伝いは、しているけれど、もつと恩返しをしたい。今はお金がたくさんないから、花束やプレゼントは、わたせないけれど、大人になったら、色んな事をしてあげたい。お父さん、お母さんは、

「かんなのがんばるすがたを見れてうれしい。」とよく言ってくれる。だから、今は、私のがんばるすがたを見せて、ありがとうの気持ち伝えたい。

友達と遊んだり、おいしいご飯を食べたり、ダンスをしたり、このいつも通りの毎日は、当たり前前に感じてしまふけれど、よく考えてみると私だけのとくべつな毎日だ。だから、毎日を大切に、このたったひとつの命を大切にしていきたい。そして、私がいつかお母さんになった時には、お父さん、お母さんのように、子どもにたくさん愛じょうを与えられるようになりたい。

## やさしいお父さん

大袋北小四年 本田 昂太郎

小学三年生のときの話です。ぼくは、家族で大宮という場所に行きました。お店に行つたあと、エレベーターに乗りました。そしたら目が見えない人がいました。エレベーターからおりたらお父さんが「どこまで行きますか。」と目が見えない人に話しかけました。目が見えない人は「大宮駅まで。」と言いました。そしたらお父さんが目の見えない人を大宮駅までつれていってくれました。人がたくさんいたのでゆっくり目が見えない人のせ中をさわりながら駅までつれていきました。駅についたら目が見えない人は「ありがとうございました。」とお父さんに言いました。お父さんは「ここでだいじょうぶですか。」と言いました。目が見えない人にやさしくして、「お父さんかっこいいな。」と思いました。お父さんも体が不自由な人にやさしかったのでぼくも大人になつたら体の不自由な人や外国人や高れい者にもあたりまえのようにやさしくできる大人になりたいです。いまでも、しょうがい者や高れい者など立場の弱い人たちや外国人などの少数はといわれる人たちのさべつは、日本

のいろいろなところであります。しかしぼくのお父さんが目が見えない人を助けてあげたようなやさしい気持ちを、ぼくたち一人一人がもちつづければ、日本は、そして世界は、もつともつとやさしきにあふれたすばらしい世の中になると思います。そのためには、まずは、ぼくじしんがやさしい気持ちを持って、まわりの人たちに、せつすることから、心がけていきたいと思えます。



「幸せになりたいだけだから」

蒲生南小四年 齋野 初依花

世界では、いろんな国で戦争が行われています。その中には、子どもを戦場に行かせる国があります。それを知り感じたことは、私たちが日々ふつうだと思っていることが、かれらは知ることすらないのかもしれないと思いました。

私がおいしいご飯を食べているとき、かれらは一生けんめい食べ物やさぎがしているかもしれません。私が温かいベットでねているとき、かれらは家がかいされ、つめたいがれきの上でねているかもしれません。私が家族と手をつないでいるとき、かれらにはもう親がないかもしれません。

同じ地球の同じ人間でなにも罪をおかしていないのに、国や言葉がちがうだけでこんなにも生活がかわるということにおどろきました。

命と幸せをうばう戦争から、子どもたちを守るにはどうすればよいでしょうか。

わたしには、知ること、伝えることができます。そして、周りのみんなが知ろうとすることで、身近に起こる

小さな争いが少ない社会にかえることができます。

大きく社会をかえることやできることはかぎられていますが、もしかしたら、一人一人の意識が変わることによって、同じ争いをくり返さないようになると思います。

一人一人の子どもたちが人生を自由にせんたくすることを願っています。



## わたしへの提案

平方小四年 上 田 あかり

わたしは、「わたし」に提案したいことが二つある。

一つ目は、もつとむねをはって生活する、ということだ。わたしは、一年生のころから人見知りで、あまり周りになじめなかった。だから、授業でも、手を上げづらくて、今のわたしから見ても、一人ぼっちだった。でも、硬筆で代表になった時から、他の人からも、「すごいね。」「これからもがんばってね。」と言われて、うれしくて、もつとがんばれる気がした。それから、なるべく手を上げて、周りの人とも、たくさん話しかけることも、今ではもうふつうになっていった。だから、これからは、これらのことがなくても、一人でがんばれるようにしていつてほしい。

二つ目は、たくさんの方に、チャレンジしてほしい。それは、ずっと周りの事や人に気をつかって、やりたいことをやっていないからだ。たまには、「何かやっていい日」があつてもいいから、もう少しいろいろやってみて、それをマスターしたら、それはすごいことだ。それは、自分だけのものにするのか、友達などに教えてあげるの

か。自分ができるようになったことを、教えてあげれば、それは、みんなのためにもなるし、さつき書いたことにもつながるんじゃないかな。だから、少しはなにかにチャレンジして、できることをどんどんふやしていつてほしい。

この二つができれば、後はもう言うことはないから、これを書いたわたしの期待に、しっかり応えてくれれば、それで十分だ。



今がんばっていること

平方小四年 漆山 月姫

私がかんぱっていることは三つあります。一つ目は、習い事のダンスです。私は小学一年生からダンスを習っていました。一年生のさい初は、おどりがおぼえてなかったり、アイソレが上手に出来なかつたりしました。それは、くやしかつたです。二年生になつてから、アイソレが出来ました。それに私はとてもうれしかつたです。三年生になるとセンターになつたり、コーチにほめられたりして四年生になると、たくさん練習してコーチにほめられたり、センターがふえたりしました。それをずっとつづけて、ダンスをおどっていました。お姉ちゃんがチームをやつていて、コンテストでお姉ちゃんがゆうしようして、すごいダンスが上手な人たちのところにお姉ちゃんがでて私はすごいなと思つてお姉ちゃんみたくになりたいなと思いました。

二つ目は、家や、学校のおそうじです。わたしの家には子どもたちがたくさんいます。なので、お母さんやお父さんに全部まかせると、とてもたいへんです。お母さんやお父さんがお仕事るときは子どもたちみんなでおへ

平方小五年 佐藤 咲乃丞

やをきれいにしています。わたしがやっているのは、ふとんたたみや、こどもべやです。二つだけでもすごたいへんです。これをお母さんやお父さんは、毎日やっていると分かったので、毎日できるだけやっています。五才や六才のときはお姉ちゃんたちに何かをたのまれたのですがめんどうしくて、やりませんでした。でも、七才や八才や九才まで大きくなると何でもできるようにになりました。すこしでもみんなのことをらくにさせられたかなと今でも思っています。らくにさせられてうれしかったです。

三つ目は、勉強です。わたしは三年生のときにかけ算ができませんでした。かけ算の勉強があったときはすこくなやんでいました。どんどんみんなとさがついちゃうなと思ってわたしは自主学习にたくさんかけ算を練習しました。それでも、かけ算がおぼえれませんでした。さをつけられちゃうのがいやでたくさん練習しました。四年生になったらむずかしい勉強があるなと思っています。四年生になるとかけ算九九カードみたいなやつがくばられてすごくあせりました。でも思っているときより先生に「いいよ。」と言われてだんだん九九カードにシールがふえていきました。とってもうれしかったです。五年生になっても勉強がんばりたいなと思いました。

赤ちゃんが家に来ました。生まれて七日です。お母さんのおなかはあんなに大きくて重そうだったのに、「こんなに小さいんだ。」とびつくりしました。僕の体の半分もなくて、すごく小さいのに、大きな声でいっぱい泣きます。「うわーん。」とか、「うえーん。」とか。小さいのにちゃんと生きているんだと思いました。

赤ちゃんのこと、サンタさんが教えてくれた最高のプレゼントでした。それから、お母さんのおなかはどうどんふくらんでいきました。おなかを触ってみると、おなかの壁をけているのが分かりました。早く外に出たのかな、赤ちゃんはとても元気です。そして、赤ちゃんは、男だということが分かりました。姉と妹がいる僕にとって、待望の「仲間」です。赤ちゃんに会える日が待ち遠しくなりました。

弟が生まれることがうれしかった僕は、動けないお母さんのお手伝いをたくさんしました。やがて、赤ちゃんは予定日より早く、生まれることが分かりました。おなかの中では元気だけど、無事に生まれるのかとても心配

になりました。でも早く会いたい気持ちもありました。お母さんが病院に行く前に、五人で家族写真を撮りました。お母さんは病院に行きました。お父さんから、生まれた赤ちゃんの写真が送られてきました。おなかの大きさに合わない小ささでした。僕は、おばあちゃんや姉、妹と一緒に病院にかけつけました。赤ちゃんは寝ていて静かでした。

赤ちゃんは僕に似ています。たくさん泣くけど涙が出ません。目がぼつちり開いていて世界一かわいいです。お風呂に入ると笑います。一人では何もできないけど、ミルクはたくさん飲みます。抱っこしてあげると口を開けます。ミルクをくれると思っているみたいです。

赤ちゃんが家に来てから家族がみんな優しくなった気がします。赤ちゃんを見ると、僕のストレスはゼロになります。

お母さんは、おなかが痛いのに赤ちゃんがかわいいからって、頑張つて産んでくれました。だから「命」は大切にしないではいけないと思います。お父さんやおばあちゃんが、お母さんを助けてあげているから、僕も全力でサポートしたいと思いました。

赤ちゃんの名前が決まりました。僕に似ているかわいい弟。世界一かわいい僕の弟。早く大きくなって一緒に

遊びたいです。勉強も運動もたくさん教えてあげて自慢の弟にしたいです。



祖母が私に教えてくれたこと

大袋東小五年 松 本 こなつ

私は、この人権作文で、昨年亡くなった祖母の「むっちゃん」のことについて考えたことがあります。祖母は、十年位前から「パーキンソン病」をわずらっていました。パーキンソン病は、国が指定するなん病の一つで、のうの働きのい常が原因で身体の動きに障がいが起こる病気です。

祖母の場合は、歩く速さがゆっくりだったり、買い物をする時に首が上がり、お金を出すのに時間がかかったりしていました。身体を動かすために、病院ではリハビリをがんばっていました。だんだん動きにくくなり、外出する時には、車いすが必要になりました。でも去年の春に、家族で家の側の公園に桜を見に出かけた時は、動きはゆっくりだけど、いつもと変わらずやさしい祖母のままでした。その時とった写真は家にかざって今でも大事にしています。

車いすで出かけると「おばあちゃん、車いすでかわいいそうだね。」と声をかけて手伝ってくれたりする人がいました。でも、私は、祖母のことをかわいそうだとは思

いませんでした。なんで病気があったり、少し見た目がちがったりすると「かわいそう」なんだろうとすぐくぎ間に思います。

祖母はずつと歯科えい生土をしていたり、ヨガ教室に通ったり、おかし作りが大好きで一緒に買い物に行ったり、公園で遊んだりとても元気でした。身体が思うように動かなくなつてからは、祖母が一番つらかつただろうし、私も「なんで優しいむっちゃんがこんなにもつらい思いをしなればいけないんだろう。」と思つたけれど、周りの人たちから「かわいそう」だと思われるのはちがうように感じました。かわいそうだからやさしくしよう、ではなく、そういう病気があることを分かつた上で困っているから助けようという気持ちの方がいいと思えます。祖母のことだけじゃなく、お年寄りや病気や障がいのある方たちは、なりたくてなつた訳ではないので、「かわいそう」だと思われて手伝うことは悲しいことだと思います。家族だけでなく、社会や地いきの人がせつし方を変えることができればみんながすごしやすくなると思います。そのために、病気や障がいのことを、もつと知ることや身近に感じる事が大事だと思います。

病気や障がいについて身近に感じるため、学校で習ったり、交流したりする機会があればと思いました。祖母

は動かない身体を上手に使って自分たちよりも器用にこなすこともあり、すごいなと思うこともありました。このように、知ったり、ふれ合ったりする機会が小さいころからあれば、「かわいそう」だとは思わなくなると思えます。

かわいそうだから助けるのではなく、困っていたら助け合う、そんな地いき社会になつていけばたくさんの方が気持ちよくくらしたいと思います。私は祖母の病気のことで人を見た目で判だんせず、優しきで助けてあげる気持ちが大切だと知る事が出来ました。むっちゃんが教えてくれたたくさんの方のことをこれからいろいろな人に伝えていきたいと思えます。



## 全力プレーで恩返し

平方小五年 千葉 清之介

お父さんとの練習は、必ずキャッチボールから始まる。近い距離からでも、力を抜かず強いボールをガンガン投げてくる。ぼくは、その強さに驚いて、ポロポロとボールを落としてしまう。そういう時は悔しいから、ボールを落としたことよりも、お父さんが構えているところにもっと強く投げ返そうとする。いつだって、ぼくのお父さんは、全力で、ぼくと練習してくれる。お父さんが全力なのがわかるから、僕も手は抜けない。野球をするときは、常に全力でやっているつもりだ。

お父さんが野球好きで、よくテレビ中継をいっしょに見ていた。いつしか「野球選手になりたいなあ。」と思うようになり、地域のチームに入った。チームには、同じ五年生がたくさんいる。仲間と野球をすることは、とても楽しい。僕がバッターボックスに立つと、大きな声で応援してくれるし、「ミスをしても大丈夫だよ。」と言ってはげましてくれる。でもそんな仲間も、時にはライバルになる。調子が悪ければ、レギュラーを取られてしまうかもしれない。



本当に大切なもの

平方小五年 氏 家 采 愛

お父さんとの練習を重ねるうちに、僕はだんだんうまくなつた。試合にもたくさん出られるようになったし、ヒットやホームランも打てるようになった。今はチームのピッチャーとして出場することもある。

お父さんが、僕との練習の時、いつも本気で全力なのは理由があるのだと思つた。全力で練習しなければ、上達しないからだ。きつとお父さんは、僕に無言で教えてくれているのだと思つた。「もつと力を抜いてくれればいいのに・・・」と思つた時もあったけど、今はお父さんに「ありがとう」の気持ちでいっぱいだ。

お母さんは、毎日おいしいご飯を作ってくれる。僕の好きなものばかりだけじゃなく、体にいいものやバランスを考えて、一生懸命作ってくれる。これも毎日全力だ。僕のやりたいことが叶うように、支えてくれるお父さん、お母さんは最高だ。なん回「ありがとう」を言つても足りない。だから、ぼくは、お父さんとお母さんが教えてくれた「全力」をこれからも続ける。そして、夢が叶つたら、すごいプレーを見せてあげる。だからいつまでもいつまでも元気でいて。ありがとう。お父さん、お母さん。

私は家族がたくさんいます。第二人、妹、父、母、私。六人家族です。一番下の弟は、まだ一歳半で、おむつもしているし、ご飯も一人では食べられません。もう一人の弟と妹は保育園に通っています。小さな弟や妹のお世話だけでも大変なのに、母は、私や赤ちゃんの弟の世話まで一生懸命してくれます。だから私も、母のお手伝いをたくさんします。父も手伝います。みんなで助け合うことが、今では当たり前です。そんな私に、母はいつも「ありがとう。」と言つてくれます。私は母の「ありがとう。」がうれしくて、もつと頑張りたくなります。そんな家族が私は大好きです。

父は、私が楽しいと思うことをたくさんしてくれます。小さい弟や妹と区別することはありません。とてもやさしくて、わからないことがあると、何でも教えてくれます。私は父が大好きです。

私が小さいころ、父とは血が繋がっていないことを知りました。何でだろう、変だなと思いました。母にそれを話したことがありました。母は、「血のつながりは

関係ないでしょ。」と言いました。確かに、いつしよに仲良く助け合っている大好きな家族に、見えない「血のつながり」は関係ないと思いました。私が幸せと思っているのなら、気にする必要がないからです。

父は、私が学校でもお手伝いをしたり、勉強を頑張っていたりすることを聞くと、たくさんほめてくれます。父が私を大切に思ってくれているのがわかってとてもうれしいです。

世界には、いろいろな事情で本当の親と暮らせない子どもがたくさんいます。里親や養子縁組などで、新しい家族と暮らしている子どももいます。私は、「血のつながり」ではなくて、その人が「幸せ」かどうかだと思います。

人の考えはそれぞれです。人の幸せもそれぞれです。私は、父と母の子どもで、本当によかったと思います。だからとても幸せです。

私は、この幸せがずっと続くように、私の家族を大切にしたいです。

## 私の「命」と「病気」のこと

平方小五年 加藤 心愛

「今を一生けん命生きること」が、私のモットーだ。だから、クラスの代表にも進んで立候補する。できる仕事は何でも挑戦する。今はクラスの代表として学年委員を務めている。授業は、絶対手を抜かない。たくさん指名してもらえるように何回も手を挙げる。失敗しても何のその。誰がどう思おうと、私は自分の考えや思いを発表する。運動は苦手なものもある。でもあきらめない。絶対、自分にも友達にも負けたくない。私はスーパー負けず嫌いだ。

私には、病気がある。今も定期的に、お母さんと病院に行く。私のために仕事を休んで遠い病院まで連れて行ってくれるお母さんには、心の中でいつも「ありがとう。」と言う。伝わっているかな。病気だから、私は乳製品が食べられない。体にぶつぶつができてしまう。だから、みんながおいしそうに食べている給食も食べられないものがある。病気の詳しいことはよく知らないが、もしかして病気が悪化してしまったらどうしよう、みんなより長く生きられないかもしれない、と時々考えるこ

とがある。怖くて怖くてたまらない。

五年生になって、新しいクラスになった。今までも病気と向き合っていて、いろいろなことを頑張っていたけれど、頑張りたい気持ちが増え大きくなった。不安やこわさは消えないけれど、今私はもつともつと力いっぱい生きたい。

頑張りたいこと一つ目。病気を絶対直す。これは必ず叶える。きらいな薬もきちんと飲む。

頑張りたいこと二つ目。友達をたくさん作る。友達を大切に作る。大切にするといいことは、友達の心が和むようにやさしくしたり気遣ってあげたりする。

頑張りたいこと三つ目。勉強のライバル、いつもすごいなと思う友達に負けられないよう努力する。

あたり前なことばかりかもしれないけれど私は自分の命の一日一日が「頑張ったなあ。」と思える日にしていきたい。

大好きなお母さん、お父さん。けんかばかりだけど、私を笑わせてくれる楽しいお兄ちゃん、私は頑張るから応えんしてね。見ていてね。

## 先生との約束

千間台小五年 平野心彩

わたしのしよう来の夢は、幼稚園の先生になることです。この夢は、わたしが幼稚園の年長のときからずっと変わっていません。

わたしが幼稚園の先生になりたいと思ったのは、年長の担任の先生だったゆい先生にアコがれていたからです。ゆい先生は、いつも笑顔でとても優しい先生です。幼稚園バスに乗るときにお母さんとはなれたくなくて、わたしは毎朝泣いていました。そんなときにゆい先生は、「幼稚園と一緒にいこうよ。楽しいよ。」

と言って、手をつないでくれました。先生は優しいだけではなくて、面白い先生でした。お誕生日会するときには、マジックをしてくれました。先生が真っ白だったノートから、ミッキーのぬり絵を出してくれたとき、みんなはとてもおどろいて、「うわあー」「すごい。」というかん声がわいたのを、今も覚えています。だんだんと幼稚園が楽しくなって、わたしはもう朝に泣かなくなっていました。卒園式のときに、ゆい先生とはなれたくなくて、わたしは泣いてしまいました。ゆい先生はわたしを抱き

しめてくれて、

「心彩ちゃん。幼稚園の先生になって、また会おうね。」  
と言ってくれました。わたしは、

「うん。ゆい先生と働きたいから、絶対になるよ。」

と約束しました。そのときの先生との約束を今もよく思い出します。

わたしはきつと、幼稚園の先生に向いている、と感じることがたくさんあります。それは、いとこのみつはお世話をしているときです。みつは、今、四才の女の子です。背が小さくて、めがねをかけています。家となりなので、赤ちゃんの頃からよく遊んでいます。わたしが家にいると、げん関のチャイムを押して、

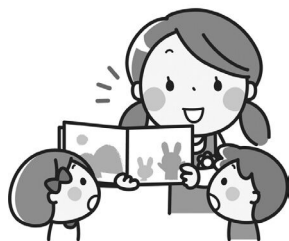
「みっちゃんです！ここ、遊ぼう！」

と言つて、よく遊びに来ます。お人形遊びやおままごと、たたかいごっこに絵本の読み聞かせなど、わたしは大いそがしです。言うことを聞いてくれなかつたり、わがままを言つたりして大変だけれど、とてもかわいくて、だっこしたくなるほど大好きです。幼稚園の先生になつたら、みつはみたくないかわい子どもたちがたくさんいると思うと、わくわくしてきます。

幼稚園の先生という夢をかなえるために、わたしががんばっていることが三つあります。一つ目は、ピアノの

練習です。一年生のころから、習い事をしていました。ゆい先生もピアノが上手で、みんなで楽しく歌っていたのを覚えています。自分で歌いながらピアノが弾けるくらいに上手になりたいと思います。二つ目は、硬筆です。幼稚園の先生はホワイトボードや連らく帳などに字を書くことがあるので、きれいな字で書けるように練習しています。三つ目は、どんな人にも優しくして、自分から話しかけることです。わたしはたくさん友達がいいと思うし、みんなの笑顔が好きだからです。

しょう来の夢をかなえるために、努力しなければならぬことがたくさんあると思うけれど、先生との約束を守るために、これからもがんばりたいと思います。



## 障がいのある方への差別

大袋東小五年 石塚 美 有

私の母は左手の指がない。

たったその一つのこと、決めつけられたり、からかわれたりした、と母は話してくれた。

母が小学生のころ、当時の人々は

「指がないなんて変。」

「指がないなんてかわいそう。」

などと、障がいのある人に対してマイナスなイメージをもつ人が多かったそうだ。そのため、とても苦しい思いをしていたという。鉄棒の授業では「できません。」と言ってもやらされたり、休めたとしても「ずるい。」と、友達から暴言を吐かれたりすることもあったそうだ。

今は、障がいのある人に対して、暴言、暴力をしない世の中になっているため、私の周りにも理解してくれる先生が多いと思う。しかし、大人や子ども、この世界の人々全員が障がいのある人への差別をしていないというわけでもない。その理由はきつと、全ての人々が、障がいのある人の気持ちを分かっているからだろう。この世界の人口の約一五パーセントが、障がいのある人だそ

うだ。どうすれば、その数少ない人たちのことを知ってもらえるだろう。それを考えたときに私は、障がいのある人へ苦しい思いをさせたくないという思いをもち、私たちが動かなければいけないのではないかと、みんなを尊重することを一人一人が心がけることで、障がいについて知らない人たちも行動してくれるはずだ、と思った。

障がいのある人の苦しい気持ちをなくすためには、みんなが同じ接し方をし、自由をうばわれない世界を作っていくことが大切である。

よくお店などで、「障がい者の方、割引します」といったものを見かける。ひよつとして、これも差別なのではないかと私は思った。もちろんうれしい人もいるだろうけれど、差別になりかねないのではないかとも思う。障がいのある人にとって、それを差別と感じているのかは私には分からない。しかし、割引をすればうれしいという決めつけも、この世界から消えてほしいと思う。

ほかに、盲導犬をつれて入店を拒否されたというケースがある。目が不自由な人からすると、欠かさない存在である盲導犬の入店を拒否されたというのは、私たちがメガネをつけて行ったら入店を拒否されたことに近いと言える。似たようなことを障がいのある人はされているのだ。

他には、介助者と病院に行つたときに、介助者に向けて、医師から話をされたケース。一番話を聞きたいのは障がいのある人の方なのに、なぜか介助者のことのように話をされたということもあるそう。もし私が同じ立場だつたら、「何で本人に話していかないの。」と思つてしまふ。これはきつと、障がいのある人も同じ気持ちなのだろう。

そのような障がいのある人への差別をなくすためには、苦しい思いをしている人のことをよく知ることが大切だ。そんな苦しい思いをさせないためには、みんな同じように接しなければならぬときがあるということを知り、頭に入れておいてほしい。

この世界から、障がいのある人への差別がなくなることを願う。



## 「自分らしさ」を大切に

大袋東小五年 齋藤 あずさ

私は、女の子です。でも、自分のことを「ぼく」と言っています。

私が「ぼく」と言い始めたのは、保育園の頃でした。言い始めた当時、園の先生に、

「女の子は自分のこと、『ぼく』って言わないんだよ。」と言われたことがあります。当時は全く理解しておらず、何も気にしていませんでした。小学校に入ると、自分のことを「わたし」や「ウチ」と言うようになりましたが、二、三年生のころには「ぼく」にもどってしまいました。五年生になつても「ぼく」のままです。最近お母さんに、

「もう五年生なんだから、『ぼく』って言うの直さなきゃだめだよ。」

と言われてしまいました。

ある日、ニュースで男女差別についてやっているのを見ました。それで私は、

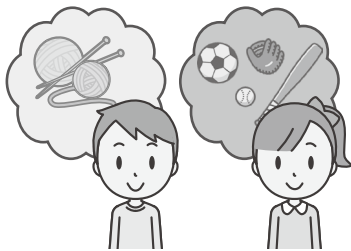
「自分のことを『ぼく』と言って何が悪いのか。」と改めて思いました。しかし私は、これまでに自分も「男の

子なんだから。」と友達に言ったことがあることに気が付きました。自分は差別をしていない、そう思っているけれど、本当はだれかを無自覚で差別しているのかもしれないと思い、今までの行動や「男の子らしさ」「女の子らしさ」について考えました。例えば、女の子がサッカーが好き、男の子があみ物が好きなことに對して、女の子らしくない、男の子らしくないと思ったことがあります。けれど、自分がなぜそう思うのかは分かりませんでした。好きな物は好き。変なことなんて一つもありません。私が勝手に心の中で変だと思い、かんちがいをしていたのだと気が付きました。

私は、周りの言う「らしさ」にしばられず、みんなが自由に選ぶ権利をもつことが大切だと思います。それから、今まで私は、無自覚の決めつけで人を見ていたのかもしれない、そう感じました。自分の好きなことや物をばかにされたり、からかわれたりしたら自分でも悲しいです。

もしかしたら、これからもだれかを無自覚で差別してしまったり、傷つけたりしてしまうことがあるかもしれません。しかし、それでも仕方がないという理由にはならないと思います。差別しない、からかわないのが一番ですが、もしも何かを言われてしまっても、「らしさ」

というものにしばられずに、自分が好きなことなら堂々とやっていけばいいと思いました。私も、自分らしさを大事にしようと思いました。また、自分だけでなく、周りの人々や世の中でも、「らしさ」にしばられずに、だれもが自分の個性を大切にできるようにしたいです。そのためには、周りの人も、それぞれの個性や好きなものをからかわずに尊重することが大切なのです。



## 未来の地球が大ピンチ！

南越谷小五年 岩 本 紗 季

わたしは学校で総合の学習をしています。その総合で、わたしは水質汚染について調べています。そして、昨年わたしが参加した、「クリーンパトロール」を思い出しました。

わたしは楽しそうと思い、軽い気持ちで参加しました。クリーンパトロールがはじまりました。ひろったゴミは、たばこばかりです。

「どうして、まだまだ最初なのにゴミがこんなにたくさんあるの。だいたいなんでたばこばかりなんだろう」と思いました。わたしはみんなとはちがうルートをいきました。やっぱり行く先にまちうけているのは、たばこたばこたばこたばこ。

「地球はたばこ星なのか！」

とさえ思いました。たまに、ビニールぶくろやプラスチックなども落ちていました。

そして、クリーンパトロールがしゅうりょうしました。集めたゴミを入れていくぶくろを見ました。とてもおどろきました。中には、たばこはもちろん、ティッシュペー

パーやペットボトル、プラスチックのトレーなどわたしが見ていない大量のゴミがあったのです。

「う、あ、すごい。」

思わず一人でこう言ってしまった。家に帰ってから、あのぶくろのことが忘れられませんでした。そして考えました。このままではどうなるだろう。ほうつておいて、よいのだろうか。そして、気づきました。

いまの地球は、大ピンチです。未来をつくるのは、わたしたち子どもです。わたしの調べている水質汚染もそうです。むだづかい、ゴミをなるべくへらす。そうするだけで、わたしたちの地球は大きく変わります。ぜひみなさん、地球を大ピンチからすくってください。





## 人種差別はダメ

大沢北小五年 狩野 湊斗

ぼくは、ニュースやじょうほう番組が大好きです。ある日、ぼくはニュースでほうどうされていた話題に目にとまりました。それは、黒人の少女だけにメダルをわたさないということでした。アイルランド体そう協会が主催した子ども向け体そう競技会の表しよう式で一列にならんだ少女たちにメダルをじゅよしていました。ところが、黒人の女の子にはメダルをじゅよせず、となりにならんでいた女の子たちにメダルをじゅよしそのままメダルをじゅよしていた、女せいは、立ち去りました。黒人の女の子は戸まどいの表じょうをかべていて、「なぜ私にはメダルをかけてくれなかったの。」という思いが伝わってきました。

ぼくは、人種差別をされたことはいけれど、ぼくより年下の女の子がそんな悲しい思いをさせられたことに對して、はらが立ちました。

人種差別は、してはいけません。なのになぜ、大会をしゅさいしている大の大人が小さい子どもにそんなことをするのか不思議に思いました。

ぼくは、白人も、黒人も、黄色人種も、何色人種でも同じこの世に生まれた、同じ一人の人間だと思っています。人種差別は、同じ一人の人間なのに、仲間はずれや、いじめ、などどれも人の心をきずつけたりするこういんです。自分は、する立場も、される立場もイヤです。

このことだけではありません。世界では、様々な人種差別があります。ぼくはそんなことをしないやさしい人になりたいです。人種差別での、戦争や、ふん争がいまでもつづいています。そのせいで、子どもや大人が今、この人けん作文をかいているときもどこかで亡くなっています。

ぼくは、そんな世の中であつてほしくありません。地球にいる一人一人が安全安心で生きられる、社会になつてほしいと思っています。

そういうだれもが「しあわせにくらせる」という社会をつくるために、自分たちにできること、SDGsや、いじめられている人がいたら助けたり、ぼ金をしてよりよい社会をつくりたいです。

この先、もしかしたら、近くの友だちが差別をしている、されているということが起こり得るかもしれません。そんなときは、注意したり、やさしくよりそつてあげたいです。

また、自分も、人種差別をぜつ対にしません。

差別のない世界になるよう、自分たちができることは「やります。差別のない世界になるよう、「ねがつています。」



## 学びから広がる多様性

大沢小五年 中山 桃 佳

私は今、けやき（そう合）で障がい者について習っています。見ためで分かる障がいや見ためでは分からない障がい、生まれつきの障がいや生まれてから病気や事によつての障がいなど色々な条件があります。私は障がい者を理解して受け入れていくことが大切だと思えます。しかし、そう感じることはできるけれど実さいに受け入れていくには時間がかかります。そこで私はまず、障がい者について知ることから始めていこうと思えました。

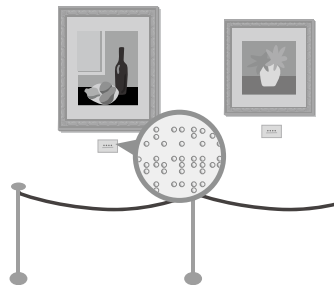
そんな時、星野富弘さんが亡くなったというニュースを目にしました。星野富弘さんはどんな人なのかお母さんに聞いてみると、昔中学校の体育の先生をしていて、クラブ活動の指どう中に首のほねを折ってしまい首から下がまひしたため、手足の自由を失ってしまったそうです。けれども口で筆をくわえて、文字や絵をかいていた人だということを知りました。富弘さんは絵に合わせた詩などもかいていたそうです。群馬県みどり市に富弘さんの美術館があり、私はゴールデンウィークに美術館に

行ってみることにしました。ちょうどお母さんの実家が近くにあるので帰省のついでにおばちゃんと一緒にまわりました。館内は色々な部屋があり、点字表示の場所やビデオルームなどもあつて、だれでも楽しめるようになつていました。さまざまな詩や絵があり、見ごたえがありました。その詩の中には事こによつての富弘さんの気持ちなどを表す作品もありました。物事に対する発想がおもしろく、おもわずおばあちゃんと笑つてしまいました。私が特に心に残つた詩は三つあります。一つ目は「小さな実(ぐみ)」です。理由は感しやをする事の大切さを学ぶ事ができるからです。二つ目は「苺」です。私には思いつかない発想のある詩だからです。三つ目は「いのち」です。本当に大切な物とは何なのかを考えさせられるからです。

私は障がいを持つていても、自分にできることを考えていてすてきな作品を作つていて感動しました。実さいに美術館に行つて障がい者の不便な部分や大変だなと思ふ部分もありましたが、そこから活かしていける事もあると知りました。

これからは、このように少しずつでも障がい者について知り、身近に思うこととおたがいに理解して受け入れていく事ができると思いました。けやき(そう合)の学

習では、少しずつ障がい者についてきょう味をもち知つていつて理解しあえたらいいなと思います。



## 目の不自由な人が安心できる社会

大沢北小五年 武村望愛

私が習い事に向かっている最中、駅の階段で白杖を持つた人を見かけました。私は人ごみの中だったので、転ばないかな、大丈夫かなととても心配に思いました。

人間は、見る、聞く、かぐ、さわる、味わうの「五感」で情報を得ていますが、このうち視覚から得ている情報が八十七%を占めると新聞にかかっているのを見たことがあります。

目が不自由な人はそれだけ、得られる情報が少ないということです。

目が見えない世界は、想像するだけでも怖いのです。実際に学校の授業で目かくしをした状態で白杖をつけて廊下を歩いたり、階段の上り下りを体験しました。その時、自分が思った以上に不自由で不安な気持ちになり、とても怖かったです。そんな思いをしながら、目の不自由な人は、日々生活をしているので凄いなと思いました。

私が体験した時は、友達が手を貸してくれていたのですが、少し安心感がありました。駅で見かけた人は、支える人もいなくて一人で階段を下りていたので、一段一段下

りて行くたびに大丈夫かなとヒヤヒヤしました。でも、階段をと中まで下りた所でお姉さんがその人を助けてあげていました。その時、私はその人を見て心配していただけでしたが、お姉さんのように手を貸して、最後までしっかり見守ってあげられるような人がいてとてもすてきだなと思いました。

また、目が不自由な人専用の道を作り、安全に道を進動できるようにしたいと思います。そうすることによって、人ごみでも、道が不安定な所でも目が不自由な人にとって安心して安全に道を通行できるからです。それでもお姉さんのように危険だと思えばすぐ助けられるような人がいると、さらに安心でき、安全に過ごせるのだと思いました。

私は、体験したときの怖さで、目が不自由な人はもつと大変な思いをしていると思うととても心配でヒヤヒヤしたけど、お姉さんのようなやさしい人や点字ブロックや信号の合図、などの様ざまな工夫から目が不自由な人も幸せで安心にくらせるのだと感じました。私もお姉さんのように危険だと思つたらすぐ助けられるような人になりたいです。

心のかべをなくすために

大袋北小五年 須田陽仁

よく耳にする障がい者とは何だろうか。辞書には、「精神や身体の器官が何らかの原因または病気やけがなどで本来の機能を果たすことができない事や状態」とかいてあります。目や耳が不自由な人、足が動かない人など、世の中にはたくさんいると思います。その人たちが生活しやすい世の中なのか考えてみました。

ぼくには卵アレルギーがあります。周りの人から「食べられなくてかわいそう。」だとか、「大人になって食べられないと困るよ。」とか言われたことがあります。ぼくは、食べてみたいと思ったことはありませんが、自分がかわいそうだとか大人になってからの不安を感じたことはありません。なぜなら特に困ったことは今までなかったですし、今の世の中ではアレルギーへのはいりよも多  
く不自由に感じたことがないからです。

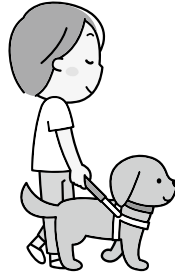
身体に何らかの障がいをもっている方も「かわいそう」だとか「不自由だろう」とか言われることも多いと思います。障がいをもっている人を目で追ってしまったり、こそこそ話してしまうことは、自分とちがうと思ったり

ふつうじゃないと感じてしまうからだと思います。ですが、障がいを持つている人たちはとても生き生きと生活して楽しんでるように思います。それは、スロープや手すり、点字ブロックなどいろいろなところに配りよがされるようになり、生活しやすい世の中になったことが考えられます。しかし、人の心のかべというものは今も残っていると思います。助け合うために目を向けているのか、「自分とはちがう」「かわいそう」という思いから目を向けているのか、これは目にみえる障がいをもっているからこそ起こりうることであったと感じました。

時々、「ふつう」とはなんだろうと考えます。ぼくのアレルギーも、他の人からみれば「ふつう」ではないのかもかもしれません。ですが、それを受け入れ、周りの友達も受け入れてくれているからこそ、ふつうじゃないと考えたことはありません。目に見えるからこそ声をかけられたり、助け合えたりすると思います。そして目に見えないものも、助け合えれば何も問題ないと思います。

人はみなそれぞれ個性があり、人と同じことは少ないと思います。みなそれぞれちがうことはあたり前であり、みとめ合えればみんなが生活しやすい世の中だと思えます。身体の障がいも、アレルギーも、それだけでなく背が高い低いなど、障がいとしてでなく個性として受けと

れる社会になるととても気持ちのよい世の中になると思  
います。かんきょうだけでなく心のかべもなくなる、人  
と人が助け合い支え合える世の中になっていければいい  
と思います。



## 夢に向かつて

千間台小五年 倉淵 葉月

私には、「学校の先生になりたい」という夢があります。それには理由があります。

私は、小学生になるまでは、ほかの夢を持っていました。けれど、学校に通いはじめて、変わりました。学校の先生は、私たち児童のことを、どんなときも助けてくれました。分らない勉強があったら教えてくれたり、いやなことや悲しいことがあったら、いつでも相談にのってくれたり、だれかをいじめている子には、注意してくれたり、そんな先生に、私はいつも助けられました。それに、先生の授業は楽しいし、話していると、自然と元気になりました。そんな存在に、私もなりたいと思いました。今の私は、友達は少なく、集団で生活することは苦手で、ネガティブ思考だけれど、夢に向かつて少しずつ、一步をふみ出していきたいです。そして、いつかは夢をかなえて、みんなを元気にさせられる、私のあこがれている先生のような存在になりたいです。

でも、私の親は、私の夢に反対しています。児童の親に文句を言われたり、残業代が出なかったり…確かに親

の言うことは正しいかもしれませんが。それで一回、あきらめかけたこともありました。学校の先生は、とても大変な仕事なんだな、と思いました。しかし、私は、あることに気がつきました。大変じゃない仕事なんてあるのでしょうか。人生は、すべてが上手くいくわけではなく、いくつもの「壁」があると、私は思っています。私の親が言っていたのも、学校の先生をやっているうちに立ち上がる、壁だと思えます。でも、どんな仕事につきにも壁はあると思うし、それを恐れていたら、夢はかなわないと思います。だから私は、どんな壁があるとしても、だれかに反対されても、夢に向かってがんばっていききたいです。

私は、この数年間で、夢は自分で決めて、どんな壁があってもあきらめたくないということを、強く感じました。これからも、今までと同じように、夢に向かって、今できる努力をしていきたいです。



## 私の相棒

花田小五年 竹 本 千 咲

私ががんばっていることはフルートです。私は、半年くらい前に「越谷ジュニアユースオーケストラ」に入団しました。そこでは、学校や年れいに関係なく一緒に演奏ができる場所なので、楽しく通うことができています。

最初の演奏の時は、かすれた音のソ、ラ、シしか出ず、先に入団していた高校生のお姉さんとはとてもうまく吹けていました。自分はこんなにうまく吹けるのかな、と心配に思っていました。けれど、練習を続けた結果、今では色々な音も吹けるようになり、音もきれいになってきました。

四月にサンシテイの小ホールで第一回定期演奏会が開かれました。ホルスト作曲「木星」とカエルの合唱を演奏しました。「木星」はアンサンブルでやったので、それぞれの楽器の音色がよく聞こえました。「かえるの合唱」では、先生を含めて約六十人以上で演奏したので、美しく重なった音がして感動しました。そして、コンクールを頑張ったご褒美に、自分の楽器を買ってもらったこと

になりました。今まではレンタルのフルートを使っていたので、やっと自分の楽器を持つことができるとうれしく思いました。

自分のフルートを運ぶために、ゴールデンウィークに銀座の楽器店に行きました。そこにある試奏室で四本のフルートを吹き比べました。そこでは、明るい音や暗い音、軽い音や重い音のフルートがありました。その中でも私は二本のフルートが気に入りました。そのとき改めて私はフルートにも個性があるのだとわかりました。

新しいフルートに変わってからは、音色が明るく綺麗な音になりました。練習がすごく楽しく、ますます練習が楽しみに変わりました。

フルートは使っていると色が黒っぽく変色していくけれど、私の新しいフルートはまだ白い銀色で、指紋が一つも付いていません。自分の楽器を持つていたことを嬉しく思うと同時に、私は本格的にフルートを始めるのだから、改めて気を引き締めました。

私の次の目標は、第二回定期演奏会です。私には憧れの曲があります。それはヨハンシュトラウス作曲のラデツキー行進曲です。けれど、ラデツキー行進曲を演奏するにはCクラスになる必要があります。私は今Aクラスにいます。Cクラスになるために、わからないところは

先生や家族に聞いてみたり、インターネットで調べたりしたいです。これからも相棒のフルートとともに、大人になってもずっと演奏を続けていきたいです。





すてきなチームでみんなが楽しく

蒲生小五年 浅沼花那

私は今、新体操をがんばっています。次の大会は、一つ下の学年の子と同じ学年の子と五人で団体の競技に出場します。私は時々リーダーをする事があります。その時に、リーダーは大変だなと思う事がたくさんあります。リーダーはチームにとつてとても重要で、リーダー次第で、その日のチームの雰囲気は全く変わります。

私がリーダーをする時に心がけている事は、「みんなが練習しやすい雰囲気を作る」事です。そのために、私ができるようにしています。チームのみんなが練習しやすくするために、リーダーは聞き上手になって意見を言いやすい雰囲気を作ることが大切だと思います。例えば、「ここ大丈夫？」と確認したり、「練習したい部分ある？」と聞いたりしています。意見が出ない時には、自分がリーダーなので、「ここを練習しよう」と決めたりしています。

話をする時の言葉づかいや言い方もとても大切だと思います。例えば、声が小さい事を伝える時に、「みんな

でもっと声出していこう。」と言われたら、私だったらやる気が出ます。でも、「みんな全然声出してない。」と言われたら、少しいやな気持ちになってしまいます。「出してるのに」と少し反抗的な気持ちにもなってしまうます。私はみんなのやる気が無くなってしまいうような言い方をしないように気をつけて、楽しく練習できる言葉づかいをするようにしています。

また、出来ていないところを伝える時も、「どうしてできないの？ちゃんとやって」と言うのではなく、「こうしたらいいよ」というように、どうしたらいいかを伝えるようにしています。また、自分が出来ていないところもあるので、私からも聞いたりするようにしています。団体は、自分一人だけで上手になれる種目ではありません。みんなの協調性が大切な競技です。協調性とは、違う意見や考えを持つ人達が協力しながら同じ目標の達成に向けて行動できる能力の事です。一見似た言葉に、「イエスマン」というものがあるそうです。イエスマンとは、何でも「はい」という人の事で、協調性が自分の考えをはっきり持っているのと違い、イエスマンは自分の意見や考えがありません。私は自分がリーダーをする時、チームのメンバーがイエスマンにならないように気をつけています。

私の理想のリーダーは、みんなが気持ちよく練習できるようにまとめる人です。困っている人がいないかみんなの様子をよくみたり、みんなの意見をよく聞いたり、何かあればフォローしてあげたり、相談にのってあげたりできる人です。

それが出来れば、イエスマンのチームではなく、協同性のあるチームになれると思います。

私は、新体操でももちろん、新体操以外の場所でも、気配りができるすてきな人になりたいと思います。



## 私のあこがれの人

西方小五年 茂木友里

私は、小学校四年生の時に、金管バンドに入りました。体験に行った時、金管楽器の体験で、音がとてもきれいとほめられて、とてもうれしかったからです。打楽器の体験でもまた同じようにほめてくれました。その時に金管バンドの先輩は、ほめてのばしてくるんだと思います。金管バンドに入部する決意をしました。

入って初めて練習は、やっぱり楽しかったです。その日に自分の楽器が決まります。顧問の先生には、管楽器を勧められました。私の第一希望は打楽器でした。顧問の先生に、

「三カ月だけ管楽器をやらない。」

と言われ、やることにしました。私は体が小さかったので、丁度良く吹きやすかったアルトホルンにしました。

アルトホルン用の空き教室に行くと、先輩達がやさしく歓迎してくれました。合奏の時には、隣の先輩がやさしく教えてくれました。その先輩が、私にとってのあこがれの人でした。他の先輩も、同じように接してくれて、心強かったです。

夏休みには、コンクールのために練習を続けました。結果は金賞。でもこれは、一位というわけではなく、代表にはなれないけれどその次に上手だから金賞という感じだそうです。とつてもくやしかったです。みんなでたくさん泣きました。

そしてあつというまに三学期。六年生との最後の定期演奏会が終わり、金管バンドで六年生を送り出す「六年生ありがとうの会」の日が来ました。この日はたくさんの思い出が来ました。

それから時の流れは早く、卒業式の日がやってきました。この日は六年生を祝うために、演奏をしました。みんな涙を流して、別れを告げました。

新学期が初まり、私は五年生になりました。新しい金管バンドに行くと、去年と変わったことが色々ありました。初めに、去年の顧問の先生が離任してしまっていたことです。とつてもいい先生だったので、辛かったです。

離任式当日、私は元顧問の先生に、

「いつまでも前の先生が良かったとか言っていないで、新しい学校を好きになつて。」

と言われ、その言葉に背中をおされ、前に進むことができている。

この時にさらに背中をおしてくれたのは、アルトホル

ンの新パートリーダーでした。この人は、去年のあこがれの人に似ていて、言葉で私の背中をおしてくれました。今はこの人があこがれの人です。

私も五年生になつて、後輩が出来ました。私も下の子のがこれの人になれるよう頑張りたいと思います。私はアルトホルンが大好きで、金管バンドも大好きです。あの三ヶ月が過ぎた今も、アルトホルンをやっています。コンクールの曲では去年と同様ソロホルンを任せてもらったので、期待に応えられるよう頑張っていきます。私のあこがれの方は、いつまでもあこがれの人です。



いろいろな優しさ

千問台小五年 日野 真緒

私は、優しさについて、いろいろな優しさがあるんだな、と思いました。

理由は、私が一年生の時に二つの優しさを知り、今年に一つの優しさを知ったからです。

一つ目は、「教えてくれる優しさ」です。

私が一年生の時、学校のことを何も知らなくてこまっていたら、六年生の人が出ていねいに、きっちり教えてくれたので、「教えてくれる優しさ」を知ることができました。

二つ目は、「手伝ってくれる優しさ」です。

これも私が一年生の時で、給食の用意をしている時に、私があたふたしていたら、

「手伝うよ。」

と言ってくれて、ここでも「ここは、こうやるんだよ。」と教えてくれたし、一緒に仕事を手伝ってくれたので、「手伝ってくれる優しさ」を知ることができました。

三つ目は、「他人にも気遣える優しさ」です。

これは今年、家族で電車に乗っている時に、車いすに

乗っている人とその車いすをおしている人がいて、その人達がおりする時も、電車に乗っている時も他に乗っている人達がスペースを空けていて、私は

「車いすに乗っている人がいやなかなあ。」

と思っていたけど、車いすに乗っている人がおりする時、スムーズに速く、おりられていて、私は、「そのためにスペースをあけていたんだ。私だったらそんなこと考えもしなかったな。」と思いました。そして、この事が起こった後も、同じような事が何回も起こったので、

「電車に乗っている人はやっぱり他人の事も気遣える人が多いんだな。」

と思いました。それで、「他人にも気遣える優しさ」を知ることができました。

私は、この三つの「優しさ」を知ることができました。ですが、まだまだたくさん「優しさ」があると思っています。なので、私はそのたくさん「優しさ」を見つけないながら、いろいろな「優しさ」を持ちながら、みんなからたくさんさんの信頼を持たれる、そんな存在になりたいです。

トラブルが私に教えてくれたこと

蒲生小五年 小川 柚 菜

以下は、ある日私が耳にした言いあらそいの大まかな内容です。私の学校では、女の子には女子更衣室がありますが、男子更衣室がなく、男の子は教室で着がえます。そのため、体育の後などは、男の子が教室で着がえてしまうと、女の子は荷物を女子更衣室に持つていくか、男の子のいる教室に入っておくか、どちらかにする必要がありますが、男の子はやはり、

「女子が入った。」

と悲鳴をあげたり抗議をします。それに対して、女の子が、男の子が悲鳴をあげることに不満を覚え、抗議します。また、男の子がおしやべりをして、長い間ろうかで待たされることもあります。これらの不満から、この言いあらそいはおこったのです。

この言いあらそいの一番良い解決案は男子更衣室を作ることだと思います。しかし、教室の数などの関係で、残念ながらそれは難しいと思います。ですが、他にも教室前に荷物をおくためのテーブルをおくなどの解決案が

あるし、この言いあらそいの内容には、男女共に反省点があると思います。男の子は、おしやべりをしながらきがえたことで、女の子のいる教室に入ったことです。言いあらそいの中でも、男の子が、

「じゃあ女子更衣室に男子が入ってきててもきやあきやあ言わないでね。」

などと言ったのに対し、女の子が言葉につまる場面もありました。どこかに、

「男の子だから気にしないでだろう」

「少しぐらい大丈夫」

という気持ちがあつたのだと思います。それは、やはり反省しなければならぬと思います。

また、次のような事件もありました。

ある時、男女対抗でドッジボールをやり、女の子が優勢な形で終わったのですが、終わった後に、男の子が、

「女の子の方が人数が多かった。ずるい。」

などと言ったり、女の子が、

「男子は弱いね。」

などと言ったりする事態になり、しばらくの間、罵り合いのような状態になってしまったのです。

結局のところ、どちらのトラブルも一応の終結をむかえましたが、どちらも、

「男子はくだ。女子はくだ。」

などと決めつけてしまったことからはじまったと思いません。なので、今回この問題が解決しても、この決めつけがなくならない限り、このような問題はまた起こると思います。決めつけをなくすことは簡単ではないですが、少しずつでもなくす努力をしていくことが大切です。男女差別などと言うと遠くのことのように聞こえてしまっていますが、千里の道も一歩からということわざがあるように、身の周りから、意識を変えていくことが、大切なのではないか。これが、今回のトラブルが私に教えてくれたことです。



いじめをなくすために

鷲後小五年 佐藤花保

「アホだなあ。」

「バカ。」

「何でそんな所で転ぶんだよ。ドジ。」

みなさんはこんな言葉を聞いたことはありませんか、使ったことはありませんか、言われたことはありませんか。

私は使ったことも、言われたこともありません。けど、聞いたことはあります。例えば、テストでいい点をとれないだけで、

「バカだな。」

わすれ物をしてしまっただけで、

「アホじゃん。」

落とし物をしてしまっただけで、

「ドジだな。」

本当はまだまでもつと数えきれないほど、いろいろな所からこんな声が聞こえてきます。

みなさんはこんな声を聞いてみるとどんな気持ちになりますか。きっと、こんな声は、言われた方も、聞いて

いる方のみなさんも悲しくなると思っています。もしかしたら、言った方も、悲しくなつて、後かいするかもしれない。そのぐらい、

「ドジ、アホ、バカ」

のような言葉はかわい言葉なのかもしれません。いじめ、インターネットでの悪口、外国人、女性への差別も、同じように、ドジ、アホ、バカ、「くのくせに」という面白い言葉で、出来上がっています。でも、ぎやくに言えば、ドジ、アホ、バカ、「くのくせに」という言葉をなくせば、この世から、いじめ、インターネットでの悪口、外国人や女性への悪口がなくなるのです。

いじめをなくすのは大変だと思います。だけど、一人一人が気を付けて、相手の気持ちを考えれば、いじめをなくせると思います。私はいじめがなくなるその日まで、相手の気持ちを考えて気をつけようと思えます。そしてなくなつた時も相手の気持ちを考えて気をつけようと思えます。だから、みなさんも、いじめ、インターネットでの悪口、外国人や女性への差別をなくすために、一人一人が、気を付けて、いじめをなくしてみませんか。

## 北朝鮮による日本人拉致問題について

大間野小五年 早川 まい

私は、いつも夜にニュースなどの情報番組を見ます。ある日、いつも通りにニュースを見ると、一つのニュースが目にとまりました。それは北朝鮮による日本人拉致問題についてのことでした。

拉致問題とはどういうものか気がなつたので、調べてみることにしてみました。調べると、拉致問題の始まりは、一九七〇年代から日本人が行方不明になる事件が相次ぎ、その多くが海岸に近い場所で、突然行方がわからなくなつていふということが分かりました。そして、現場に残された証拠や元工作員などの証言から、北朝鮮による拉致の疑いが強いとされていきましたが、北朝鮮は関与を否定していました。しかし、二〇〇二年九月十七日の第一回日朝首脳会談において、北朝鮮の国防委員長は、長年否定していた日本人の拉致を初めて謝罪をしたことも分かりました。そこで、理由が気になつたので調べてみました。すると、北朝鮮が日本人を拉致した理由の一つは、日本人を装った工作員の養成でした。日本語や日本の習慣を教える人が必要だつたためでした。

蒲生小六年 金子奈央

元工作員や帰国した拉致被害者の証言からも、拉致被害者が工作員に日本語を教えさせられていたことがわかっているということが調べて分かりました。十七人も被害者がいたそうです。そのうち五人が帰国し、その他の十二人のうち八人は死亡し、四人は「未入境」と北朝鮮は主張しているそうです。再会を果たせぬまま亡くなってしまう拉致被害者の家族が相次いでいることを調べて知りました。そして、調べていくうちに「残された被害者たちは、今も救出を待っています」というところが心に残りました。理由は、帰国した人々も、辛かったと思うけれど、北朝鮮に残された人々も不安がいっぱいあって辛かったと思っただけです。何よりも一番辛いのは、突然家族が拉致された方々だと考えました。

私は、北朝鮮による日本人拉致問題について色々なことを調べました。それで、この出来事は絶対にわすれてはいけないと考えました。それは、私の家族が突然行方不明になったらと思うと不安でいっぱいになってしまふと思えました。だから、この出来事のことを知っている自分たちが、このことを知らない人に伝えてこのようなことを、行う人がいない世の中にしていきたいと思えました。

ひいおばあちゃんが少し前に亡くなりました。小さい頃は一緒に住んでいたので会っていませんでした。何年前かに施設に入ったので会っていませんでした。徐々に体を動かすことが難しくなり、寝たきりになっていったと父から聞きました。コロナ禍のため、会うことを制限されていたので最後は会えなかったけれど、施設の人に見送られながら、苦しまずに亡くなったそうです。優しく見送ってくれた施設にはどんな人が働いているのか気になりました。高れい者に寄りそう仕事とはどんな仕事かわからなかつたけど、社会科学見学で介護福祉士という職業があるのを見つけて体験してみました。

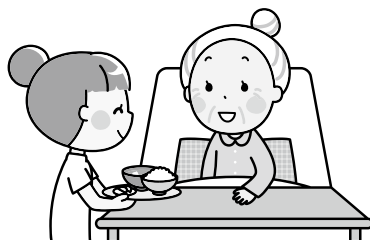
介護福祉士の仕事は高れい者や障がい者の生活をサポートすることです。実際に体験するまでどんなに大変なのかわかりませんでした。今は高れい化社会なので、これからとても重要な仕事になると思います。体験では高れい者の動きを理解するために体に重りを付けて段差を上りました。とても体を動かすのが大変で思った以上に前のめりになってしまったり、前があまり見えずつ進み



づらかったです。介護する方が歩いたりするスピードを合わせてあげるのが大切だとわかりました。他の体験では人形を高い者としてベッドから車いすに友達と二人で移動させて帽子をかぶせ出かける準備をしました。実際の現場では服を着せたり、脱がせたりもするそうです。体を起こしたりする時もポイントがあり、適切な場所を支えないとうまく起き上げられなかったり移動できず、また一緒にやる人とも力を合わせて行わないと難しいみたいです。今回は人形だったので相手の気持ちはわからなかったけれど、支え方によつては相手がいやな気持ちになることもあるだろうなと感じました。実際に体験してみると高れい者の気持ちを知ることです。か少しわかつた気がして、高れい者に寄りそつた介護が必要なのだと思います。そして、今では人の手ばかりではなく、機械化されているところもあるようです。ベッドにいないかいないかなどをコンピュータで管理することやベッドを電動で起き上がらせて移動を簡単にすることもできるみたいです。

今回介護福祉士の体験をしてみても大変なことがわかりました。これからはもつと高れい化社会が進み、介護はとて大切になるにもかかわらず、人の手がたらなくなつてきます。なので、できるところは機械化

して、介護士さんの負担を少しでも減らせたらいなと思ひました。しかし、実際に高れい者の気持ちになつてみると機械には心のこもつた対応はできないかなと感じました。介護を受ける人の気持ちを考えつ、機械の力を使いながら、人の心を大事にした介護が必要だと思ひました。



川柳小六年 田中 俐 杏

「ぼくは、今、募金箱の前にいる。」

それは、五年生の終わりころのことだった。ぼくは、妹といっしょにセブンイレブンで買い物をしていた。そして、会計をしていると、レジのとなりにある募金箱に目が止まった。そこには、「令和六年能登半島地震緊急支援募金」と書かれていた。

能登半島地震は、令和六年一月一日、午後四時十分くらいに起きた、マグニチュード七・六の大きな地震だ。石川県にある志賀町や輪島市で震度七を観測し、大津波が発生した。死者は、二百人以上のものだった。

ぼくはその日、お父さんの実家がある福島県のスキー場に遊びに行っていた。そこで、射的のイベントがあり、妹がほしがっている景品を取るために、真剣にねらいを定めていた。その時、急に緊急地震速報が鳴った。ぼくは、必死にバックで頭をおさえて、ゆれがおさまるまでまった。ゆれがおさまったらすぐに、テレビを見た。それしたら、建物が全壊している様子が放送されていた。これは、ぼくにとって衝撃的なことだった。そして、最近

では台湾でも大きな地震が起った。

それなら、災害が多くない国なら幸せなのかと思うとそうでもなかった。インドやアフリカでは人々の生活が貧しく道路などで、生活しているらしい。世界には家がない人がたくさんいる。

そして、ぼくは建築士になるという夢を持っている。最初は建物のいろいろなデザインに興味があり、自分もデザインしてみたいと思った。

家は人生の一部だと思っている。理由は、そこで、ふかかなベッドでねたり、おいしいものを食べたり、テレビでいろんな番組を見て楽しんだりできる唯一の場所だと思う。ぼくはどんなに強い地震が起きたとしても、耐えられるような家をたくさんつくり、みんなが幸せな日々を送れるような家をつくりたい。ぼくは、そのため資格をとれるようにがんばりたいと思う。

気がつくと、募金箱の前だった。妹は、早く行きたそうに、こちらを見つめている。さつきも言ったとおり、ぼくの夢は建築士だ。そして、どんなに強い地震が起きてもこわれない家。さらに、みんなが幸せな日々を送れるような家をつくりたい。そんな願いがある。

ぼくは、手の中におつりの二百四十四円をにぎっている。ぼくはその二百四十四円を募金箱に入れた。

「どうか、この小さな希望が少しでも、能登に住んで  
る人々の役に立ちますように。」  
いつか、その日が必ず来ますように…



「子ども達にきっかけの種を」

千間台小六年 黒田華蓮

私のひいおじいちゃんが入院した。とても寒い正月にお布団の中で冷たくなっていた。低体温しようだったとお母さんから聞いた。以前から、ひいおじいちゃんは認知しようになつていた。少し前の事も覚えていない。お母さんが焼いたケーキを一つ食べたことも忘れて、もう一つと全て食べてしまう。毎回、記おくが新しいので、一つ食べては「これはおいしいなあ。もう一つ食べては「これもおいしいなあ。」と何度も新鮮に美味しそうにケーキを食べる。そんなひいおじいちゃんだ。

ひいおじいちゃんが入院した時、意識がはつきりとしていない中、あちこちにつながれたチューブをぬいてしまう。一度や二度、注意してもぬいてしまう。認知しようが進んでいるので、自分がどこにいて、何をしているのかきつと分らないだろう。目を覚ますと、病院で、たくさんチューブが身体につながっていたら私だつてびっくりしてしまう。

そんな中、ひいおじいちゃんは手にミトンを着けられた。簡単にチューブをぬけないようにするためだと思う。

次に手をベッドのさくにくくりつけられた。それは、ひいおじいちゃんが、なぜ病院でたくさんのチューブにつながれているのが分からずに混乱して、暴れてしまったからだ。とうとう、どんなに苦しんでも、身体が痛くても助けを呼べなくなった。

私は人権って何だろうと考えた。人に何かを伝える手段がなくなってしまうたひいおじいちゃんに人権はあったのだろうか。人が人らしく生活を送るために、最低限必要なことは、自分のうったえを誰かに伝えられる環境ではないか。自分から発信できる場が守られるかどうか。人権を守る上での第一歩なのではないかと考えた。

ひいおじいちゃんはなくなつた。ナースコールを押せずに、たんがのどにからまって、息ができなくなつてしまったからだ。冷たくなつたひいおじいちゃんを見て、私は、小さな声も聞き逃すことのない耳を持つとうと思つた。私の住む環境では、人が自由に意見を言える場所を作ろうと思つた。

私は、教師になるのが夢だ。私のひいおじいちゃんは会社をつとめあげた後にもう一度大学院に通つて大学の教員になつた。本を書きながらたくさんの子ども達を育てあげた。私も教師になつて自分が大事だと思ふ事を次の世代に伝えていきたい。特に伝えたい事は人を人とし

て思いやる心だ。人と思う事は、大人も子どもも関係なく大切な事だ。クラスの中だけで思いやるのではなく、子どもが親を思いやる事やとなりの家の家族など地域を思いやる事もとても大事な事だ。だれもが思い合う事でみんなが楽しく生きやすくなるのではないかと思う。そのため、私は今相手の気持ちを組みとつてその人が傷つかないような言葉を選んで発言出来るように毎日学校やふだんの生活で心がけている。少しでも人権を心にとめるきっかけを教師になつた時に子ども達の心に種をまきたいと思う。



あこがれの人たち

蒲生小六年 亀山 樹

ぼくは将来、消防士になるのが夢です。ぼくの家では、夕飯の時にニュースを見るのが日課です。その日起きた出来事や、事件のニュースを見ています。家や車が燃えてしまったというニュースもよく見ます。その中で、火の中をかけめぐり人々を救い出し、全力で火を消そうとしているのが「消防士」です。

ぼくが三年生の時、家の目の前のマンションで火事がありました。夜の十時ごろ、人の話し声のような音にお母さんが気づきカーテンを開けると、目の前に火が上がっていました。マンションの人たちは、まだ火事に気づいていないようでした。ぼくの家のベランダからとてもよく見える位置だったので、家族でベランダから大声を張り上げて、

「火事です！火事です！にげて！」

とさげびました。マンションのけいほうは鳴っていました。が、いざ本当に火事が起きると、何の音か分からないのか、誰も家から出てくる様子がありませんでした。ぼくたちはとてもあせって、ひたすら大きな声で呼びかけ

ました。そのうちに遠くの方から消防車のサイレンが聞こえてきました。とてもほつとしたのを覚えています。

「ああ、もうすぐ消防士さんが来てくれる。きつともう大丈夫だ。」

と思ったからです。消防士さんたちは大きな声とすばやい動きでマンションの人たちを安全な場所へゆうどうし、風の動きを読んで消火活動を行っていました。実際に大きな火事を目の前で見てとてもドキドキしていたけれど、次々にひなんしていく人々を見て安心し、消防士さんの働きをたのしいなと思いました。

消防士とは、各地方自治体の消防本部に所属し、火災現場の消火活動やしょう病者の応急処置・はん送などを行い、地域住民の安全を守る仕事です。でもその仕事内容以上に、「人々を安心させる」ことができる、とても大事で素てきな職業だと思えます。だからぼくは、消防士になりたいです。

## 障がい者によりよい生活を

大袋東小六年 田 口 彩 未

私は、障がい者にもっとよりよい生活を送ってほしいと思います。今のままでは、わたしたちは便利でよい生活を送れていても、障がい者の人たちは不便に思うことや一人では困ってしまうことがあると思います。

私は四年生の総合の授業の時に、タブレットで障がい者の方について調べました。その時に見た動画では、たくさんの障がい者の方が困っていました。例えば、車椅子に乗っている人は自動販売機で飲み物を買おうとしたときに、上の方にあるボタンに手が届かずに困っていました。目の不自由な人が白杖を使って歩いているときに、道にたくさんの自転車が止まっていて、白杖が当たって歩けずに困っていました。耳の不自由な人が電車に乗っていた時に電車が止まってしまい、アナウンスが鳴っていました。何が起きたのか分からず困っていました。そんな動画を見て私は自分たちにとっては全然困らないことも障がい者の方にとっては困ってしまうことがあるということが分かりました。

障がい者の方について調べ始めて数週間が経ったくら

いのことでした。先生が、アイマスク体験や手話を教えてくれる人が今度学校に来ると言いました。そのときの私は、アイマスクを付けて白杖を持って歩いたり、手話をしたりすることはそこまで大変とは思っていませんでした。しかし、実際に体験すると、その考えは一変しました。アイマスクを付けると本当に真っ暗で何も見えないうし、付きそいの人も居て、

「そろそろ右へ曲がりますよ」

と言われたけど、それでも曲がったりするのは壁や物にぶつかってしまいそうな気がして怖かったです。手話もやってみたけれど、指の形や手の動かし方がとても難しく、似ている形のものがあったり、複雑な動かし方のものがあつたりして覚えるのが大変でした。

私は動画を見たり、実際に体験してみたりして、私が想像していたよりも障がい者の人たちはとても大変な生活を送っていることが分かりました。そして同時に、私も障がい者の人たちに何かできないかと思いました。そこで私はまず、困っている人がいたら自分から声をかけることをしていきたいと思います。しかし、声をかけようという思いがあつても、

「大丈夫です。」

と言われてしまうのではないかという不安があるかもし

れません。実際、私もそんな不安があります。けれどもその一言は障がい者にとつてはとても助かる一言だと思いますし、大丈夫と言われても思いやりの気持ちは伝わると思っているので、声をかけることは大切だと思います。また、声をかける以外にも、席をゆずってあげたり、物を取ってあげたりすることも助けになりますし、手話を覚えて聴覚障がい者の方と会話ができるようになるのもいいと思います。

このように私たちが障がい者の方に行えることはたくさんあります。もし町中で障がい者の方が見たら、助けはいらぬか声をかけてみようと思います。



## 幸せのパティシエ

南越谷小六年 加藤 百夏

私は、卵と牛乳の重度のアレルギーを持っています。そのため、食べることができないものも多くあります。例えば、卵が入ったプリンやクッキー、牛乳が入ったケーキやアイス、パンなどです。今では当たり前となつていくことが多くありますが、小さい頃は我慢をしなくてはいけないしさを感ずることもありました。みんなは学校で同じ給食を食べていても、私は毎日弁当を持って行って食べています。食べる時も、私だけ机を後ろに下げて食べています。イベントやお祭りなどでもらえるお菓子も私は食べることができないものがほとんどです。私はお店などで売っているお菓子は、必ず成分表示を確認しています。成分表示を確認すると、食べることができずにお菓子もあります。

私が食べることができずケーキを売っているお店もあります。卵も牛乳も使っていない、私にとつて安心して食べることができずケーキです。そのようなものを食べたときは、幸せで笑顔になります。私がおいしさと幸せ

を感じる事ができるのは、作ってくれた人やメーカーの人、材料を作ってくれている人達のおかげなのだと思います。

私の姉も同じ重度の牛乳アレルギーを持っています。そのため父や母が、私たちが食べることができるケーキやクッキー、パンなどを作ってくれます。最近私も一緒に誕生日ケーキを作っています。

「今日のケーキはふんわり焼けたね。」

「今日のケーキすごくおいしいね。」

という話を家族みんなで話し合うことができ、喜びと幸せを共有することができます。ケーキを作っているときや食べているときは、私にとつても楽しい時間です。

私の将来の夢はパティシエになることです。低アレルギーのお菓子を作りたいと思っています。私のように、アレルギーで食べたいものを思うように食べることができない人を、おいしいお菓子で笑顔にしたいです。そして、その人達が幸せを感じる手助けをしたいです。私は食物アレルギーによって我慢することが多くあります。そんな中で、私が幸せを感じる事ができるのは、多くの人々が、私たちアレルギーを持っている人達の我慢を減らそうと努力をしてきているからだと思います。私はその人達に対しての感謝の気持ちでいっぱいです。そ

の人達が私たちにしてくれたように、今度は私がパティシエという仕事で多くの人に幸せを感じさせてあげたいです。





私は障がいがある人に対しての差別をなくしたいと思っています。

私がショッピングモールに行ったとき、車イスに乗っている障がい者を見かけました。私が大じょうぶかなと心配して見ていたとき、歩きスマホをしていた女子高校生がその人とぶつかってしまいました。車イスをおしていた人が、

「すみません！ごめんなさい！けがはないですか？」

とあやまって高校生のことを心配しているのにその高校生は車イスに乗っている人を見てなにかすぐきもちわるいものを見ているような顔をして去っていききました。去っていくときその高校生が

「あんなの人聞じゃないよ。」

と小声で言っているのが私には聞こえてしまいました。その言葉を聞いたとき、どん底に落とされた気持ちになりました。確かにその人は私たちより少し顔がちがいました。けどみんなと同じで生きていて同じ人間でただ障がいがあるだけだからそんなふうに思うのは良くない

と思いました。

また、このような出来事も見たことがあります。私が大きな公園に行ったときカレーを作っている小学六年生くらいの子達と白じょうを持つた子が一人いました。その白じょうを持つた子がにんじんを一生けん命切っていました。すると他の子達が、

「君は障がい者なんだからやめたほうがいいよ。」

「障がい者なんだからむずかしいよ。」

と言っていました。それを聞いたとき私は、その子達は親切のつもりで言っていたのかもしれないが、いやなふうに聞こえました。

「障がい者なんだから」

その言葉が白じょうの子をぎずついているような感じがありました。もしも私とその白じょうの子だとしたら特別あつかいはしないでほしいなと思います。みんな同じ人間なんだからもつとだれにでも平等に接してあげられるようにしてほしいです。

「障がい者だから私とちがう。」

「障がい者なんだからそれはやらないで。」

このような考えではなく、障がい者がわの立場で考えよりそってあげられるような社会になってほしいです。

## 少子高齢化と子どもたち

大沢北小六年 田端千夏

私には九十さいのひいおじいちゃんがいます。いつもひいおじいちゃんの家に行くと、必ずひいおじいちゃんが毎日がんばって耕している畑に野菜を収穫しに少しはなれた所まで歩いて行きます。先日、いつものようにひいおじいちゃんと畑に向かっている時に気がついたことがあります。それは、ひいおじいちゃんの足が前に比べると、とても言っているほどおそくなったことです。

私は少し不安になりました。理由は、ついさつき足が痛いと言っていたことを思い出したからです。最初は足の病気になってしまったのかなと思いつてもむねが苦しくなりました。そこで、この話をばあばに話してみたら、「もう九十さいだから足のほねももろくなつてきてるんだよ。」と言われ、「もうひいおじいちゃんもお年よりだから足が痛くなっているだけか、よかった。」と安心している自分と、「もうそんなに長くは生きていられないのかな。」と不安でドキドキしていて、おちつきのない自分がありました。

世界中の子どもは、私が体験したような不安な気持ち

になっているのかなとき問に思いながらニュースを見ていたら「少子高齢化が進んでいる。」というニュースが流れてきたので、テレビに耳を向け、聞いていたら、私みたいな子どもがたくさんいて、悲しい思いをしているということをそこで知り、わけのわからない、うれしきや悲しき、不安な気持ちをいただきました。うれしきは、昔の仕事や文化を受けつがせてくれるといううれしきや喜びで、悲しきと不安は、私が体験した悲しき、不安さをみんなも同じように体験しているんだ、とふと思いついた自分の気持ち、モヤモヤするこんな気持ちになることは、私はあまりないのでどんなに考えてもこのモヤモヤした気持ちは一カ月たつても消えませんでした。でも私が安心して、ひいおじいちゃんや、家族とくらし続け、「今」と向き合いよく考えて充実した「今のしゅんかん」をよりよくすごし、友達や知り合いの私みたいなやんでいる子に知らせたり、大人になって、テレビやニュース、新聞などで発しんすること、よりよく子どもがくらせるのではないかなと思いました。

私は、「今すごしているこのしゅんかんが幸せだ。」ということに気づき、じつかんすること、それでも不安だったら友達に相談することが一番ベストな考えだと思えます。相談したり、自分で気づくこと、それが自分を安心

させるいい方法だと私は考えました。

なやんでいる子もかくさずにだれかに相談してみたら  
楽になるかもしれませんので、まずは、勇気を出して  
だれかに相談してみませんか。



## アレルギーについて

大袋北小六年 本田 慎翔

人権は、みんなが生まれながらにもっている大切な権利のことです。例えば、みんなが自由に言葉を話したり、安全に生活したりする権利があります。一人一人の人権を守り、みんなが幸せになれるとよいと思います。

ぼくは人権について学んで、考えたことがあります。それは、ぼくがアレルギーをもっていることです。

一年生のころから、他の人の給食のメニューとはちがう給食を食べなきゃいけなかったり、時には給食の代わりにお弁当を持っていたりしていました。そんな時、

「きみってそんなものも食べられないの。」

「給食が食べられなくて、かわいそうだね。」

と友達から意地悪ぽく言われたこともあってすごくつらかったのを覚えています。

でも、ぼくの家族がいつもそばにいてくれました。特別にお母さんは、いつもおいしいごはんを作ってくれました。アレルギーにならない料理を工夫して作ってくれたり、スーパードに行くって食べられるものを探したりしてくれました。それから少しずつ食べられないアレルギーの

成分の入っている食品を食べる練習もしました。食べた後にお腹が痛くなることもあったけど、そのおかげでだんだんと食べられるものが増えてきました。

給食を食べられるようになった時は、本当にうれしかったです。仲のいい友達には、

「食べられるようになってよかったね。」

と声をかけてもらいました。今では、おかわりのじゃんけんにも参加できるようになりました。みんなと同じものが食べられるって、とても楽しいことがわかりました。ぼくの人権は、家族や友達の支えがあつて守られたのだと思います。家族の協力がなかったら、ずっといやな毎日が続いていたかもしれません。だから、これからは、自分の権利を守るために、家族や友達がしてくれたように、ぼくも他人の権利を尊重して、きずつけることがないようにしていきたいと思います。みんなで幸せにくらせるように、いつしよに助け合つていきたいと思います。

大事なおじいちゃん

大袋北小六年 鈴 木 美 空

私のおじいちゃんは病気で足が不自由になりました。おじいちゃんは働いていて家の帰り、食事中に足の痛みで倒れてしまい、おばあちゃんがすぐに救急車を呼びました。

おじいちゃんはすぐに病院に運ばれました。おばあちゃんはお父さんに連絡をして、お父さんもすぐに病院に向かいました。

お父さんの話だと、下肢動脈硬化症という病気で、足の血流が悪くなり足のしびれや痛みなどがあり最悪の場合足を切断しなくてはならないと聞きました。私はその話を聞いた時びつくりしたし、聞いたことのない病名におどろぎ、おじいちゃんが心配になりました。

病院についておじいちゃんは手術をし、無事に手術が成功しましたが、つえを使わないと歩けない状態で障がいが残ってしまいました。

おばあちゃんもお父さんもショックを受けていました。が、一番ショックを受けていたのはおじいちゃんでした。ゴールデンウィークが近い事もあり、おじいちゃんが

みんなでバーベキューをやるかと予定を立てていました。でもおじいちゃんの入院でバーベキューが中止になりました。私がお見まいに病院に行った時、おじいちゃんが悲しそうに

「ゴメンな。」

と、言ってきました。私も悲しい気持ちになりました。

おばあちゃんの話だと入院は長くなりそうとの事でした。私たちが帰るときにおばあちゃんから

「体を大事にね。」

と言われました。いつも明るいおばあちゃんが悲しそうでした。

今まで元気に過ごしていた人が急に病気になる、障がいをもつてしまうことが身近で起こり、私も何かできる事はあるか考えました。

おじいちゃんはずえをついていましたが今まで通りおじいちゃんに接することが一番だと思いました。決しておいそうという目で見えてはいけないと思いました。

家では、おじいちゃんが入院している間に足が不自由なおじいちゃんのために家の中をリフォームして、バリアフリーにしました。私がおじいちゃんの家に行った時に手すりがたくさんついていて家の中の段差もなくなっていました。私は、おじいちゃんのために家の中をリ

フォームするおばあちゃんに感動しました。

その後、おじいちゃんもリハビリをがんばって退院できてうれしかったです。

おばあちゃんも色々大変だということも分かり、私も何か役に立てることがないか聞いたら、おばあちゃんからは

「元気でいてくれればそれだけで十分。」

と言われました。なので、おじいちゃんやおばあちゃんに会うときには元気で笑顔いっぱい姿を見せたいと思います。

そして、私の周りに困っている人がいたら手を差し出し接していきたいと思えます。



目標に向かつて：

宮本小六年 小島 粹

みなさんは、将来どんな人になりたいか考えたことはありますか。考えたことがある人、ない人といえるでしょう。私は、ときどき将来のことについて考えることがあります。私が考えるなりたい大人は、困っている人を助けられる、みんなを笑顔にできる、そんな優しく、明るい人です。

私がこうなりたいと思うようになったのは、去年の六年生が優しく声をかけてくれて、とつてもうれしい気持ちになったからです。

私は去年、代表委員会で、書記をしていました。このころの私は、年上の人に話しかけるのが苦手で、六年生といつしよに黒板を書きたかつたけど、それで何か言われたらいやだったし、話しかける勇氣もなかったもので、黒板に字を書くことはほとんどありませんでした。でもそんなときに、一人の六年生が私の手にチョークを持たせ、

「書いていいよ！」

と、優しく声をかけてくれました。本当にどうしていい

か分からないときに、優しく声をかけてくれたので、「何をすればいいんだろう。どうしたらいいんだろう。」という不安も一気にとけて、安心することができました。それだけではなく、声をかけてもらったうれしきで気分も上がり、自然と笑顔になることができました。困っている人に優しく声をかけ助けることは、人を笑顔にし元気づけることにもつながるんだなと思いました。

私は今、去年と同じ代表委員会に入つて書記をやっています。去年私たちが始めて委員会をやつたときに、きつと今年の五年生も不安な気持ちがあると思います。だから私は、五年生の子たちにできるだけたくさん話しかけ、六年生はすごく優しい人たちだということ、委員会はとつても楽しいということを知ってもらえたらいいなと思っています。これからも、五年生にたくさん話しかけ、不安を笑顔にかえていきたいです。

これまでの六年生のような、優しく明るい人になるためにがんばっていることは二つあります。一つ目は、相手の気持ちを考えることです。相手の気持ちを考えることは、相手をききつづけることを無くす他に、相手の気持ちを理解し行動することができません。例えば、何かをするときに、どうしたらいいか分からなくて困っている人がいるとします。そしたらそのときに、自分だったら

こう声をかけてもらえたりうれしいなと考えて、その言葉をその子にかけてあげます。するとその子は安心してうれしい気持ちになると思えます。このように相手の気持ちを考えることで相手をうれしい気持ちにすることができるとです。

二つ目は、色々な人に話しかけることです。私は人と話すのが大好きです。そのことを活かして毎日たくさんの人と話しています。たくさんの人と話すごとで会話の中で自然と笑顔になれたり、相手のことをよく知ることができます。なのでたくさんの人と話すごとはみんなを笑顔にすることができるとです。

私は、将来の目標に向かって、これからも色々なことをがんばっていききたいです。



## 高齢者にも優しい社会を

西方小六年 高松 咲太郎

つい先日、家族で商業施設に遊びに行ったときのことです。トイレの場所を聞こうと思ひ総合案内所に行くと、「どうして紙の地図がないんだよ！」

と、おじいさんが大声を出して怒っていました。びっくりしてその様子を見ると、どうやら行きたいお店の場所がわからず、地図をもらおうとしたところ、スマートフォンでQRコードを読むようにと案内されたようでした。そのおじいさんはスマートフォンを持っておらず、結局怒ったまま帰ってしまいました。

日本は今、高齢化社会が問題となっています。ニュースでは、二〇年後、三〇年後にはますます状況は悪くなると言っていました。日本の人口の中で高齢者の割合がどんどん増えていくというのに、ぼくの身の回りでは、どんどんデジタル化が進んでいます。学校のお知らせを見るのも、お店の予約をするのも、映画のチケットを取るのも母は全部スマートフォンでやっています。お買い物も簡単にできて便利になったと喜んでいきます。でも、近くに住む祖父母は、旅行の割引申請がうまくいかず、

母にスマートフォンを渡してやってもらっていることがありました。そのとき、

「難しくわからないわね。」

「生きにくい世の中になったもんだ。」

と二人が話しているのを聞いて、ぼくはとても悲しく、そして心配になりました。デジタル化が進み便利になっていることはぼくにもよくわかります。でもこれからも増えていく高齢者を置いてけぼりにしてもいいのでしょうか。誰もが人として、自分らしく幸せに生きる権利があるのなら、これから増える高齢者にとっても、当然その権利は守られるべきです。ぼくは、大好きな祖父母が今後一〇年も二〇年も楽しく生活できるように、新たなデジタル社会について考えていきたいです。



## 将来の夢

鷺後小六年 横瀬結菜

私の将来の夢は、助産師になることです。助産師は、助産行為の専門職であり、妊娠・出産・新生児ケアなど、育児にいたるまで、母子の健康を支えます。日本では、女性しかねない仕事です。

五年生のとき、叔母が私の家に里帰りして出産をしました。その時、にんぷさんである叔母と一緒に過ごし、様々な体験をしたことがとても印象に残っています。叔母の体調が悪くなってしまうときに叔母の部屋にご飯を届けたり、荷物を運んだりしました。私でもにんぷさんである叔母の役に立つことができ、感謝をされてとても嬉しかったです。そこで私は、出産を手伝う仕事に興味を持ちました。私の母が、出産を手伝う仕事として、助産師という仕事があるよと教えてくれました。叔母は無事に出産でき、赤ちゃんが産まれたとき、「かわいいな。小さいな。嬉しいな。」と思いました。

助産師になるためには、専門学校か大学に行き、資格を取る必要があります。私は、専門学校で学んで資格を



取り、自分の体力がある若い時から多くの人の力になり

たいです。そのために今できることとして、人とのコミュニケーションを大事にし、友達の相談には親身になつてきます。常に笑顔を意識し、あいさつをします。私はまだ、学校で通りかかった人全員に笑顔で良いあいさつができていません。人として基本的なことを今からしっかりと行いたいと思います。

もし、助産師になれたらいつも笑顔でお母さん、赤ちゃんとその家族をささえられて心強い助産師になりたいです。叔母の赤ちゃんと初めて会ったとき、小さくてとてもかわいいと思つたときの気持ちを忘れずに、どの赤ちゃんに対しても愛情をもつてお手伝いをしていきます。

そして、私の家族は五人姉妹です。全員が出産やにしんをする可能性があります。もしも、そうなったときは自分がいちばん近くで支え、頼りになる存在となります。

みんなの努力が世界を変える

明正小六年 成田唯花

私は、障がいがあります。でも、私は障がいがあつていやだなんて一度も思つたことがありません。なぜなら、それが私の個性だからです。今まで、私を本気でからかってくる人はいなかつたので、私は幸せ者だなと思います。でも、世の中には障がいがあることをからかわれて悲しんでしまう人も大勢いると思います。だから、私はそういう人達を少しでも減らすために、また、障がいがある人が「自分なんて」なんて思つてしまわないようにしたいです。

そのために、まず障がいのある人は、「これが自分の個性なんだ。」や、「これはできないけど、他のことを得意になつてやろう。」などとポジティブなことを考えることが大切だと私は思います。そして、障がいのある人の周りの人は、障がいのある人がいてもふつうの人と同じように接してできないことはフォローして優しく接すればいいんじゃないかと思えます。

私は、障がいのある人も、周りの人も、両方に努力が必要だと思います。なのでこれからは、私自身もポジティ

ブになりたいと思います。そして、私だけがこのような努力をしても世界は変わらないので、この努力を周りの友達や家族、親せき、他の障がいのある人などに伝えて広めて、世の中が少しでも障がいをもっている人に優しい社会になればいいなと思います。また、私はそう願っています。



あの子に負けないように

新方小六年 木村 晴乃

みなさんが、今がんばっていることはなんですか。私は主に勉強です。私はもともと勉強がきらいでした。ですが、私が勉強をがんばることができたのは、ある友達のおかげです。

その子は勉強がすごくできて、ゲームも上手です。私が勝てるのは運動だけでした。そうしたらくやしいな、もつと勝ちたいなと思い、六年生から自主学習を始めました。ですが、勉強をしようとしてもなかなかできませんでした。いすにすわつてもゲームをしていました。そんなことを続けていると、いすにすわるくせがつかまりました。いすにすわる習慣が身につくとき、一週間勉強机で宿題をしました。そんなあるとき、休日にゲームをしていたら、あきてしまい急にひまになり、勉強したいと思いました。真の心の中では、勉強したいと思った自分におどろいていたし、一カ月以上経った今でもしよげき的によく覚えています。そして、お母さんに買ってもらった漢字ドリルに取り組んでいたのですが、終わってしまつてなやんでいたところに、強い味方が現れました。それ

は、理科の先生です。私が四年生の時に、新方小に来ました。最初はとかなりのクラスの担任の先生だったのですが、あまり関わりがなかったのですが、六年生になって、理科を教えてくれるようになり、面白くて、勉強のやり方を教えてくれるやさしい先生という印象に変わりました。テスト勉強のやり方を分かりやすく教えてほしい気持ちが出てくれるので、私はますます自主学習をしたい気持ちが大きくなりました。宿題に自主学習が出ていない日も取り組み、先生に提出したら、ほめられて、初めていい評価をもらえたのでとてもうれしかったです。それから、自主学習が好きになりました。理科のテストでも高得点が取れて、自分の努力が結果にあらわれてうれしかったです。ですが、最近宿題の量が増えて、自主学習に取り組む時間が減ってしまいました。ですが、自分が目標にしているあの子に少しでも近づぐために、私はゲームをする時間を減らし、勉強の時間を増やそうと思います。そして、私は友達に教えてもらう方ではなく、教えてあげられる方になりたいです。

私は前、将来のために勉強をしていました。もちろん今でも将来のために勉強することは大切だと思います。ですが、今は身近にいる「あの子に負けない」を目標に勉強に取り組んでいます。いろいろな勉強法を試して、

自分に合った勉強法を見つけたいです。そしてそれが、将来にもつながっていくと思います。みなさんは、目標に向かってどんな努力をしていますか。また、みなさんのあこがれの人や、負けたくない人はいますか。



## 人々の自由をうばった戦争

桜井小六年 加藤 凜愛来

わたしは最近、学校の授業で少しだけ戦争の話があり、それがどのようなものかが気になり、戦争の話が書いてある本を読みました。そこには、ぼろぼろにくずれた家や戦争に行く男の人たち、ぼくだんが落ちて苦しむ人々などの絵がありました。それを見て私はなんておそろしいのだろうと思ったり、今では考えられないようなことばかりで、どんなにつらくて、悲しい思いをしてきたのだろうと思いました。今では、ふつうにごはんを食べて、「行つてきます。」をしたら、「ただいま。」と言うのが当たり前だったのに、帰る家はぼくだんでなくなつてさらには、返事をしてくれる人もいなくなつてしまふ人もいる。それを聞いただけでむねが苦しくなるのに、それが実際に起こるなんて考えられないし、とても怖いと思います。その続きには、戦争に行つてしまった兵隊さんたちから、その家族への手紙もありました。その中には、おくさんや、自分の子どもも残して戦死してしまつた人もいて、なぜか自分の事ではないのに、とてもくやしい気持ちになりました。

けれど、今の時代は、昔の事がまるで何もなかったように生活しています。そんな中、今でも戦争をしている国があり、今もたくさん命がどこかでうばわれています。昔と同じく、とてもつらい思いをしていると思います。けれど、戦争で死にたくもない人たちが死んでしまつているのに、死を軽く見ている人もいます。戦争している人たちがどのような想いで戦つてくれたのかそれを知つたらきつとそんなことは言えないはずです。わたしもそれを知つてからは、兵隊さんの気持ちを考えるようにしました。戦争に行く人たちは、どんなに死にたくないと思つても、できない人もいるから、その人たちの分まで生きたいと思います。

自分の人生を、自由に生きることができなくなつてしまつた、そんな戦争をなくすことができたらなと思います。そこで、他の国と、交流をしたり、お互い行き来できる関係になることで仲良くなれるので絶対に戦争というものは起きないと思ひました。このことをむねにきざみ、昔の兵隊さんは、自分の命をぎせいにして守つてくれたおかげで今があるということをかみしめていきたいです。また、兵隊さんの命をむだにしたくはないので、その分までせいっぱい生きていこうと心の中で決心しました。

支え合う世界をつくらうよ

大袋北小六年 浅川 真奈

みなさんは、市や町で障がいを持った人を見かけたことがありますか。私は四年生のとき、白杖体験を学校でやりました。しょうがい物を置き、白杖と支えてくれた人をたよりに進みましたが、とてもこわかったです。そこで私は、白杖について考えてみました。

そもそも白杖は白い杖で目の見えない人がなにか物が置いていないかや、地面にあながあいていないかを調べます。他にもまわりの人に私は目が不自由ですと知らせる役目もあります。

実際に街を歩き、目が不自由でこまる所を調べました。すると、信号機、図書館に行くための階段、道路などでした。ですがもし、不自由な人を支えてくれるような人がいたら、信号機も、道路も少し安心できます。でも、支えてくれるような人がいなかったらたいへんです。調べた中に、音の出る信号機がありました。歩道の信号が青になったら、音が出ます。これなら目が不自由でも安心してわたれそうです。他にも図書館に行くための階段には、反対側の入口にスロープがありました。結果、街

には移動しやすい工夫がありました。私は、このような工夫はとてもいいことだと思います。ですがときには、助けも必要だと思えます。

私は、電車の中でこんな体験をしました。私が電車に乗っていて、ホームドアが開いたとき、白杖を持ったおじいさんと、支えるおばあさんを見ました。ホームと、ドアの間には、少しすき間があつてき険だなど感じました。ゆっくり電車に入ってきた二人は、つかれている感じがしました。中はたくさんの人ですわれない感じだったので、席をゆずろうと思ったけど他の人が先にゆずっていてすごいなと思つたことがあります。その時に、街で初めて白杖を見ました。確かに、白い杖は、よく目立つ感じでした。またその時も、ホームとドアのすき間を教える人がいなかったらと思うと、とてもこわいのです。だからやっぱり白杖も大事だけど、支える人も大事だなと思えました。

障がいのある人は、生きていくために、車いす、白杖などの物や、支える人が必要でした。そして、たいへんそうだったらまわりの人が助けてあげることも必要です。また、街中でも工夫がありました。音の出る信号機や、スロープなどの工夫で、障がいのある人を支えています。ぜひ、みなさんも障がいのある人を見かけたら、助けて

あげたり、声をかけてみたりしてみませんか。



「不適切」とは

大袋北小六年 厚澤朱里

私は家族でドラマを見るのが大好きです。最近、昭和と令和を行ったり来たりするドラマを見ました。そのドラマの主人公は昭和の人で、令和にタイムスリップしてしまい、昭和では普通に言えていたことが令和では言っていないことだったり、昭和では当たり前に行っていた行動が令和では白い目で見られてしまったり、昭和で「普通」だったことが令和では「不適切」となってしまうドラマでした。私はドラマだと思っから面白いなと笑って見ていましたが、本当にこのドラマの中に出てくる昭和の人たちが近くにいたらセクハラ、パワハラ、体ばつなどなど、びつくりすることばかりです。そして、みんながいやな気持ちになります。そして、お母さんとおばあちゃんもいつしよに見ていたのですが、お母さんが子どもころの時って、すごい時代を生きてきたのだなとびつくりしました。そしておばあちゃんも若いときはもつとひどかったと言っていました。でも二人ともその時のことを楽しそうに話していて不思議に思いました。

そのドラマで、セクハラやパワハラ、なんでもハラスメントと言われてしまうので言いたいことが言えない。「がんばれ」もハラスメントになるというシーンがありました。でも私は「がんばれ」という言葉が全部悪いとは思いません。いやなときもあるかもしれないけれど、それでもはげまされることがあるからです。なんでもかんでもダメだと決めつけてしまうと人とのきよりがはなれていつてしまいそうでこわいです。昭和ではハラスメントばかりだったかもしれないけれど、今よりも人とのきよりが近くてあなたがかい感じがありました。お母さんとおばあちゃんがその時のことを楽しそうに話していた理由が少しわかった気がしました。

今は多様性が受け入れられて、個人の意見が尊重されるようになり、昔より自分らしく生きるのが楽になったと思います。だから私はやっぱり令和のこの時代が好きです。

ハラスメントは人権しん害です。自分勝手な考えはやめて、相手の気持ちを考えて行動したり発言したりすればハラスメントもなくなり、言う方も言われる方もこわがることなくと思います。昭和のあたたかい人とのつながりを大切にしながらこれからの時代も楽しく生活していけたらいいなと思います。

私は、将来看護師という職業につきたいです。なぜなら、私にはパーキンソン病という病気を患ってしまった入院しているおじいちゃんがいて病院で支えてくれている看護師さんを見て私も、だれかを支えたいと思ったからです。

おじいちゃんは、七十さいでパーキンソン病を患いました。患ってから初めの頃は生活にそんな支障ありませんでした。ですが、一年ほど経って車の運転があまり上手くできなくなっていました。いつも一緒にいたおばあちゃんはおじいちゃんをそばで支えるようになりました。そのような生活が三年ほどつづき、認知症にもなり、パーキンソン病の症状も進行してきました。支えていたおばあちゃんの体力も限界になり、東北地方から私達家族が住んでいる埼玉県内に引越してきました。

埼玉県に引越してきてから私も父と一緒におじいちゃんの家遊びに行くようになりました。そのときに、ケアマネージャーさんや介護福祉さん、お医者さん、看護師さんが家に来て、おじいちゃんのお世話をしている

ところを見ることがありました。そのすがたを見て、いろいろな職業があることを知りました。

二つの病気の症状が進行し、家に来た看護師さんからのアドバイスで病院で入院することになりました。おじいちゃんは食事がふつうにとれなくなっていたのです。病院では、栄養を口からチューブでおくったり、薬をチューブで鼻から入れたり、たんを吸引したりしています。このような処置すべてを二十四時間看護師さんがやってくれています。看護師さんがこんなことまでしてくれているのおじいちゃんが入院して初めて知りました。私はそんな看護師さんを尊敬しました。そして私はそんな看護師さんになりたいと思いました。

将来私は、患者さんに少しでも生きる希望を持ってもらえたり、一人一人の患者さんによりそう看護師になりたいです。



## 世の中の男女差別

大袋東小六年 大島 彩花

私は世の中の男女差別について疑問に思います。今、世界では「SDGs」というより良い世界をつくるための目標が設定されています。その中の一つに「ジェンダー平等を実現しよう」とあるのにもかわらず、まだまだ男子や女子で差別されていることが多いと思います。

例えば、春になるとコマージュで制服やランドセルなどの宣伝をしているのをよく見かけますが、その中でもズボンの制服は男子が着ていたり、スカートの制服は女子が着ていたりしています。ランドセルも、青や黒は男子が、赤やピンクは女子が背負っていることが多いです。このままだと、「SDGs」の目標は達成出来ず、世の中は男女差別のある世界になってしまうと思います。

来年私は中学校に入学して、制服を着ることになります。ですが、私はスカートの制服は着たくないなと思う時があります。今の世の中はまだ、「そっちの制服は着たくない」ので、こっちの制服が着たいです。」



というのは全ての学校で適用するわけではありませんが、最近のニュースだと、公立の高校などでは自由に制服を選べる学校が増えてきているようです。しかし、それを着て学校に行ったら周りがどんな反応をするか分かんなくて、不安の気持ちで登校する人がいると思います。たくさんの学校で制服を選べるようになると、そんな人が減ると思うので、もつと制服を選ぶ制度が広まってほしいと思います。

私が大人になるころには、世界の誰もが自分の好きな服を着たり、好きな物を買ったりできる男女差別のない、それがふつうの世の中になってくれるとうれしいです。そしてそんな世の中にするためにも、私も言葉の使い方、気を付け、誰がどんな服を着ていても同じように接することができるようにしていきたいと思います。そして、二〇三〇年までに達成すべき目標の「ジェンダー平等を實現しよう」が当たり前になるように、だれもが「自分らしく」を大切にできるように、男女差別のない世の中のできるように、私もこうけんしていきたいと思います。

## 「二つに共通しているもの」

平方小六年 九ノ里 湊 人

ぼくは、よく家族と街に出かけます。そのために様々な、公共の施設を利用します。行く所々に点字ブロックがあります。ですが、点字ブロックを使っている人を見ないなとぼくは思いました。

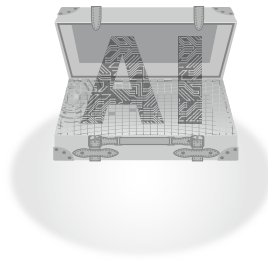
ぼくは点字ブロックを使っている人をあまり見ないということ、街に目が不自由な人が出かけ辛いのかなと感じました。そう思っていたら、テレビで東京都にある日本科学未来館の館長さんが自分も目が不自由で、その体験から盲導犬の代わりにスーツケースにAIを入れて道案内をしてくれる機械を作ったと報道していました。その開発した館長さんも自分が障がい者だから自分も分かりやすくするために作っている、ぼくはそれが自分の人権をそんな重くしているんだなと、とらえました。ですがふだんから、目が見える人は分かりにくいのかなとぼくは思いましたが、テレビのアナウンサーの人が体験していたのを見ると、AIが入っているスーツケースが人をよけるための案内をしたり、指示をした展示に連れて行ってくれて、その展示の説明までしてくれるそうで

す。テレビでは、このAIが入ったスーツケースの技術が進歩すれば目で見る展示よりも詳しくその展示のことを教えてくれるようになると言っていました。このAIが入ったスーツケースはテレビによると、日本科学未来館で借りられるそうです。また今後は、町中でも使えるようにしていきたいと館長さんは言っていました。なのでこのAIが入ったスーツケースを使っても博物館で体験したいなと思いました。

ぼくは始めにいった通りよく家族と町に出かけ、公共の場などを使います。ですがそこには様々な人がいます。おじいさん、おばあさん、男性、女性、子ども。また、テレビで性別が男性でも女性でもない人を見たことがあります。また、学校などで行うアンケートなどでも性別でどちらでもないというアンケートの解答らんがあります。ぼくはこれも人権なのかなと思いました。学校でもらったパンフレットを見ると「人間が人間らしい生活をするために生まれながらも持っている権利で、誰からもおかさされることのない権利。」と、書いてありました。ということは、性別がどちらでもない人も、自分が自分らしく生活するためのあたり前の権利ということが分かりました。

このように、人権には様々な種類があります。どちら

にも共通していることは、「自分が自分らしく生活するために」ということだとぼくは思っています。なのでこれからも、「自分は自分らしく」と思いながら生活をしていきたいです。



大沢北小六年 長野 清十郎

ぼくは、戦争について考えました。ある日、いつものように何気なく大好きな YouTube 動画を見ました。その時、「ボケテ」というタイトルで再生回数二億三千万回超えののを見つけました。映し出される写真に自分が思ったことを一言つけるというものです。タイトルが「ボケテ」なので、ぼくはてつきり、お笑い芸人達がまん才をしているようなものだとも考えず、ただただ面白く笑って終わるものだと思っていました。でも実際に見てみると、「ああ、面白かった」と軽い気持ちでは終わらない、終わらせてはいけないと心にズシン！とくるものを感じました。写真の一部は戦場で戦う兵士とその国の子どもだと思われる子ども達と一緒に写っているようなものです。

例えば、銃を持ちながら猫をなでている兵士の写真に投こう者は、「何で戦争するの？魚の取り合い？」「ああ、そんなところさ。戦争なんてそんなくだらないところから始まるんだよな。」や、兵士と子ども達が話している写真には「おじさん何でそんなダサイ格好しているの？」

「ああ確かにダサイな、君達が大人になる時にはこんな格好しなくて済むといいな」と表現し、そして、その兵士が亡くなったと思われる写真には、土の上にヘルメットと銃とくつがならべてあり一方子ども達は、兵士が亡くなったことを知らず、「あのダサイ服着たおじさん帰ってくるの遅いね」と書いてありました。最近、ぼくは授業で日本国憲法について勉強しています。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重です。ぼくは今、この決まりごとに守られています。でも戦争をしている国の人はどうなんだろう。

ぼくは、こんなことを感じました。戦争をしようと言った人は、多くの人をまきこんで人々の幸せをうばってしまう。その人達は、きつと生きたいや、戦争なんてしたくない気持ちはほぼ全員が思っていると思うが、そのことを言っても自国の方が正しいと思う人も悲しいことに現実です。でもぼくは、自国の意思を相手国に無理矢理強制しないで、相手国の意志も尊重するべきだと思います。人の命はだれかに決められてはいけなくないと思いません。

みなさんは、言葉づかいでだれかをきずつけてしまったことはありますか。言葉は、使い方によって相手を明るい気持ちにすることも相手をきずつけてしまうこともあります。

私は、四年生のころあまり言葉づかいを気にしていませんでした。ある日、休み時間に私が本を読んでいると友達が

「外で一緒に鬼ごっこしようよ。」

と言ってきました。しかし、私は本を読むことに集中していたので友達を無視してそのまま本を読み続けていると友達が

「ねえ、鬼ごっこしようよ。」

と言つて笑いながら私の本をうばいました。私は、本がうばいとられたことにイライラしましたが、

「本を読んでいるからじゃありませんでね。」

とイライラしている気持ちをおしころして、なるべくやさしい声で言いました。しかし、本を返してくれなかったので、私は

「じゃましないでよ。」

と少し強く言つて本を無理やりとりかえすと、友達は悲しそうな顔をしながら他の人達のところに行つてしまいました。その時は、特にこの出来事について気にしていませんでした。

しかし約一週間後、友達と一緒に家で遊んでいた時に友達が無言でゲームをしていたので、私が「ゲームやめて、一緒にこの曲聞こうよ。」

と言つても友達は、何も言わずにゲームを続けていたの

で

「何で私の話を聞いてくれないの。」

と言うと、友達が

「ゲームに集中してるから話しかけないで。」

と強めに言われてしまいました。私はその言葉を言われた時にとても悲しくて、心がいたくなりました。そして、最近自分も同じような言葉を言つてしまつていたことに気がつきました。もしかして、あの時友達もこんな悲しい気持ちだったのかな。何で私はあんな言葉を言つてしまつたんだろう。と思い、

「この前はごめんね。」

と私が泣きそうになりながら言うと、友達がゲームをやめて

「あの時は私も悪かったよね。ごめん。」  
と言ってくれました。さつきまでとても悲しかったはずなのに、「ごめんね」と言われただけで心があたたくなりました。

それから私は、二つのことを心がけるようになりました。一つめは、相手がきずつかない言葉を選んで話すこと。二つめは、もし相手をきずつけてしまったらはずかしくてもすぐに謝ることです。そんな大事なことを教えてくれた友達には本当に感謝しています。

言葉づかいだけで相手の気持ちを大きく動かすことができます。そして、相手をきずつけてしまう言葉を使っても自分も相手もいい気分にはなりません。しかし、相手がきずつかない言葉を選んで話すと自分も相手をきずつくことが減ります。

このようなことを一人一人が気をつけていくことで、世の中が明るく平和になると私は思います。なので、これから話をする時には、相手がきずつかない言葉を選んで自分の思いも伝えたいと思います。

私は、学校の総合の学習で、「バリアフリー」について学びました。その時、学校にある「スロープ」や階段に付いている「点字」などについて調べたり、見たりしましたが、自分の家など、身の回りではほとんど「バリアフリー」が無いと思っていたので、あまり自分自身に関係がないことだと思っていました。

私は昨年、コロナかで数年間行っていなかったのですが、北海道に住んでいたおじいちゃんが亡くなってしまうので、おじいちゃんの家に行きました。まず、げん関前の外階段の所と、げん関内の段差の所の二カ所に、車いすが通れるようにスロープが設置されていました。また、今まで引いて開けるタイプだったドアが、スライド式のドアになっていることに気がつきました。おばあちゃんに聞いてみると、おじいちゃんが車いすに乗って移動していた時に、車いすが通りやすいようにした事だと分かりました。それから、リビングとおじいちゃん部の部屋の境目に段差があったのですが、その段差も無くなっていました。たたみはずして境目の段差を無くし、

そうじをしやすいように洋室にするための工事をしたそうです。

私は、それをきっかけに、前よりも「バリアフリー」について気にするようになりました。そうしたら、帰りの電車の改札口には車いすを使用している人でも通れるようなはばの広い所があったり、ホームには点字ブロックがあり、ホームの内側と外側が区別出来るようになっていことに気がつきました。

そして家に帰って改めて見てみると、私の家には部屋と部屋の境目には、どこにも段差が無く、もし車いすを使うことになってもおじいちゃんの家のように工事をする必要がないことにも気がつきました。お母さんに話してみると、「昔は当たり前のように家の中に段差があったり、はばのせまいドアも多かったけど、最近の家は『バリアフリー』を考えて最初から段差も無く、色々な所に手すりもついた家が多いよ。」と教えてくれました。

でも、私はもつと車いすを使用している人が過ごしやすくならないかと思えます。まだ、道や場所がせまくて通れない、という所や、通れるようになっていく所が少ないのではないかと思つたからです。

障がい者も障がいをもっていない人も、みんなが利用している中で、「バリアフリー」は大事な事だと思つたので、

だれもが過ごしやすいように、「バリアフリー」がもつと進めば良いと思いました。



## 親戚との約束

蒲生小六年 磯 野 由 奈

私の将来の夢は、管理栄養士の資格を取り料理人として働くことです。きつかけは、あるお店にご飯を食べに行つた時に、その料理に感動し、私もそのお店の人みたいにお客さんを感動させ、笑顔にしたいと思つたことです。管理栄養士の資格を取ろうと思つた理由は、親戚のおじさんが管理栄養士の資格をもつていて、老人ホームで働いていたのです。ごいなと思つたからです。そのおじさんと管理栄養士の資格をとり、料理人として働く約束しました。けれど、今年急逝しました。

だからその約束を果たすと決めたから管理栄養士の資格を取ろうと思ひました。

今は資格を取るために、勉強をがんばつています。料理を作るのがんばつています。祖母や母、動画で覚えたいメニューは料理ノートに書き出して将来、使えるようにまとめています。

いつか、年配の方や、若い人達などの広い世代の人達が気軽にこれるような店を開き、たくさんの人を笑顔にしたいです。また、兄は陸上選手を目指しているので、

食事のサポートをしたり、母や父の食事を作つたりして家族も笑顔にしたいです。

将来、天国にいる、おじさんにも来てもらいたいです。「おじさん、待つてるよ！」  
と言いたいです。



## みょう字が変わること

大沢小六年 葛 西 菜 摘

「未来には、日本人全員のみょう字が『佐藤』になるんだって。」

体育が終わって帰ろうとした時、友達がこんなおもしろいことを言いました。私は少し関心を持ち、

「へえ、そうなんだ。」

と返しました。

そんな会話をしたこともすっかり忘れていたころ、新聞を読んでいたお母さんが、

「約五百年後、日本人は全員みょう字が『佐藤』になるってある研究で発表されたらしいよ。」

と全く同じことを言ったので私はびっくりしました。現在、人が結こんすると夫婦どちらかのみょう字を選ばなければならず、この制度を続けていくと、色々なみょう字が減少していき、将来みんな「佐藤」になる可能性があるというのです。

私にとって結こんはまだ遠い未来の話で、現実的にはあまりみょう字が変わることが想像できないので、お母さんが結こんした時の体験やその時どう思ったかを聞いて

てみました。するとお母さんは、みょう字が変わることにとても強い抵抗を感じたそうです。それまで生きてきた自分がこの世から完全に消されてしまうような気がしてとても悲しかったそうです。

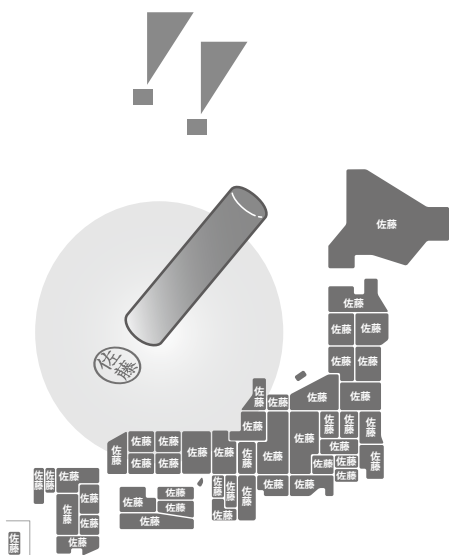
こんいん届を提出した夫婦のうち、約九十五％は女性の方が男性のみょう字に変えるそうです。その人たちが全て自分で希望して男性のみょう字に変えているとは思えません。私は自分のみょう字が変わることに対して、今は特に何も思いませんが、あまりいい気はしません。そもそもどうして女性だけが結こんするとみょう字を変える必要がある、男性は変えなくてもよいのでしょうか。ここには昔から続く差別感があるような気がします。

夫婦が同じみょう字にしなければならぬ先進国は、世界で日本だけだそうです。アメリカやイギリスなどは希望すれば元のみょう字のままでもみょう字は別々で、どちらかに統一することはないそうです。これはSDGsにも関わってきます。先生から日本はSDGsの十七の目標の内、五番の「ジェンダー平等を実現しよう」という目標がおくれていると聞いたことがあります。

夫婦で同じみょう字が良い人はそうして、いやなら別にする、ということが日本でもできるようにするとい



と思います。そうすればもつとみんな自由になり、悲しい思いをする女性も減ると思います。日本の女性のため、SDGsの目標達成のために私はこの日本を変えていく必要があると強く思いました。日本のみんなの笑顔をもつと見たいから。



## 「震災と復興」

大袋小六年 徳 留 爽 斗

皆さんは東日本大震災という大きな震災をご存じですか？

東日本大震災とは平成二十三年（二〇一一年）に発生し、最大震度七を宮城県で観測した、世界の中でも四番目に大きな被害を出した地震です。

主に地震後の津波や住宅倒壊などによって死者・行方不明者合わせ二万人を出した震災でもあります。

そして、この震災で数多くの死者・行方不明者を出した津波について考えました。

津波について最近では能登の地震で津波があり、聞いた人は多いと思います。

そんな津波でも〇・三mでも人は早い流れに巻きこまれる可能性もあるし、一mほどだったらほとんどの人が亡くなってしまう危険性もあるのです。

そしてこの東日本大震災では十数mから、四十mほどまでとどき、国内最大の津波でした。

また、この津波だけで二万人近い死者のうち約九十%の方が「溺死」で亡くなったのです。

この津波の被害もとてもすごかったのですがこの地震で他の大きな被害も出したのです。

ですが、今テレビなどで東日本大震災による津波のことや被害についてあまり聞かなくなっただけだと思います。

それは、「現地の人達も一緒に協力し、その他にも、海外の支援や政府機関なども活動し、みんな協力し合った」ということがあったから復興に近づけたのです。

その復興を見てきたわけでもない自分でも考えたことがあります。考えたことは、震災の後の「協力と譲り合い」です。

協力とかをせずに復興させることができてこんな早く復興できるとは思えないし一人一人が協力や譲り合いをやっていないかったら必要な人に食料などもとどかないで本当は生きていられる人も助からなくなってしまうこともおこってしまうと思いました。

だけれど、何もいわれなくても現地の人が一人一人大変なのに譲り合いできたのはすごいし、それで助かった命も多くあったのかなと感じました。

また海外の支援もあり、色んな人が色んなことで協力していたからのもあると思います。

だけれど、そのことを経験した人もこれからどんどん減ってってしまうと思います。

それで震災で色んな人が協力して、復興につなげたという記憶もなくなってしまうと思います。

この震災の記憶をなくさないためには、震災を経験していない人でもその記憶を伝えていくことはできるし、震災でもとても恐ろしいことがあったけれど、色んなところで色んな人が支えあったり協力して被災された方も譲り合ったりしながら頑張っていたということを伝えるということが大切なことだと思います。

そして震災によつてとても大きな被害や多くの亡くなられた方がいたけれど、このことを震災について知らない人たちに伝え、また他のところで大きな災害があるかもしれないけれど、協力してみんなでのりこえたということを思い出して震災を忘れず、このことを生かしながら生活することが大切です。



## とどけ私の声

大袋東小六年 澤 城 莉 那

私には、五年生のころからずっと心がけていることが一つあります。それは、だれにでも声を大きくして話すということです。それまでは、昔から人と話すときに声小さくなってしまう何度も言い直さなければいけないことが多かったのです。その他にも、速く話してしまうこともありました。しかし、このままではクラスの友達との気持ちが悪くなるのではなれてしまうと感じるようになり、声を大きくする努力をしたと思います。最初は頑張ろうとしてもきん張したり自信がなくなったりしてしまい、なかなかうまくいきませんでした。でも、努力を続けていくうちに少しずつ友達との話がスムーズになったり、それによって気分がとてよくなったりして、成果を感じられるようになりました。六年生になった今では、五年生の時よりも自信がついて、ほとんどの人とよく話せるようになりました。自分でもすぐく変わったと思うています。たった声を大きくするというだけでも、私の人生においては大きな変化になりました。この一年間の声に関する努力が、将来の職業について

考えるきっかけにもなりました。私は将来自分にしか出せない自分だけの声でいろいろなキャラクターに命を吹きこむ声優という仕事をしたいと思っています。もともとアニメやマンガが好きでしたが、声に関する努力をするようになってからは、内容だけでなく声優さんの「声」に注目するようになりました。一人の声優さんでも、キャラクターやその場面の雰囲気によって声や言い方を変えていることに気付くと、マンガでは伝わらないきん張感があつて、今までよりさらに面白く感じるようになりました。そして、その「声」が見ている人に届くことによつて、元気づけられたり夢を与えられたりすることもでき、すてきなお仕事だと思ふようになりました。

今では日本のアニメやマンガは世界中で人気があり、じまんの文化と言えらると思ふます。そして、これからはさらに発展していくと思ふます。私はその日本ならではのよさを伝えるためにも、声優になるために「声」の努力を続けていきたいと思ふます。そして、世界中の人に勇氣や希望、夢を与えていける人になるのが、世界で一人だけの私の夢です。

僕の憧れに向かつて

平方小六年 上 田 晃 誠

僕は、学校生活が始まった頃は、運動があまり得意ではありませんでした。本校には、「体力テスト」や「縄跳び大会」などの行事があるのですが、そこでもあまり良い成績を残せませんでした。ですが、その頃の僕は、体力がないことを何とも思っていない、休み時間には外で運動することも減ってしまい、中学年では、ほほ外に出ることもなくなっていました。

僕はゲームが好きで三、四年生の頃、あるゲームをプレイしました。そのゲームに出てくるキャラクターの速さに憧れて、「僕も速く走りたい！」といった目標を立てました。ですが僕は、休み時間はなるべく校舎の中で過ごしたいので、下校時にランニングをすることにして、それからほぼ毎日ランニングしながら帰りました。少しずつですが、足が強化されていくのが分かりました。一、三年生の時は、筋肉がついていなかったのですが、走り続けているうちに、足の筋肉が硬くなっていたからです。四、五年生では、運動会の〇〇m走で一位を、シャトルランでは、格段に回数が上がりました。六年生になっ

た今でも走り続けているので、今は体力ではあまり困っていません。リレーの学習をしているのですが、僕と仲間の工夫で四チームのうち二位にまで上り詰めることができました。ですが、その授業で自信を失いかけたことがあります。クラスで自分より速い子に、スピードで負けてしまったからです。「超えられるのかな」「まだ努力が足りないのかな」と一瞬思ってしまいます。ですが、頑張つてその子に勝つた時には、「嬉しい」を超えた「楽しさ」で心がいっぱいになりました。僕が鬼ごっこをする時は、最初は様子を見て、終盤にスパートをかけて逃げるのですが、調子がいい時には、五、六人の鬼を振り払つたこともあります。その経験が、走る僕の自信になっています。

僕は運動が苦手でしたが、憧れを持ち、少しでもその憧れに近づく為に努力した結果、昔の自分にできなかったことができる様になりました。これからも、自分の憧れに向かつて走り続けていきます。

大相模中一年 工藤 凜子

私には夢がある。それは、JALの客室乗務員になり、チーフパーサーを務める事だ。

幼少期、私達家族は父の転勤で海外と日本を往復する事が多かった。つまり、旅客機に乗る機会が沢山あったのだ。母はまだ赤子の私をつれて、たった一人で旅客機に乗りこんだ。不安でたまらなかつた母にやさしく声をかけたのは、JALスタッフの皆さんだった。「毛布はいかがですか。」「何かありましたら、いつでもおっしゃってくださいいね。」その何気ない言葉が、とても嬉しかったそうだ。

母がホットコーヒーを頼んだ時、客室乗務員は「小さいお子様をお連れのお客様には、冷たい飲み物をおすすめしております。」と言った。その話を聞いて、私は思った。客室乗務員は飛行機のウエイトレスでなく、お客様の安全を第一に考える保安要員であるのだと。もし機内が揺れて、コーヒーがこぼれてしまったら、子どもがやけどをするかもしれない。そんな冷静ですばやい判断が求められる仕事だと思った。

客室乗務員になるため、私は英語学習を大切にしている。機内アナウンス、国際線でのスタッフとのやり取り、全てに英語が欠かせない。特に重視しているのは、ネイティブに近い発音をする事だ。幼い頃の経験を、将来に生かせるように、日々練習を重ねている。英語が話せれば、様々な国の人とつながることが出来る。空から空へ、国境というへだたりを越え、様々なお客様の思いを乗せて飛び立つ。それが、旅客機の本当の役目なのではないだろうか。

私の目標は、二、三十代はキャリアを積み、三十代後半でチーフパーサー、そして四十代でファーストクラスに乘務する事だ。そしてその機内で、夢をかなえた同級生達と再会する事が、私のひそかな望みなのだ。スポーツ選手を目指す人、芸術の道を行く人、会社員になりた人など、周りには沢山の夢や希望を持った仲間がいる。あこがれの制服を着て、また挨拶を交わせるその日まで、努力し続けていきたい。

## 「私の将来の夢」

富士中一年 仁科 凜香

あなたは弁理士という資格を知っていますか。知らなくて当然だと思います。なぜならこの資格を知っている人は五人に二人と言われているからです。

そんな無名と言っても良いかもしれない資格、弁理士。そんな資格が私はほしいです。

理由は三つあります。一つ目は、単純にかっこいいと思っただけからです。なぜなら、人々の汗と涙の結晶を守るものが出来るからです。特許というだれにもまね出来ない権利の特許庁にお願いして認められれば、有限ではあるものの、基本的にはだれにもまねできなくすることが可能になります。

二つ目は、企業の切りふだを創るのがみ力的だからです。想像してみてください。なにかに失敗したとします。でも何らかの切りふだがあれば、失敗を無かったことに出来ると思いませんか。そんな企業の切りふだを創るのも弁理士の仕事だったりします。

三つ目は、もともと法律に関わる仕事をしたかったからです。気づいていた人も多かったかもしれせん

が、弁理士は法律関係の仕事です。もともと法律に関心があったので、この資格がほしいという気持ちにもつながつたのだと思います。

夢をかなえるため、私は法学部に行きたいのですが、それについての本を借りて分かったことが、法学部は、「読解力」がとて大切になっているのだということでした。私はよく、二百ページ以上の本を、読んでいるため読解力には自信があったのですが、思ったより自分の読解力は、ぜんぜん役に立ちそうではありませんでした。なぜならそれは、「長くて、難しい」ものだったからです。

だから、長くて、難しそうな本を借りたり買ったりしては、簡単に、分かりやすく短くをモットーに、要約をする練習をしています。この練習を続けることによって、読解力が確実に一歩、一歩と身に付いているはずでした。

これも本で知ったことなのですが、実は法学部に深く関わっている教科があるのだそうです。それは、「数学」です。これを知った時はおどろきました。なぜなら、大が付くほどの苦手科目だからです。百点は絶対に取れないと自覚しているほどです。

だからと言って、絶対に諦めたことはありません。苦しい科目でもおもしろさを発見していつか絶対に、自分のモノにしたいと思いました。

弁理士になるためには、とつても、難しい国家試験を受けなければいけません。合格をするためにも今やつてゐる読解力をやしなうものや判断力をやしなつたりする勉強をしています。もし、弁理士になれなくても、これでやしなつたモノは社会に出ても絶対に役に立つから、これからも頑張りたいです。

これもまた、本で知つたのですが、英語などの外国語も重要になつてくるのだそうです。だから私は英語を頑張つていて今は英検三級まで持っています。さらなる上を目指そうと準二級に挑戦中です。難しいですが、おもしろくもあり、楽しみながら頑張つている最中です。他にも英語で書かれた本を読んで、和訳したりしています。イタリア語やドイツ語にも興味が出てきて、しゃべれるようになりたいです。

私は、将来弁理士になりたいです。かつこよくて、企業の切りふだにもなつて、難しくも、おもしろみのある資格なのです。私は将来かならずなれるわけではないけれど、なりたいたいから、それに向けて勉強しています。

あまり知られていない資格でも、かげで企業をささえられる弁理士に、私はなりたいたいです。

「差別、いじめ、暴言などは一つもあつてはいけません。」と、テレビの有名な人が、学校の先生が、家族が、何度何度も口にする。これらの言葉や思いが伝わつて人もいれば、伝わつてない人もいる。「自分は関係ない。」「自分はやつていないからいい。」と思う人でも実は身近なところで差別をしたり、相手に嫌な気持ちをさせている人がいてもおかしくない。実際、私がそうだったから……。

小学生の頃、海外から来た子がクラスにいた。その子は少し茶色の肌をしていた。また、国の違いによるものなのか、少し匂いもした。私はその子に会うたび、近くことを嫌がつていた。私はこのとき完全な差別をしてしまつていたので。けれど、それは私だけではなかつた。周りの友達数人も同じことを思つていたらしい。休み時間、友達に友達といふ時、その子が通りかかる。そのとき、友達に嫌がる顔をしたのを覚えてゐる。少し安心してしまつた自分がいた。そんな当時の自分を今思い出すだけでも、悔やむ自分がある。

当時の自分を見直してみる。私はその子を差別してしまっていた理由。それは、きつと「肌の色」だ。私は相手が少し茶色の肌をしているという理由で、勝手に「その子はこういう子なんだ。」と気めつけてしまっていたのかも知れない。

ならば、これからの私ができることは何か。それは、「相手を偏見だけで気めつけない」ということ。相手の肌が黒色だから、相手は海外の人だから、自分とは違うからなどで差別をしない。自分とは違っている、話してみれば違う思いが生まれることだってあると思う。みんなは新しいクラスでできた友達の中に好きなものがあったり、実は話しやすかったりした人がいたはずだ。そんな風に少しずつでも一人一人が楽しんでいける、生きやすいと思える世界になれたらいいと思う。

私は前の経験を頭の中に入れておき、これからの自分の行動や思いに悔いを残さないように日々努力したいと思う。また、差別をするのではなく、相手と話し、みんなが仲良くなれる世界をつくれたらと、私はこの先も思い続けるだろう。そして、その日が訪れる日をずっと願っていた。

## 「普通」

大袋中一年 平 林 功 雅

僕は、「普通じゃない。」や、「それ変じゃない。」、「変わっている。」そんな言葉が嫌いです。

きつかけは、四年生の校外学習です。普段のランドセルではなく、各自で自分のリュックサックを持っていく必要があります。僕は少し派手な柄のリュックを選びました。すると友達に、「そのリュック変わってるな。」とか、「それ変じゃない。」と言われました。友達になぜそう思ったか聞くと、「だって普通は俺みたいなな。」と言われました。その後は、適当に受け流し、そんなことも忘れ、校外学習を楽しみ、家に帰りました。しかし、ふと家でリュックサックのことを思い出しました。「このリュックは友達に変て言われたし、使わないようにしよう。」と思いそのまま、そのリュックを使うことはなくなってしまういました。

とても些細なことかもしれませんが、僕はそれをきつかけに普通とは何か、常識とは何かを考え、気にするようになりました。

それから、五年生になり、休み時間、友達三人で話し



っていると、友達のア君が、

「Bつてき、なんかいつも笑っているしき、みんなと違う行動をしないで変じゃない？」と悪口のような話をしました。「たしかにB君は周りに比べて笑っていることが多かったり、みんなと違う行動をしているかもしれない。」と思いましたが、しかし、A君の話の全てに共感したわけではありませんでした。「周りと比べて、笑っていることが多かったり、行動が違っていることは、悪いことなのか。」と。A君の話聞き、こう思う気持ちが僕にはありました。そして考えていくうちに「逆に普通じゃないといけない理由って何だ。」と思いはじめました。それから、半年以上が経ち、六年生になりました。今だに僕は、「普通じゃないといけない理由」について、明確な答えをだすことができていませんでした。

ある日の道徳で「個性」についての授業がありました。ふと、四年生のリュックのことと五年生のB君についてのことを思い出しました。授業が進んでいく内に、B君のことも、自分のリュックについても、個性だと感じました。それならば、なぜA君は、B君の個性を否定したのだろうと考えました。そして、あることに気づきました。「普通じゃないといけない理由なんてない。普通に合わせる必要なんてない。」と。

ただ人数が多く、多数派だからという理由だけで決まった普通に合わせたり、普通ではない人を除け者にするることによって、差別が生まれたり、いじめにつながったりするのだと僕は思います。

「肌の色が違う。」「考え方が違う。」など「普通じゃない」が世の中には溢れています。しかし、それだけの理由で仲間外れにしたり、悪口を言ったりするのは、やめてください。そして、そんな普通にとらわれて、周りの目を気にして本当の自分を隠すのは、やめませんか。どうか一度でも、本当の自分をだしてみてください。それが私やあなたの本来の姿です。

ちりも積もれば山となる

光陽中一年 久保 はるか

みなさんは生活の中で屋外に出かけることがよくあると思います。散歩、通勤、登下校などほとんどの人が一日一回は家の外に出ているでしょう。その時、誰もが一回はポイ捨てされているゴミ、またはポイ捨てしているところを見たことがあると思います。私はポイ捨てをなくして、ゴミが落ちていないきれいな越谷にしていきたいと思っています。

私は月に一回ゴミ拾い活動に参加しています。参加した理由は友達がその活動をしていたからです。約二時間ゴミ拾いをしてみて驚きました。二時間のゴミ拾いでコンビニで商品を入れるために買うビニール袋の約五分のビニール袋がゴミでいっぱいになりました。普段、登下校でなにげなく目にするゴミを集めるとこんなにたくさんゴミがポイ捨てされていることを知りました。そして世界の中の日本の埼玉県の中の市の一部だけでもこんなにゴミが落ちていているということは世界にはどれだけのゴミがポイ捨てされているのだろうと悲しい気持ちになりました。皆さんはなぜポイ捨てをやめましょうと

言われているか知っていますか。ほとんどの人が知っていると思いますが、ポイ捨てされたゴミは、やがて川や海に流出し、海洋ゴミになってしまうからです。そして海洋ゴミになったゴミ、特にプラスチックゴミは微生物の力では分解されにくいいため、いつまでも海に残り続けます。その結果、プラスチックゴミが小さな破片になったマイクロプラスチックを、魚や貝などがエサと間違えて食べてしまつて魚や貝などが死んでしまうということもあります。このマイクロプラスチックは人体にも影響を及ぼします。マイクロプラスチックは海中の有害物質を取り込みやすいため、有害物質の運び屋として海に汚染が広がってしまいます。このマイクロプラスチックを食べてしまった魚を私たちが食べてしまうと、プラスチック自体は排出されますが有害物質は体内に蓄積される可能性があつてガンの発生や免疫力の低下を引き起こすかもしれません。また、プラスチックに含まれる、環境ホルモン作用の物質によつて生殖能力低下などの作用を及ぼす可能性が指摘されているからです。つまりポイ捨ては、海、魚、そして私たち人間にも影響を及ぼすのです。私はこのことを知つてから友達が活動しているからじゃなくて、自然や人間を守るためという意識が強くなつてきています。そしてこのゴミ拾い活動から、「私

だけなら」や「少しぐらいなら」という考え方は結果的に地球全体に関わる問題になるということを知りました。ちりも積もれば山となるということわざがあるように小さなことでもたくさんの人がやれば問題になるし、小さなことを積みかさねていけば良い結果につながることもあるということを知ることが出来ました。

皆さんは、ポイ捨てをしていませんか。そのポイ捨てで誰かが苦しむことになるかもしれません。考え方を変えればポイ捨てをやめることで誰かを救うことが出来るかもしれません。そして、ゴミ拾いをする事によって何十、何百、何千、何万もの命を救えると思っております。ゴミ拾いを始めるのが難しい人は、ポイ捨てをしない、消しカスを床に落とさない、教室にゴミが落ちていたらゴミ箱に捨てるなど身近なことから始めていきませんか。誰かのこういつた意識がたくさんの人に伝わればポイ捨ても減ると思います。自分の育った越谷をきれいな場所にするために、自分の大切な人を守るために、自然や生物を守るためにポイ捨てをやめて、ゴミ拾いを始めてみませんか。

「絵本作家になりたい」

私が幼い頃から大好きだった絵本。そんな絵本を作る絵本作家になることが私の夢です。しかし努力をしなきゃ当然夢に近づけません。私は実感し、努力しようと決めました。

私が幼い頃、母は私によく絵本を買ってくれました。だから幼少期は、寝る前の本を読んでもらう時間が楽しみでした。それから自分一人で読めるようになりたいとひらがなを勉強し、絵本が読める時間がさらに増えました。本を読むと、今までしらなかった言葉に出会えたり、想像力が豊かになったりといいたころも沢山あります。なので自分が絵本を作りたい、みんなに本の素晴らしさを伝えたいと思ひ、絵本作家を目指すことにしました。

しかし、私は今までなりたいたいと言うだけで文章力を鍛えたり、絵本作家になるために今からできることを調べたりすることはなまま時は過ぎていきました。このままでは私は絵本作家になれないなと思ひ、私にはむいていないんじゃないかと考えることもありました。そんな

時、小学六年生の社会科見学で子どもの街キッズニアに行き、出版社のお仕事を体験しました。自分で編集し、自分で作った絵本はとても輝いて見えました。自分で絵本を作るという貴重な体験。そこで私は絵本を作るのはこんなに楽しいんだと、やっぱり私は絵本作家になりたいんだと改めて感じました。

その後、私はあるニュースを見て今から絶対に絵本作家になるための努力をしようと決心しました。そのニュースはこどもの日特集というもので、子どもに将来の夢をインタビューするという内容でした。インタビューを受けていた子どもたちは私より年下でしたがみんな

「パンダの飼育員になるためにパンダについて毎日勉強し、動画で観察しています。」

「デザイナーになるためにお人形のお洋服をお母さんと一緒に作ります！」と自分の夢に向かって努力していました。自分より小さい子達がこんなに将来に向けてがんばっているのに私は何もしていない。自分がとても情けなくなりました。

私はその日から絵本作家になるために努力し始めました。色々なジャンルの絵本を読み、どんな表現の仕方をしているかを調べたり、弟の意見を参考にしてみたりし

ました。

少しずつ夢に近づいてきている気がして、もつとがんばろうと思いました。

夢には努力をしないと近づけることはないと感じました。これからも、したい、なりたいたいと思うものが出来たら、その目標に向かって努力をし、少しでも目標に近づきたいなと思います。



## 自然の魅力の宝、越谷市

新栄中一年 加藤 千咲

私は、北越谷にある川はきれいで魅力的だと感じました。なぜなら、桜と菜の花が川に反射していてとてもきれいだからです。また、夕方だと太陽が川を照らしていてよりきれいに見えました。その逆に青空だと川に雲の白と青い空が反射してまた違う美しさがありました。

私は、この景色を見て素敵だなと思いました。また、今しか見れない景色を家族と眺めることができ嬉しかったです。その時は丁度入学式の前日だったので制服と桜と夕日と川でとても美しい写真をとることができました。

このように、越谷は自然がたくさんあり美しいと感じさせられる市だと思います。また、越谷の魅力は無限大にあると思います。

## 私の決意

大相模中一年 上原 凜華

私達は将来何になるか分からない。だから夢を持つのだ。

私は今、越谷市子ども育成連絡協議会のサポーター「ジュニアリーダー」に所属している。ジュニアリーダーとは、地域のイベントをより盛り上げるための、中、高、大学生によるリーダーの集団のことだ。

さて、なぜ私がこれに所属しているかと言うと、きっかけは、昨年の防災キャンプだ。キャンプといっても半日で、泊まらないが、防災についての知識をより高めるものだった。そこに居たのがジュニアリーダー。私は初めて知った。まだ小学生だった私達をまとめて、引っぱっていつてくれた姿に、私は、あこがれた。こんな人になりたいと。七回にわたる研修を終え、晴れてジュニアリーダーとなった。だが、うまくやっていけるか心配だった。そんな私を支えてくれたのは、同じ研修に参加していた、同い年のジュニアリーダーと、先輩のジュニアリーダーだった。初めは心配だったが、今は、すっかり慣れた。今度は私が、ジュニアリーダーとして、地域を盛り上げ

たり、他の子を引っぱっていける存在になりたい。そのために、積極的に地域のイベントに参加して、その地域について知る必要がある。だから私は、自分に今できることについて、考えながら過ごしていきたい。

そんな私の夢は、薬剤師になることだ。私は、小学校五年生の時に、手にいぼが出来て、皮ふ科に行った。液体ちっ素というものを手につける治療法だ。その後隣接している薬局に行った。そこでは、たくさんの人が待っていて、何人かの薬剤師が、患者さんによりそいながら、一生懸命忙しく働いていた。その時、私は、手伝ってあげたいと思ったのだ。なぜそのように思ったのかは分からないが、忙しく働いていながら、患者さんと向き合っている姿を見て、心を打たれたのだろう。もともと私は、細胞や細菌について調べるのが好きで、漫画も読みあさっていた。さらに、私は、人が笑顔になるのが嬉しくて、薬を受け取った患者さんが笑顔になっているのを見て、自分に合っていると思ったのだろう。ただ、薬剤師は、頭が良くないと成れない、人の命を左右する大切な仕事だ。だから、今の内から一生懸命勉強して、たくさんの人を笑顔にすることが出来る薬剤師になりたい。

私は、この二つの事について、これから私の目標になれるように頑張りたい。ジュニアリーダーとして、地域

を盛り上げ、たくさんの人をひっぱっていける存在に、薬剤師で、患者さんに向き合って、笑顔になれるように、今の私の出来る最大限のことをしてあげたら良いと思う。今はまだ、夢がない子もいる。ただ、夢がないのではなく、「見つかっていない」の方が正しいと思う。夢は身近で、興味を持った少しのこともそうだからだ。私は、これからどんな夢を見つけるのだろうか。



## 将来の夢

大相模中一年 坂庭美心

「音楽の先生になりたい。」

私の将来の夢は、小学校の音楽の先生。さらにくわしくすると、なくなってしまう小学校の金管バンドをふっかつさせ、コンクールで全国大会に出場したいという夢、目標が自分の中で存在する。

この夢を持ちつづけている理由は、大きく二つある。一つ目は、日本が不安定だと感じているからである。二千二十四年。一月一日。めでたい日とは一転し、悪夢のような日となってしまう。現地の方々は、今も不安な日々がつづいているようだ。もし、今、歴史に残る大地しんが、ここで発生したとしよう。もしそこに、自分がいたとしたらと考えてみてほしい。どうだろうか。不安な気持ち、怖い気持ちになっただろう。ひなん所でも、きつとそんな気持ちになるだろう。そんなとき、ひなん場所の体育館から、元気で笑顔の小学生の金管バンドの音が聞こえてきたら、どんな気持ちになるだろう。少しは明るい気持ちになるだろう。

このように、自分達ができることを、共有し、地域の

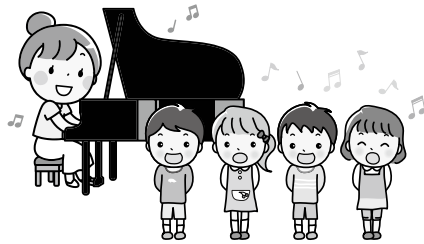
方々、離れた地域の方々にも喜んでもらえる演奏がしたいというのが一つ目の理由である。

そしてもう一つは、目標にある、なくなってしまう金管バンドをふっかつさせたいからである。日本は、金管バンドより吹奏楽のほうが活ばつと他の国から感じられていようだ。実は吹奏楽がさかんなのは、主に、アメリカと日本だけなのである。このことから、私は大人に伝えたいことがある。

「小学生は金管バンド、中学生からは吹奏楽」というがいねんを捨ててほしいと思っている。これは、大人と子どもの差別に近いと思っている。そして、イギリスなどの国では、子ども、大人、お年寄りの方、関係なく、ブラスバンド（金管バンド）を楽しんでいる。このデータから、金管バンドを、日本により広め、残さなければいけないと考える。そのためには、今、日本に存在する、小学校等の金管バンドを大切にし、なくなってしまう小学校の金管バンドをふっかつさせることが必要だと思う。しかし、これはかんたんなことではない。指導できる指導者や、新しく金管バンドを成り立たせるためにかかる費用などで今からでは難しいことも多い。

私自身が望む未来は、世界中の人々が協力し合い、ブラスバンドのような、個性豊かな世界になつてほしいと

望む。そして、自分が、この文章に書いたことを達成できよう、時間を大切に、色々な目線で、世界を見ていきたいと考える。



### 「私の楽しいしゅん間」

南中一年 松 田 美 咲

私が今がんばっていることは、習い事の習字です。習い事の習字では、毎月お手本が配られてその文や字を書いていきます。上手く書けると段級が上がります。段級が上がることによって、私のモチベーションが上がります。また、先生や家族にほめてもらえることよりやる気が出ます。

習字には、良いところがたくさんあると思います。一つ目は上手く書いたことで自分に自信がついたり楽しいと思えたりします。前に書いた通り、習字には段級があります。段級が上がるということは上手く書いたということなので、その分自信になります。自分の技術が上がるには時間がかかるけれど先生などに指てきされたことを直す時間も、自信をつけたり楽しいしゅん間をつくるためには必要なことだと思っています。私が思う、習字の「楽しい」しゅん間は、字を一生懸命書いている時、周りの人にほめられた時、段級や賞状で形として残った時など、人によつてどう思うかは違うと思いますが、私は、この3つが「楽しい」しゅん間なのです。良いとこ



ろの二つ目は、集中力や観察力を高められるところだと思えます。字を書いている時は、静かで落ちついていた方が取り組みやすいので、普段の生活でも、集中力が高まったのではないかと思います。また、字を書く時はお手本をよく見ないと上手く書けません。自分の字とお手本をよく見比べてみると思っていたより違うな、というところがかかなりあります。観察力は、普段の生活でも人が困っている、や体調が悪そう、など変化に気づくことのできる力だと思えます。その観察力を上げるためにも習字ではお手本をよく見ながら書く、ということに意識して取り組みたいです。集中力や観察力を上げると、勉強がはかどったり人に優しくできたりすると思つていきます。

私は、習字を通していろいろな力を身につけたいです。字を上手くするのはもちろん、人としてどうなりたいかを考えることができるかと思えます。今がんばっている習字をこれからもがんばって、自分の思う「楽しい」を見つきたいです。また、人として成長できたらいいなと思えます。

今回は、辛いことがあっても幸せになれる方法を教える。これを読んで、前より多少幸せになつてくれたらうれしい。

一つ目の方法は、「ポジティブに考える」ことだ。もちろんいじめとかは無理に幸せになろうとせず他の人に打ちあけ解決してほしいが、多少の辛いことがあつた人には、ポジティブに考えることが効果的だ。自分ならできると、絶対にできる！と、自分に自信をもつてほしい。そしたら気持ちが楽になる。

二つ目の方法は、「笑顔」だ。笑顔はとても見ていて気持ちよく、自分も、相手も良い気持ちになれるまほうの行動だ。だから自分は辛いことがあつたらよく笑顔をする。笑顔は自分も相手も安心させ、すがすがしくさせる。だから自分は笑顔が大好きでもっとみんなにしてほしいと思つている。日常をもっと楽しくするためにこのまほうをもっともつと広げてほしい。

三つ目の方法は、「きゆうけい」だ。仕事をたくさんやって帰ったり、部活で疲れた人、辛いことがあつた人は、

必ずきゆうけいをする。きゆうけいとは、自分の心、脳をリラックスさせてくれるものだ。きゆうけいすることで、心も体も休まり、幸せを感じることができはずだ。

四つ目の方法は、山や海などに行き、「自然を感じる」ことだ。自然は、人が手を入れていない野生、のような場所で、木のゆれる音、小鳥のさえずり、川の流れる音、絶景、あげだすとときりがない自然の神秘は、自分の心をじょう化させてくれることだろう。

五つ目の方法は、「話す」ことだ。話すこととは、自分の心の内を明かせる行動であり、とつても重要なことだ。もし君がいじめられてるとしたら、そのことをだれにも話さないより、親、友達、先生、だれかに話した方が絶対良いはずだ。仲が良くない人とも、話すことでもつと仲良くなれるかもしれない。逆に、仲が悪くなるかもしれない。むずかしいかもしれないが、不満がなく心の内を全て話せる存在ができたなら、かなりの幸せを感じる事ができるだろう。

六つ目の方法は、「自分のやりたいことをやる」ことだ。自分のやりたいこと、楽しいこと、好きなことをやっていけば、必ず辛かった気持ちがあふき飛んで行くだろう。ゲームや遊び、特に仲が良い人と遊ぶのは良い。心の内を明かせる友人たちとふざけ合い、笑い合い、笑顔にな

る。それだけでとつても幸せを感じる事ができるはずだ。

七つ目、最後の方法は、「よく見て、感じる」ことだ。幸せとは、練習、勉強などの努力をしてえた結果、「なる」ものではなく、「感じる」ことなのだ。この文章で、と中から幸せになる、から幸せに感じると言い方を変えたのに気づいただろうか。多くの人はより社会的地位を上へ上へと登っていった先に幸せがあると考えているのではないだろうか。想像してみてもほしい。プレッシャーの多い管理職に昇進したり嫌な上司と高級レストランに行くより仲が良い人と遊ぶ、話す方が、「あく幸せだな」と感じるのではないだろうか。幸せになりたければ幸せを感じるようになればいい。より大きな幸せをえたいなら自分が幸せに感じるしゅん間を増やせばいい。幸せは自分が「幸せを感じる感度」と「幸せを感じるしゅん間」のかけ算で大きくなる。だから、自分が楽しいと思えること、好きなことをやれば幸せを感じる。つまり、まわりのじょうきようをよく見て、ポジティブなことを考えたり、笑顔を試してみたり、リラックスしてみたり、自然におもむいてみたり、仲いい人と話したり遊んだり、よく見て自分が幸せに感じることを探し、やってみることが、「毎日が幸せに感じる方法」なのだ。

私が今、解決しなくてはならないと思っっているのが「地球環境の問題」についてです。最近では、地球温暖化のこともテレビなどでとりあげられていますし、海や森の保全問題なんかもあります。昔はこのようなことがなかったはずなのに、なぜ今になって環境問題がおきているのでしょうか。

環境問題がおきている理由として、一番に上げられるのが「人間」の行動です。人間はこれまで「便利なものがほしい」「もつと楽に生活したい」といった欲求で、いろいろなものを発明し、生み出してきました。しかし、そんな便利なものも使えなくなるとすてられてしまい、そうなるとまた新しい製品を作らなくてはならなくなりません。そうしたくり返しが続き、ごみが増えていつてしまうのも一つの環境問題です。海にたぐや海洋プラスチックを、そこに住んでいる生き物が誤って飲みこんでしまい、死にいたる、というケースも少なくありません。また、「持ち帰るのがめんどうだから」といつて、ピクニックをした場所にごみを放置するのも、地球をよごす行い

になります。ある日、こんな番組を見ました。人がいない砂ばくのようなところに、たくさんの方が山のように積み重なりすてられていました。さらにその服に火がつき、燃えている映像もながれていました。そして、すてられていくほとんどの服が、まだ着られそうなのばかりだといひます。国によつては、服のはいき処分を禁止する法律もでているとのことです。この番組を見て私は「環境問題と向き合っているけど、まだ解決はしていないのだな」と思いました。このような問題は人間が起こし、その問題は人間自身が解決しなければならぬ。それが大切だと私は思ひます。

このような環境問題は地球上にたくさんあります。そしてその環境問題を解決しようと、世の中は動きはじめています。例へば、SDGs。これは、二〇五〇年までに十七個の目標をみんなで達成しよう、というものです。その中に「陸の豊かさを守ろう」「海の豊かさも守ろう」といつ目標があります。この目標を達成するには、海におちているごみをひろう活動に参加したり、自分で出したごみは自分で分別してすてたりしたら、美しい森や海の景色を楽しめるかもしれせん。

このほかに、地球を守ろうと活動する人達や、陸や海の豊かさを守るために活動するボランティアに参加す

る人達など、地球の豊かな自然を守ろうとする活動はたくさんあります。そのためにもまず、地球の今の姿を知る必要があると私は思います。そしてその姿を知った上で、みなさんも地球を守る活動に参加してみてもいいでしょう。



## 将来の夢

南中一年 吉岡和哉

僕の将来の夢は消防士です。僕が、消防士になったら、人命をたくさん救い、立派になれるようにしたいです。でも、消防士になれるか不安な面もあります。

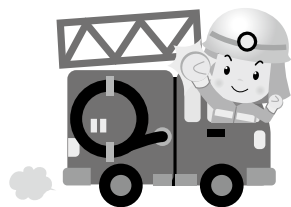
なぜ僕が消防士になりたいかというところ、お父さんが消防士なので、仕事をしている様子を見て、「カッコいいな」「ああゆう風になりたいな」と感じたからです。しかし、「大変そうだな」と思う場面もあります。例えば、実際にニュースで報道された事件で、二十四時間見張りを交代してやっていたり、朝早くから出勤していたりします。こんな大変な仕事でも僕は消防士になりたいです。

そして、お父さんに「消防士になるにはどうすればいいの」ときいてみたら、とにかく体力が必要だということが分かりました。僕は、その言葉をきいたら、消防士になれるか不安な気持ちになりました。理由は、体力があまりないからです。僕は、一キロ走ったぐらいでばてていました。だから、そんな自分を変えるために、陸上部に入り、長距離をたくさん走って体力をつけることを目標としています。

陸上部では、筋トレや、長距離走をするので、きつい時がたくさんあります。特に、最初のころは、筋トレなどできつかった思い出があります。今でも、五キロぐらいは走れるようになってきたけど、それでもきつい時には、「消防士になる!」ということのを頭に思い浮かべながら、やっています。

僕のおじいちゃんも、消防士です。おじいちゃんも、消防士の時には大変だったと思います。おじいちゃんにも、消防士のことをきいてみると、おじいちゃんが消防士だった時の写真や、その時の話などをしてくれました。僕はその時に「やっぱり消防士はかっこいいな」「すごいな」と感じました。

僕は、これからも、消防士になれるように、部活動や勉強を頑張ります。



## 私の人生という物語

優秀作品

武蔵野中二年 矢部 実花

十月頃のこと。憧れていたダンスの選抜オーディションに受かった。ここからだ。私は、自分の人生の主人公になれた気がした。

ずっと夢見ていた。汗も輝いて見えた選抜。自分がなれるなんて夢にも思っていなかった。しかし、ワクワクしていたのも束の間。きつい、辛い練習があつてこそそのあのクオリティだったのだ。私は毎週木曜日のレッスンが憂鬱で仕方なくなつた。エレベーターで六階に上がる。ドアが開いた時の汗で湿つた空気と匂いを嗅ぐだけで少し気が引き締まる気がしたのは私だけじゃなかっただろう。何度も踊つては修正を繰り返した。正直あきてしまうほどだった。

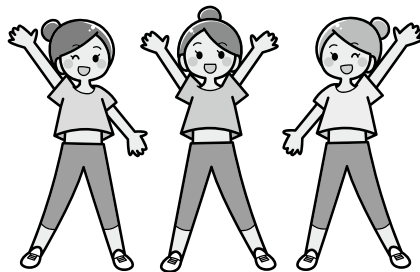
ある程度振りができてからはたくさんコンテストに出た。賞を取ることはできたが、毎回優勝には届かなかつた。しかし、私たちは負けるたびに強くなった。そして、最後のコンテスト。前とは違つた、どこか気持ちが変わつてくるダンスだった。しかし、結果は惜しくも準優勝。悔しい気持ちでいっぱいだった。あの時打ち上げで食べ

たラーメンの少し辛い味はこの先の人生ですつと、忘れることはないだろう。

ラストレッスンの日。チームのメンバーで、支えてくれたスタッフの方々、先生に感謝の思いを乗せてダンスを踊った。それぞれ考えた手紙を読むときには、滝のように流れてきておさまらない涙でうまく話せなかった。懐かしいスタジオの匂いをまとって、先生からもらったチームの名前が印字されているネックレスとみんな写真撮った。いつもと同じようにシャッターを切っているだけなのに、その日は一回一回がとてもゆつくりで大切な気がした。写真に写っているネックレスを見ると幸せで胸がいつぱいになった。

今でも時々メンバーで集まることがある。恥ずかしいとか気まずいとかそんな気持ちは一切ない。ただただ幸せで、あの頃を思い出すとまだ泣き足りない気がしてくる。こうして集まると、チームが終わってもあの頃の私たちと何も変わらないことに気付いた。本気で一緒に戦って、喜んで、たくさん悔しい思いをしてきたからこそ、分かることや忘れられないことがあるのだ。たった半年のこと。しかし、その半年の中に、誰も敵わないくらい最高のストーリーが詰まっている。そして、どれだけ負けようが、くじけそうになるうが、私の人生とい

う物語の主人公は私だけなんだ。



## 否定の意味

千間台中二年 石原 広 大

「言葉」とは周りの事、自分の事を知ることのできる優れたコミュニケーションだ。

その中でも「否定」のニュアンスを含む言葉が会話で多く使われていると私は思う。私は会話の中でなぜ否定の言葉が多くなっているのか、どのような意図で言っているのか、この二つの事について気になり考えた。

まず、「肯定」をするとどうなるのかという事について考えた。この条件だと、話がとても円滑に進むだろう。なぜなら、肯定することで、賛同することも、「でも、私は…」と自分の意見を述べることもできるからだ。ここで一つ疑問が浮かんだ。ではなぜ「肯定」だけをしらないのか。「肯定」と「否定」とでは、会話の流れはどうかなのだろうか。

「肯定」と「否定」これらの違いについて考えた。私は会話の中の「肯定」「否定」のイメージについて考えた。「肯定」は好感などのプラスのイメージを持っている。対して「否定」は少なからず嫌悪感などのマイナスのイメージを持っているだろう。この二つは対極に位置して

いるが、会話の中ではどのように感じよう。私は「肯定」よりも「否定」の方が印象に残る。だから、相手に印象を残すために「否定」が多く使われるようになったのではないかと私は考える。もちろん全ての「否定」が当てはまる訳ではない。だが、「否定」は強く印象に残る。ところで、「否定」はそのような使い方だけなのだろうか。私はそうではないと考える。以前私のコーチが「自分自身を否定するところから、どんどん上手になる。」と言っていた。この否定は何を否定しているのだろうか。

それは自分自身の限界である。目指しているのは、はるか上。その上にも、上にも人はいる。だから自分ばかりでないと勝手にレッテルを貼ってしまうのだ。大きな空を見ず、鳥はどう飛ぶのか。上が見えるということは、怖いことではない。目標が見えるということだ。だからこそ「否定」するのだ。その否定は心に強い印象を与えるだろう。その原動力で、もつともつと高く上を目指す。「言葉」は良くも悪くも心に残る。だから名言は生まれる。また、いじめも生まれる。特に「否定」はその中でも特に強い印象を与える。だから、日常で使う人も多いのだろう。

このように「否定」には様々な使い方がある。ただし、相手の悪口など、相手の生き方を否定することはしては

ならない。「否定」は強い言葉なのだ。それに対し人間は弱い。すぐに傷ついてしまう。しかし、人間は様々な感情を持っていてそれを理解できる。だから人間は優しく、厳しく、面白い。それを、「否定」という一つの言葉で潰してしまうのはもつたいない。

最後に、一度自分を見つめ直してほしい。それが正しいのか。このままでいいのか。もし、もつと成長したいのなら、自分自身の限界を「否定」し殻をやぶってみてほしい。それは良くない結果を招くかもしれない。しかし飛び込まないと世界は見えない。

「言葉」とは周りの事、自分の事を知ることができる優れたコミュニケーションだ。そしてその力は大きく、「意味」がある。

私は、「人の喜びは自分の喜び」という言葉を大切にしている。この言葉は私の座右の銘である。委員会活動などを行うときには、絶対に忘れないようにしている言葉だ。これは、私が小学生だったときに先生から教えてもらった。みなさんは、この言葉の伝えたい意味は分かるだろうか。小学生の時の私は、分からなかったが、今はこの言葉の伝えたいことや意味がよく分かる。その多くは、ボランティア活動を通してたくさん学ぶことができた。

私は、児童館でボランティア活動をよくしており、魚のエサやりや水槽の掃除、先生たちのお手伝いなど様々なことをすることができた。その中でも、七月・八月に近くなるとザリガニ釣りが行われ、私は、そのサポート係などをよくやっていた。小さい子どもたちでも釣りやすいように、つりぎおの長さを工夫したり、釣れたザリガニを入れるバケツを持ってあげたり。そして、ザリガニが釣れると、

「見て！釣れたよ、やったあ！」



と満面の笑みで見せてくれる。その時に思った。これが「人の喜びは自分の喜び」なんだな」

と。とても、胸いっぱい喜びがあった。

また、地域の清掃活動などをしている時もだ。なかなか関わることもない地域の人と関わることができ、町もきれいにすることができ。清掃が終わった後には

「ありがとうね。」

と言ってくれて、やってよかつたなと強く思う。ここでも、

「人の喜びは自分の喜び」  
を実感することができた。

そして、日常生活でも実感することはたくさんある。例えば友達から勉強教えてといわれたときだ。解説しながら、一緒に問題を解いていき、

「あ！なるほど！」

と分かってくれると、上手に伝わってよかつたなと思う。

みんなは、このようにだれかが喜んでいるところを見ると、自分まで喜べると思ったことはないだろうか。自分が幸せなら一番と考える人もいると思う。それでも、時には、一歩さがつてみるとまた違う見方ができる。だからこそ、だれかが喜んでいるところを見ると、私まで喜べる。これはきつと特別でとても幸せなことなの

であろう。みんなの座右の銘は何だろうか。私は先程も言つたように、

「人の喜びは自分の喜び」

である。この言葉には私が思つていた以上にとってもたくさんの意味がこもつていた。笑顔や感謝、喜びなど、そして、これから先も、まだまだこの言葉の意味をたくさん見つけることが出来るのであろう。だからこそ、私はこの言葉を大切にしてこれからも生活していきたいと思う。

春の桜吹雪。夏の清らかな風。どちらも気持ちのいい午後だった。ある二つの出来事をきっかけに、のちに「家族」という存在がどんなに大切か考えることになる。

小学校の時のことだ。いつものにぎやかな光景、友達と楽しく過ごす学校生活。そんないつも通りの日々を過ごしていた。その日は天気が良く、昼休みは外に出て遊んでいた。高鉄棒で遊んでいた時。その時だった。高鉄棒から、顔面から落ちてしまったのだ。その時の光景は今でも覚えていいる。落ちた瞬間、私には何が起こったのか全く理解できなかつた。ただ「痛い」という感情がただひたすらに長く私にとびかかってくる。その出来事があつた後すぐに両親が駆けつけてくれた。仕事を放つてまで駆けつけてくれたのだ。私はその瞬間に安心感と罪悪感が生まれた。ほつとした感情と、迷惑をかけたという感情が入り混じつた思いだった。胸が締め付けられるような苦しい感情にもなつた。しかし、安心感が強かつたのか、一気に感情があふれ、涙が出た。この出来事は今でも鮮明に覚えている。

そして、もう一つの出来事は、春になるとふと思い出す、私が学童で過ごしていた時のことだ。いつも通り放課後学童で過ごしていた。すると、いつも迎えに来る母ではなく父が来たのだ。しかも、いつもよりとても早い時間。私はその時「ドキッ」「ヒヤッ」とした。何かと思うと、父の口から「お母さんが入院した」と急に聞かされたのだ。私はその瞬間、言葉が一つも出せなくなり、パニックになってしまった。「いつも元気な母が……」しかし、その状態でも病院に行かなくてはならなかつた。母に会うのが少し怖かつた。しかし母と対面した瞬間、今まで思っていたことが一瞬にして吹き飛んだ。なぜなら、私が思っているより母はずつと元気だったのだ。その瞬間私は、色々な感情が入り混じつた心がすつきり晴れやかになり、安心に変わったのだ。今思うと、あの体験は私にとって大きな、相手を思う第一歩だつたと思う。今では、母はずつかり元気になり、けんかをしたり、怒られたりすることが多いが、あの日のことを思い出すと懐かしくなる。私はこの出来事で「家族」とは、絶対になくしてはいけない、大切にしなければいけない「唯一無二の存在」ということを改めて感じた。だからこそ、日々「感謝」「思いやり」を持って生活をしていくことが大切だと思つた。皆さんも、「家族」という存在や今

までの自分の生活を見直してみてもいいだろう。私はこれからも、「家族」という存在にありがたさを感じて生活していきたいと思う。



## 「社会問題と私たち」

南中二年 久保 美優菜

「社会問題は現状、どうなっているのだろうか？」

皆さんはそう問われた時、何を思い浮かべますか？私は、よく耳にする地球温暖化について思い浮かべました。

よく耳にする「地球温暖化」というワード。そもそも一体なんなのか？まずはそれについて話していこうと思います。

地球温暖化とは、人間の活動によって沢山の温室効果ガスが大気中に放出され、地球の気温が上昇し続け、生物など自然界のバランスを崩している現象のことです。

次は原因について話していこうと思います。

原因は、人間の生活によつて石炭や石油など、化石燃料を大量に燃した事により、CO<sub>2</sub>（二酸化炭素）などの「温室効果ガス」の排出量が増えた結果、余分な熱が宇宙に放出されずに地球にこもった状態になったことです。

私たちが住まう地球を住めなくしているのは私たち人間のせいと知り、驚ぎと共に罪悪感もありました。まさにことわざで言う、「自業自得」ですね。では、最後に

影響について話しているかと思えます。

温暖化による影響は、温暖化が進行すると地球の気象が変化し、極端な気温の上昇による熱波や強い台風、集中豪雨などの異常気象による災害の頻発や、干ばつによる食糧危機、海面上昇による居住地の喪失などが引き起こされます。すでに、私たちの生活においても、近年の台風や集中豪雨による災害や熱波などによる熱中症のリスクなど身近な問題となっています。

もうすでに人体にも影響を及ぼすようになってきている温暖化。私たちに出来る事はなんなのか？考えていきましよう。

世界や日本の取組は、対策として平成二十七年十二月のCOP二十一で採択された「パリ協定」では、「産業革命以降の世界の気温上昇を $2^{\circ}\text{C}$ より十分低く抑えよう」、「二十一世紀後半に人間による温室効果ガスの実質的排出量をゼロにしよう」という目標が掲げられました。更に、令和三年十一月に開催されたCOP二十六では、「産業革命以降の世界の気温上昇を $1.5^{\circ}\text{C}$ 以下に抑えることを事実上の目標とする決意」が示されました。

さて、こうした物事を世界、国が行っている中、私達は何が出来るのでしょうか？世界が行っている事をするのは勿論無理です。

では、一人一人が少しずつできる事を考えていきましよう。

私は簡単な事から始めていこうと思えます。まずは節電、節水をしようと思えます。生活習慣を見直すと、シャワーの水の出しっぱなし、テレビのつけっぱなし、電気の切り忘れなど、少し意識すれば改善できる物ばかりです。

皆さんも生活を見直してみてください。思い当たるものがあるはず。意識して取り組んでいきましょう。それが私達に出来る事の第一歩です。

温暖化は私達人間の営みから排出される物によって引き起こされている現象です。CO<sub>2</sub>の排出量はエネルギーに大きく由来しているため、無限ではない資源等の消費をできる限り抑制するよう、早急に対応する必要があります。

私達に出来る事、それは環境への負荷を抑え、よりよい環境と未来を残すためには、私達一人一人が「他人事」ではなく「自分の事」としてとらえ、何をしなければならぬのか考え、実際に行動にうつしていくことが大切だと思います。

## 入学式

武蔵野中二年 内 田 莉 緒

桜がひらひらと舞っている晴れた空。春の日だった。その日は小学校の入学式で、晴ればれした気分だったことを、中学生になった今でも鮮明に覚えている。

新一年生となり、初めてランドセルを背負った。今ではそのランドセルは小さく、軽く感じるが、まだ小さかった私の体には、大きく、重く感じた。新一年生になる頃の私は、ランドセルに憧れを抱いていたので、ピンク色のランドセルを買ってもらったことがとても嬉しかったのを覚えている。小学校の頃の思い出は、全てこのランドセルに詰まっている気さえする。

入学式が終わった後、三歳の頃からよく行っていた公園に行った。その公園は春になると桜が満開になる。青く晴れた空の下で桜の花びらが舞っている景色は、入学式を終えた後だったからか、一際美しく見えた。私はその桜の木の下で母に写真を撮ってもらった。その時に母に「大きくなったね」と言ってもらえたのがとても嬉しかった。今はもう母の背を越しているが、まだ母の半分ぐらいの背丈だった私は、もうお姉さんになったと認め

てくれた気がして嬉しかった。

小学校の入学式のことには昔の思い出なのに、この前あったことのように感じる。小学校に入学してから新しい友達ができたり、初めてのことにとくさん挑戦したりしたから、もう七年も前のことなのについこの前のことのように感じるのかもしれない。私にとって小学校の入学式は、中学生になった今でも忘れられない大切な思い出だ。



## 新しい世界

武蔵野中二年 山口 亜子

夏の暑さがどんどん強くなってくる頃。私は家族と三宅島という島に行った。兄や両親は行ったことがあるそうだが、私だけ行ったことがなく、とても楽しみにしていた。

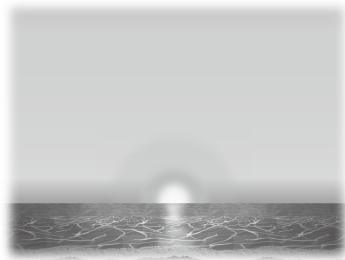
三宅島は伊豆諸島の島の一つだ。少し遠いため、船で一夜を過ごす。私は酔いが酷いのだが、行ったことのない場所へ行くのが楽しみで仕方なかった。そんな中、島に着いた。島の朝四時は、まだ少し肌寒い。ツンとくる潮風の匂いとどこまでも広い海を見ると、まるで違う世界に来たのかと思う。この時は、両親の知り合いの宿に泊まることになった。その宿は少し高い場所にある宿で、そこから見る朝日と海は別格だった。言葉で言い表せないほどに綺麗だった。

次のお昼頃、少し島を見て回った。やはり、普段見かけないようなものばかりだ。そういうものを見るたびに、少し違う世界に来たような気分になった。見たことのない花や、食べたことのない果物。色々な体験をした。

その中でも、特に記憶に残っているものがある。それ

は、ある中学校校跡地だ。そこは一面真っ黒な溶岩で埋まっている。少し不気味だった。どうやらそこは、三宅島の噴火により被害を受けた場所らしい。その日は体育祭の振り替え休日だったため、生徒の被害は少なかったそうだが、二階建ての校舎は全て溶岩に覆われてしまった。周りを見ても、溶岩と枯れ木しかなく、空がやけに綺麗だったのが、より不気味さを増していた。

今回の旅で私は新しい経験をした。全ていいことばかりだった訳ではないが、それもまた一つの経験なのだろうと私は感じた。新しい世界に出会うためには新しい経験が大切だと思った。



「特技はなに?」「好きなことはなに?」少し前までの私なら、特にない。といてその質問を聞き流していたでしょう。でも今は自信を持つて答えることができます。

小学生だった私は、自分に自信がありませんでした。それは、自分の意見や行動で人を悩ませたり、変に思われたりするのを怖がって、自分のことを消極的に見ていたからです。そんな私が自信を持つてきたのは、大好きな二人の友達存在と、小学六年生の頃の担任の先生がくれた手紙がきっかけです。友達の一人は私から見て、とてもエネルギーッシュな子で自分のことをほこりに思っているような子でした。その子がいつも私にかけてくれる言葉は「自分に自信を持つて。」という言葉でした。その言葉は今でも私の心で消えることなく響き続けています。そのおかげで不安なことがあっても胸をはって歩き続けることができています。もう一人の友達私は私が悲しんでいる時に何も言わず、優しくそばで見守っていてくれます。そのおかげで、こんな自分のことを否定せずにいてくれる人がいるんだな。と安心するこ

とができます。そして小学六年生の頃の担任の先生は、とても説得力のある優しい先生でした。先生が卒業の時にくれた手紙には、「もつと気楽に考えすぎずに生きてください。」と書いてありました。短くて、何気ない言葉でしたが、その頃の私にとつては、肩の力が抜けるような、安心できるような温かい言葉でした。

私の得意なことは、興味を持った人に自分から積極的に声をかけることです。私の好きなことは友達とたくさんお話しすることです。私の特技や好きなことはとてもささいなことですが、自信を持つていうことができます。やはりそれは、二人の友達存在と先生の言葉のおかげなんだな、と思います。

人それぞれ、考えや行動がちがっているのは全く変なことではなく、あたり前のことです。ささいなことでも、小さなことでも、みんなに自信を持てるようなきっかけを見つけてほしいです。自信を持つていうことは、簡単そうでもとてもむずかしいことです。だけど自信を持つていうことは、人を助けたり、時には自分を助けたりすることがあります。ぜひ、自分の考えや行動に自信を持ち、胸をはって前向きな気持ちで生きてほしいです。

では、最後に質問です。あなたにとつて、自信を持つていえることとは、どんなことですか。

私はみんなと違う選択をする時はとても悩み、一歩踏み出す時には勇気がいられます。人は自分や普通と違うことをすると否定されてしまうことが多いです。ある時、影で人の悪口を言っているのを聞いたことがあります。その時はその人のことを知らなかったので気にならなかったけれど、知り合いになつて一緒に過ごしてみると人のことをとても大切にしてくれる優しい人でした。自分と違うところはあつても悪口を言うようなことではないなと思えました。

人は色々なカラーを持つていて、その中には優しいや明るい、勉強ができるなどの長所や才能などのカラーがたくさんあります。もちろん、人に嫌がられるような短所のカラーもあり、その短所だけを見て悪口を言う人がいます。「人にされて嫌なことはしない」と耳にしたことがあります。実際に自分の身に起こらないとわからないかもしれないけれど、相手を思いやるというのがその言葉の本当の意味のような気がします。人それぞれが持つているカラーは違います。色々なカラーが交ざり、

それぞれ違うからこそ個性が生まれます。私のカラーは何だろうとても気になります。たくさんさんの長所があるのに短所しか見てもみえず、悲しい思いをしている人やまだ自分のカラーに気付いていない人もいます。人の個性を大事にするにはまずは長所や短所を見つけることです。もしかしたら、短所だと思ふことが長所になるかもしれない。人と付き合つていく上で必要なことは、相手を知つて認めることだと思ひます。

全員が全員同じだつたらつまらないし、外見も中身も全く同じ人なんて世の中にはいません。世界中の全員が同じ外見、同じ中身だつたらどうでしょう。同じような中身の人しかいなくなつたら、違うアイデアや様々な意見が出にくくなります。意見が同じの方が楽だし、争うことがなくなつてよいのかもしれない。しかし、私は色々なアイデアが出る方がいいと思ひます。意見を出し合うことでぶつかることもあります。それによつてわかり合え、更にいいアイデアになることだつてあります。ただ、それには相手を認めることが前提にあり、相手が何を考へてどんな気持ちなのか知ることのできるの意見を言い合えるのはいいことだと思ひます。

同じような外見や力を持つている人しかいないとロボットのようになつてしまいます。ロボットの方が力に



差が出なくていいのかもしれませんが。しかし、ロボット

のような人間だけそろつても良い結果になるとは限りません。例えば、バスケットボールなど背の高い選手が有利な競技だとしても、全員が背の高いだけで勝てるわけではありません。背が低くてもスピードの必要な動きが得意な選手やシュートが得意な選手、パスが上手な選手などそれぞれの得意分野で力を出し合うことで、チームとしてよりよい結果を生み出すのだと思います。

誰もが違う色を持つているから世界が輝き、カラフルになります。個性あふれる世界が私は大好きです。一人一人に輝ける場所が絶対にあります。今も輝いているけれど、その輝きにまだ気付いていない人もいるかもしれませんが。それぞれが違う色を持つているからこそ、その色が合わさり、今よりカラフルでキラキラと輝く世界になつていくんだと思います。

「機械化による人への影響とは」

光陽中二年 佐藤 宏樹

私たちが暮らしている現代では、昔と比べると格段に労力が減つたり、あるいは機械化されて、手がほとんど掛からなくなつたものがあると私は強く実感している。例えば、人間の仕事が人工知能に取つて代わるようになるかもしれないという話は聞いたことがある方も多いのではないだろうか。これが実現すれば、全部とまではないかなが、かなりの数の仕事が失われてしまうという事になる。だが、ドローンやその他の機械を使用した配達や、自動運転等、既に実用化されているものも少なくない。このような機械化は、確かに便利ではある。ただ、本場に「便利」というようなメリットしか無いのか、デメリットは一つも無いのか。これが私の機械化についての疑問点である。私は、機械化によるデメリットを探すことにした。

私は、こんな話をニュースで目にしたことがある。「機械化による幼児期の経験不足が原因で、最近の子どもは不器用になつてしまつている。」これは明らかなデメリットではないか。そう思い、私はニュースの続きを見るこ

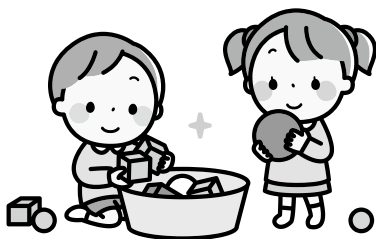
とにした。このニューズによると、幼児期に経験すべき動作を機械が奪ってしまうことで、経験不足となり、結果的に不器用になってしまうということだった。「幼児期に経験すべき動作」には、様々なものがあるが、身近なもので例えると、掃除や洗濯等が挙げられる。掃除では、ほうきとちりとりを使った動作や、ぞうきんを絞る動作、洗濯では、手先を使った繊細な動作が掃除機や洗濯機により出来なくなつた。簡単な説明のため、手先の動作のみの例えであつたが、手先だけに制限せず探してみると、もつとたくさん失われた動作を見つけることができるだろう。ただし、掃除機も洗濯機も現代どころか、数十年前に普及しているため、今回の問題からは省かせていただく。

では、幼児期の経験不足は、どのようにすれば防ぐことが出来るのか。私は、この問題のキーワードを今まで考えてきた。それは、「積み重ね」だ。なぜなら、先述の経験すべき動作も、一回だけでは意味にならないことはお分かりであろう。ただ、これを逆に言うと、どんなに小さな経験すべき動作でも、「積み重ね」をすることで、いつしか大きな経験となる、ということだ。ちょうどこれに合った言葉がある。そう、「塵も積もれば山となる」だ。日常生活において、この言葉を意識して、ちよっ

とした動作をぜひ組み込んでほしいと思う。最初はほんの少しの動作でもよい。例えば、手を洗うときにあえて蛇口のある場所を使用するだけでも、幼児期の子どもにとっては積み重ねにより大きな効果を得られるだろう。それに慣れてきたら、家事の手伝いをさせてあげると、手先の運動になり、さらに効果が高まる。また、無洗米ではなくあえて水でとぐ必要のある米にすることで、手間はかかるが、その分効果も確実に大きくなるだろう。

これらのようにして、幼児の経験不足を減らしていつてほしい。また、先述の方法以外にも、少しの間だけで出来るものは少なくないので、ぜひ実践してほしいと思つた。また、幼児期からのスマートフォンを使用した教育もあまり良くないと言う。幼児期からスマートフォンやパソコン等を使用させてしまうと、先述の経験不足だけでなく、相手の感情を読み取れなくなってしまうおそれがあるので、特に注意しなければならぬ。今回は問題を幼児に絞り込んだが、機械化による問題は、幼児だけでなく、もちろん大人にも大きく関係していると言える。これからの社会では、どのようにして機械と向き合い、上手に活用することが出来るかが、より豊かな暮らしへと繋がる、一つのカギとなるのではないのだろうか。これからの日本の未来は、機械や人工知能が常に密

接な関係にあると考えられる。さらに豊かな暮らしを実現するために、どう機械と向き合えば良いのだろうか。



## 心のつながり

大相模中二年 森 田 涼 子

みなさんは「障がい者」と聞いてどんな印象を持ちますか。障がいを抱えているわけですから、障がいを持つていない人とは違う部分があり、援助を必要としたり、特別な工夫が必要だったりすることは確かです。そこで、私たちはイメージの部分で、偏見や差別がないように取り組む必要があります。障がいといっても人それぞれなのです。

実際、私も有痛性外脛骨障がいという障がいをもっています。それは、自発性の痛みを伴う疾患のことです。私の場合、日常生活に支障がでることはあまりありません。しかし、小学四年生の体育の授業中に足を捻って耐えられないほどの痛みを感じたことがあります。そのとき、自分の障がいのことを言うと「何それ」「いつもは平気なんだ」と反応されました。普段はみんなと同じように生活しているのに、意外に思われたのでしょうか。決して悪く言っていないと思ったので、必死に説明しました。そして、お互いに理解し合えたのでとても安心しました。

他にも、精神障がいがあるからといって、まったくコミュニケーションができないというわけではなく、話してみると、普通の人と変わりがない場合もあります。身体障がい者に関しても、普通の人に得意不得意があるように、できることとできないことがあるだけです。

障がいを知っているか知らないかはとても大きいです。障がい者とはいっても、実際に触れ合つて、知つて、理解し、心を通わせていくことが大切なのだと思います。障がいをもっていれば、援助が必要であるのは確かです。障がいのためにできないことがあつたり、周りに影響されたりすることもあります。しかし、この障がいにはこうしておけば問題ない、という考えはやめましょう。あくまでも、その人にとって必要な援助をするという考え方であるべきです。もつとも大切なのは、それぞれが理解し合うための、心のつながりではないでしょうか。

私が小学六年生の時に一年生の中に生まれつき手足が不自由な子が入学してきました。その子のお母さんは学校に手紙を書いていました。手紙の中身は、障がいの内容と、優しくして欲しい、困っている時は、助けて欲しいと言う物でした。その時はあまりよく分かりませんでした。手紙の事は強く心に残っていました。実際掃除の時間に、その子が水道を使えず困っている様子を見かけて、蛇口を捻つてあげた事がありました。その子は嬉しそうに「ありがとう」と言ってくれましたが、私は、実際に手のない状態を見て本当は驚いてしまいました。

また、私は小学一年生の時に交通事故にあい左足を骨折してしまい、暫くの間車椅子で過ごした事があります。車椅子生活はとても大変な事だけでした。登下校など移動は常に誰かに押してもらっていました。僅かな段差も一人では登れないため、スロープのない場所には行けません。学校では一人では教室に行けないため、先生や上級生に連れて行ってもらっていました。さらに、家の中と外で車椅子が二台必要でした。お風呂やトイレ

に行くために家具をどかしたり、二階に上がれないため、治るまでリビングで寝ました。当時は学童に通っていましたが、車椅子には対応していかないと言われたため、母は治るまで仕事を休む事に、なつてしまいました。車椅子の後は、松葉杖も使いましたが、同じように不便な事が多く、とても大変だった事を覚えています。色々な人に助けてもらわないと普通に生活が出来なかつたので申し訳なく思い、同時に周りの人に「ありがとう」と感謝する毎日でした。

私は怪我だったので治りましたが、世の中には生まれつきや、突如の事故などで治す事の出来ない障がいや、病気があつて不自由な生活をしている人もいます。また、一目見ただけでは分からない障がいや病気を持つている人もいます。私の祖母は去年の八月に心臓にペースメーカーを入れる手術をしました。病院に何回も行かなければいけないし、日常生活で気をつけなければいけない事も多く、常に障がい者手帳を持ち歩くようになりました。不自由な生活をしている人や、見ただけでは分からない障がい・病気の人達には辛い時、困った時には遠慮せず頼ってほしいです。私は、自分がしてもらつたように助けます。皆が「やっあってあげている」「や、「めんどくさい」など感じず助け合える世の中が理想だと思います。

しかし、現状は障がいや病気への理解や関心がまだまだ足りないと感じました。バリアフリーなどの環境整備も一部しか整つておらず、安心して暮らせる環境とは言えないと思います。私も車椅子での生活の中で、母と車で出かけた時に障がい者専用の駐車スペースに車を停めている一般の人がいて、遠くに停めるしかなく、困つた事があります。理解や関心、整備が足りない中でも私が出来る事があれば手助けをしたいと思います。まずは困つている人を街中で見かけたら積極的に声をかけたり、手助けをしたり、小さな事でも、協力出来るようになりたいです。そして障がいに関わらず誰でも平等に暮らせる社会になれば良いと感じています。

## 福祉の今とこれから

光陽中二年 秋 本 結 音

私たちが住んでいる越谷では、たくさんの方の福祉活動が行われています。例えば、階段の横にスロープがついていて、階段を使えない人でも登ることができるようになり、エレベーターのボタンの位置を低くして、車椅子の人でもボタンを押せるようにしたりなど、たくさんあります。しかし、そのような活動を、このまちで過ごす人々の行動で、台なしになつてしまつていると感じることがあります。私がそう感じたのは、二つの出来事がきっかけです。

一つ目は、点字ブロックやスロープに、自転車をとめている人を見かけたことです。公園などに自転車がつまつているのはよく見かけますが、点字ブロックやスロープにとめているのを見かけたのは初めてで、とても驚きました。点字ブロックやスロープは、目が不自由な人、足が不自由な人にとって、とても大切なものだと思います。それなのに自転車などで防がれてしまつたら、困つてしまいます。実際に、車椅子に座っている人がスロープを登ろうとしていたけれど、自転車で防がれてい

て困っている人を見かけたことがあります。他にも困っている人はたくさんいると思います。一人の、「これくらい」という行動で迷惑に思う人がたくさんいます。せっかく越谷市が住みやすいようなまちを作っているのに、それを台なしにされてしまうのは、とても残念に思いました。

二つ目は、保育園や老人ホームなどの福祉施設で起こつたニュースを見たことです。越谷市ではないですが、ほかの県の保育園で、保育士が園児をいじめるといふ情報を最近見かけました。学校で生徒同士のいじめが起きてニュースになつていふことは見かけますが、大人が小さな子どもをいじめるとは、あまり聞いたことがなかつたので、とても怖く思いました。保育園は、仕事があつて子どもを見ることができない親が、安心して子どもをあずけられるところです。それなのに保育士があつた子どもをいじめるのは、許されないことです。この事件で安心して保育園に子どもをあずけられる親は減つてしまつたと思います。老人ホームにもそのような事件があり、安心してあずけられる、人を助ける場所なのに、人を傷つけてしまつていふ現状に、私ほとても幻滅しました。越谷でも福祉施設内でトラブルが起こつてしまつていふので、誰でも安心して使うことがで

きる施設になってほしいと思います。

今まで、私は福祉については学んだことがありませんでしたが、その問題点については関わったことがありますでした。しかし、今回福祉活動の現状と向き合ってみて、不自由無く過ごせている人々の行動で、不自由な人々を困らせてしまっていて、そのようなことを無くすためには、私たち一人一人の行動を見直さなければいけないと思います。これから、さらに福祉活動が広がっていったら、住みやすいと感じる人がどんどん増えていきます。そのような活動を邪魔せず、サポートできるようにするため、自分の一つ一つの行動を考えて、誰も傷つけないようにこのまちで過ごして、誰もが「住みやすい」と思える越谷市をつくっていききたいです。

## 十年後の未来の私へ

大相模中二年 小山 維月

はじめまして。十三歳の小山維月です。お元気ですか。今、何をしていますか。十年後ということは、二十三歳、四年制の大学に入っていたら、社会人二年目ですね。中学二年生で、勉強や部活に必死な今の私からは、想像できないほど、社会も、私自身も変化しているのだと思います。生きている中で、もし、辛いことがあったなら、この手紙を読んで、過去を思い出して、少し前向きになってほしいです。

私は今、越谷市使節団としての留学を目前に控えています。正直、私の英語力でどこまで会話できるのか不安で一杯です。オーストラリアは、アメリカなどの英語の発音と違うし、何度も「何て言いました？」と聞き返してしまうのではないかと、という思いもあります。部活も、後輩が八人入ってきてくれて、新しい劇がスタートしました。はじめっ子の主犯格と、人の背中を押す性格、全然違うのに、どちらも同じ人なので、難しいです。声が出なかつたり、どんな気持ちで台詞を言えればいいのかわからなかつたり、悩みどころが沢山あります。勉強面で

も、あと少してテストです。社会が苦手なので、ワークを何周もしています。十年後の私も、社会が苦手なんでしょうか。

こんなふうには、私には今、頑張るべきことが山とあって、全部に全力で向き合いたいと思っています。大変そうに見えるかもしれないけれど、周りにいる家族や友達が支えてくれます。応援してくれています。そのお陰で、私は全ての事を楽しんで行うことができているのです。以前、テレビで

「自立したいなら人に頼れ。」

と言っているのを耳にしました。一人で頑張らなくてはならない、自分で全部終わらせなければならぬ、と十年後の私が思っているなら、様々な人を頼るべきです。自分で頑張る方法を教えてもらうべきです。十年後がどんな社会でも、きっと大丈夫です。自分を信じて、前に進んでください。

頑張れ！

二〇二四年 小山維月より

夢を与えてくれた人

栄進中二年 橋 高 実 胡

将来、どんな大人になりたいか、どんな生き方をしていきたいか。考える度に、私の心には中学一年生の頃の担任の先生の笑顔が浮かぶ。私は先生から、感謝してもしきれないほど多くのものを与えてもらった。

先生はいつも私達生徒の思いを大切に受けとめて、一人一人の良さや輝きに気付くことができる人だった。まちがっていることはまちがっているとまっすぐ伝え、正しい方向へ導いてくれた。私達が一年間笑って過ごすことができたのは、先生のおかげだと私は思う。

そんな一年間の中で心に残っていることがある。ある日先生に

「新入生に向けての歓迎の言葉を言ってもらいたい。」と頼まれた。私はずっと思っていたのは不安だ。全校生徒の前で発表をした経験なんて一度もなかったから。想像するだけで怖くて足がすくみそうになった。すると先生は、「大丈夫。上手なことを言えなくてもいいの。橋高が思っていることを言っただけ。そしたらきつと伝わるよ。」と、私の背中を押してくれた。その言葉で私も、不安だ



けどやってみよう、そんな風に思えるようになった。その後、先生は私の練習につきあい、直前も私のそばに来て

「頑張つて。橘高ならできる。」

と応援の言葉をかけてくれた。私は先生の言葉から、自信と勇気をもたらえた。そして本番、みんなの前で堂々と発表できたのだ。勇気を出して本当によかった、そう思った。

私は先生のおかげで昔よりも少し、自分を好きになれた。私が先生から与えてもらったのは、勉強の知識だけではない。自分に自信を持つこと、勇気を出す大切さ、思いやりの気持ち、自分では気付けなかった可能性。数え切れないほどたくさん、先生は私に教えてくれたのだ。先生の一年間の教えは一生分の宝物。忘れないよう大切に心にしまっておきたい。

先生は誰かが辛い思いをしていた時、迷っていた時、いつでもその人の背中を押して、前を向ける言葉をかけてくれた。私はそんな先生に、心からあこがれる。先生は私にとつての光だ。私はまだ、はつきりとした将来の夢は決まっていない。ただ、先生のように誰かの心を優しく明るく照らしてあげられるような、そんな人になりたいと思う。私を成長させてくれた先生、ありがとう。



光陽中二年 坂 梨 葵

音楽は唯一の共通言語です。そんな音楽の力に私は強く心をひかれました。

今は動画サイトやSNSで簡単に音楽が聴ける時代です。ポップス曲やクラシック曲などジャンル問わず様々な曲を聴くことができます。コロナ禍でアニメやゲームが流行り、アニメソングなども多く世に出ました。私はピアノを八年ほどやっていて、よく音楽を聴きます。ある日、動画サイトで音楽を聴いていたらあることに気づきました。それは、曲のコメント欄に外国語がたくさん書いてあったことです。日本ではない、どこかの国の人々が曲を聴いてコメントしたと思います。翻訳すると、「きれいで美しい音色」「日本の曲が大好きです」「このことについて、私はくだと思います」というような、感想や意見が書いてありました。そのとき、私は、国や言葉が違っても音楽でつながることができると思います。このことは、私にとって大きな驚きと感動を与える出来事でした。この出来事があったから、音楽の聴き方が変わりました。今まで「好きだから」という理由だけで聴いて

いたのが、「この曲は何を表現しているのかな」と、音楽について深く考えられるようになりました。外国の曲は歌詞が日本語ではないので、どのような意味かわかりませんが、曲調から曲の雰囲気、気持ち、意味、聴いている人に伝えたいことが分かります。それは、作曲者が伝えたいことを曲にし、聴いた人がインターネットなどを通して感想や意見を言っていると思います。国や言語、また、障がいの有無やその人の得意不得意関係なく。音楽は、一人一人の気持ちを伝える一つの架け橋だと思います。次第に私は、「自分も音楽で気持ちを伝えて、感動を与えたい。」と思うようになり、中学校に入り吹奏楽部に入部しました。

入部してから一年。様々な先輩や後輩とも関わり、コンクールや定期演奏会に出ました。コンクールでは賞をつけるために、大人の人や他校の人に聴いてもらい、定期演奏会ではお客さんに聴いてもらい拍手をしてくれる、聴いてもらったり、拍手をしてもらえるのはとても温かい気持ちになります。部活の時間の中で、私は一つの考えができました。音楽は会話だと言うことです。今まで、インターネットなどのSNSを通して、思いを伝えられる側でしたが、吹奏楽部に入部して、思いを伝える側になりました。この曲はこのような思いをのせ、こん

な風に工夫したいと、部員で考えていきました。コメント欄が、曲調だけで思いの伝わった感想や意見であふれていたように、歌詞がなくても伝わる音楽は、自分と相

手がかわず会話と違います。

音楽の授業で鑑賞がよくありますが、そのときに考えてほしいです。作曲者はどのような思いでこのようなメロディーにしたのか、聴いてくれる人に何を伝えたいのか。考えた人全員が同じ答えになるのではないと思います。ですが、だれでも、どんなことを伝えているか考えた内容が他の人と違って、音楽と会話はできません。自分はどうのように感じたのか、自由に意見交換をしてみてください。だれでも関係なく伝え合えるのが音楽のみ力だと思います。また、私は来年で三年生になります。部活の間と、工夫して聴いている人に私たちの思いを伝えられるような演奏をしたいです。

## 楽器から学ぶこと

優秀作品

東中三年 有村まこ

私は吹奏楽部に所属している。その中で、私は最近、「非合理的」の良さを感じている。そして、現代社会、合理化が進んでいるが、非合理的な事も行っていくべきだと思った。

「合理的」とは、むだがなく効率的に物事を処理していることだ。少子高齢化が進み、労働者が不足しているこの世の中で、この合理化が進むということはおかしくない。むしろ妥当な判断だともいえる。しかし、そんな中でも、人が人らしく間違え、試行錯誤し、新しく考えていく過程はやはり大事だ。

この考えを私にもたせてくれたのは、部活に二〜三週間に一度教えに来てくれる講師の先生だ。口調や圧が強いときがあるが、言っていることは全て正しくて、説得力がある。あと、とてつもなくうまいトランペット奏者なのだ。学生時代からずっと吹き続けているらしく、磨かれた、よくなっている音だ。そんな人が「楽器を吹くことは、非合理的だ。」

と言った。たしかにと思った。音なんか、キーボードや

ハモデで出すことができる。指一本で、すぐに。これこそ、合理的だ。余計な手間がない。しかし、楽しさがない。必死になつて練習したり、仲間と指摘し合つたりして何か一つのを作りあげるよろこびや達成感がない。これこそ非合理的のいちばんの良さだ。非合理的なことをバカみたいにみんなでやるからうまれる楽しさがある。講師の先生も、きつとそう思っているだろう。

楽器を吹くということは、指一本なんかではできないわけがない。コンディションを整え、様々なことへ意識を向け、ていねいに、楽器に息を入れ十分にならず。すべて欠けずにやりきつたときに初めて、きいている人に喜んでもらえる。笑顔を届けられる。機械では届けられない、自分たちの気持ちまでいっしょにのせて贈ることができる。「非合理的」なものにはそんなパワーが秘められていると私は思う。

合理化が進むこの日本の社会で、改めて「非合理的」のよさを探して、感じてみてほしい。一人で探するのは難しいかもしれない。仲間や、共に頑張ろうと協力し助け合う人たちといっしょに、自分たちの苦勞からうまれる何かを感じるのが良いのかもしれない。

まだまだ人生は先が長い。これから、かぞえきれないほど多くの苦勞がまつているだろう。自分に合わないこ

ともたくさんあると思う。そんなとき、私はこの中学校三年間の部活動での学びを思い出そうと思う。そして、いかそうと思う。心を成長させてくれたからだ。浅はかな考えにならず、必死に頑張り抜いて、よりよいものを得るべきだ。時には効率のよいことばかり追い求めたり、めんどうがつてサボつたりもあるはずだ。しかし、そんな時こそ「頑張ろう」と思いたい。ばかみたくに何かに打ちこみ、仲間と励まし合つていく人生にしたい。「合理的」にとらわれず、様々な視点を持ち、自分や周りの人たちを磨くような人が増えたらいいと思う。そして、これからの生きる人たちのために、そんな社会をつくりていきたい。



四年前、誕生日に送られてきたお手紙からスタートした叔母との文通。なかなか会えないわけでも、スマホで連絡ができないわけでもないけれど、便箋二十枚程に達する分厚い手紙で、今でも近況を伝え合っている。

「今日こそは最後まで丁寧な字で書こう。」

私はいつもこんな気持ちで書き始める。だが、気が付いたら字が雑になっている。頭に浮かんだこと、しつくりきた表現をすぐに書かなければ、消えてしまうような気がして、急いで書くからだ。だけど、叔母は、そんな字を好きだと言ってくれる。私は好きではないけれど、急いで書いた字も、気持ち伝わっていて、いいのかもしれないと思った。

文通を始めてから、自分の気持ちとぴったり合う表現を探すことが楽しくなった。学校で先生から褒められたときの胸がぎゅーつとなるようなあの嬉しさ。小説を読んで、海に落とされたかのようなあの衝撃。「嬉しい」「衝撃的」という言葉だけで表現するのもつたいたなくて、何かいい言葉はないかと考えているうちに、楽しくなっ

たのだ。そして、私が肌で感じたことが、手に取るように伝わってほしいと思つた。だから叔母から、「さわちゃんのお手紙はいつもステキな表現やありきたりではない比喻があつて、本当に面白いね。」と書いてくれたときは、心の底から嬉しかった。でも、それを超えるくらい嬉しかったことは、「さわちゃんのおかげで文通の楽しさを知つたよ。さわちゃんのお手紙を読む時間がとつても幸せ！」と書いてくれたこと。私の手紙をこんなにも楽しみにしてくれているなんて知らなかった。私も、嬉しかった出来事、心の中のモヤモヤ、書いた全てのことを、広い心で受け止めてくれる叔母からの手紙が大好きだ。ポストに手紙が入つていたとき、その手紙を読むときが、とつても幸せ。それだけで、心がじんわりと温かくなる。

先日、家族でレストランに行つたとき、ロボットが料理を運んできてくれた。機械が普及している。何においても効率の良さが求められている。そんな今だからこそ、自分の気持ちをじっくり考えて書くことを大切にしたいと思う。これからも、手紙を書く時間、読む時間は、私の中からなくなつてほしくない。変換されない私の字で、考え抜いた言葉で伝えたい。字は雑になるけれど、返事は遅いけれど、手間はかかるけれど。それが、私を満た

しているから。



## ゴールド金賞に向けて

栄進中三年 小賀野 琴美

「栄進中学校、金賞ゴールド」  
目を見開いた。仲間の歓声がホールに響いた。今日の前で言われた言葉を受け入れることに、少々時間がかかってしまった。それでも一つ、私の胸に弾けるように浮かんできたのは、「やっ」という、達成感と喜びだった。

私の所属している吹奏楽部は、主に夏のコンクールに向けて練習している。コンクールの審査はとても厳しく、全員の音の重なり、吹き方、表現の仕方など、数多くのポイントを聴かれた上で、金、銀、銅賞がつけられる。去年、私達が努力の未受賞したのは、銅賞だった。引退が決まった瞬間。先輩達の目に浮かぶ涙を見て、どうしようもない不甲斐なさや悔しさを感じたことを覚えている。A部門という、三十人以上での演奏でなければ出られない、言わば強豪校の集まり。他の部門と違い、課題曲という難題もついてくる。前の年まで他の部門で出場していた私達には、初めての挑戦だった。だからといって、「初めてだったから」が、結果の言い訳になるとは思っ

ていない。行き場のない感情を、持て余すばかりでいた。

そんな私に、転機が訪れた。新部長への推選と、アンサンブルコンテストの大会メンバーとしての選出。正直に言ってしまうと、不安でいっぱいだった。「部長」という肩書きについて回るプレッシャーと責任、部活以外で多忙になりつつある中でコンクール出場。今の自分に、最高の演奏は出来るだろうか。それでも、夏のコンクールでの無念を晴らす絶好の機会だ。コンクールでの悔しさは、コンクールでしか晴らせない。そう覚悟を決め、練習に取り組むことにした。アンサンブルコンテストは、夏のコンクールと違い、十人ほどの少人数で演奏する。より一人一人の音が明確に聴こえるからこそ、個人の技術が重要となる。私達大会メンバーは、それぞれで課題を話し合い、部活動の活動時間を延長し、コンクールに向け、必死になつて練習した。

そして迎えたコンクール当日。指揮者なしの自分達だけの舞台。フルートの合図で、曲が始まった。今までの成果を全て詰め込んだ。引退した先輩達に届くように。自分達が、再び悔し涙を流すことがないように。

「閉会式を行います。」

遂に来た。舞台袖で震える手を押さえる。演奏は無事終了した。多少のミスこそあれど、全力が出せたと思う。

チームの代表として、審査結果の賞状を貰うため、私は舞台袖に待機している。司会の合図で各チーム代表がステージへ並ぶ。一チームずつ賞が与えられていく様子を見て、再び手が震えてきた。いつの間にか私の番だ。審査員の前に立ち、結果を待つ。審査員が口を開いた。

「栄進中学校、金賞ゴールド」

何を言われたか一瞬理解出来なかったが、メンバーの歓声で現実に戻る。金賞。ずつととりたかったもの。今までの努力が報われた気がした。

客席へ戻ると、メンバーは泣いていた。見に来てくれていた先輩達も喜んでくれて、頑張つて良かったと心の底から思うことが出来た。

今回の金賞は、決してメンバー達だけのものではない。指導をして下さった先生方、私達を信じて、放課後の練習をさせてくれた保護者、応援してくれた友達や後輩。色々な人の思いが乗った、皆の金賞だと思う。何かを成功させるには、自分一人だけの力ではなく、多くの人の支えが大切だと改めて感じた。次は夏のコンクールだ。今度こそ自分達の最後の舞台となる。今回の経験で学んだことを活かして、部長として、部を引っ張っていけるようにしていきたい。最後の一音まで、最高の演奏が出るように。

便利な世界で生きていくために

北中三年 高橋 真結子

「修学旅行にスマホは必要か。」

修学旅行の持ち物協議のときにスマホを持って行きたいという意見が多数出て、私たちは修学旅行実行委員としてこの件について話し合いを重ねた。

スマホを持って行きたい人はどうしてスマホが必要なのか。「知らない場所が道が分からなくなりそうで心配だから」、「交通系ICカードの代わりとして使いたい」、「思い出として写真を撮りたい」などの意見が出た。それに対して私たちは、「紙の地図を用意する」、「ガイドさんがいるため道に迷う心配はない」、「切符で代用する」、「班に一つデジタルカメラを配布している」という理由から使わなくてもいいという判断をした。私は、持っていきたい気持ちはあったもののスマホを持って行く必要はないと思っていたので、スマホを持って行きたいという意見がたくさん出て驚いた。一方、実行委員や友達の中に、私と同じ意見の人もいて安心した。実際に修学旅行にはスマホは持っていけなかったが、その分周りの景色をたくさん見ることができた上に、自分たちでよく

考えて行動することができ、とても楽しい修学旅行だった。

この話し合いを機に自分のスマホの使い方について振り返ってみた。私のスマホは親に管理されていて使用時間が決まっていて、使える時間が友達よりも短い。SNSも制限されていて自由にゲームもできない。アプリも勝手に入れることもできない。しかし、必要があれば親と相談して変更や追加をしてもらえる約束をしている。結構不満を言ってしまうことはあるが、本心はそこまで不満ではない。使わなくても自分で代わりの方法を見つけれられるし、そもそも私はあまり必要性を感じていない。なぜみんなはこんなに必要としているのだろう。スマホを見ることで誰かと繋がっていたいという自分の心配な気持ちを満たしているのかもしれない。ゲームをしたり動画を見たりしたときに、面白いからもう一度繰り返すうちに自分に負けてしまい使い続けているのだと思う。

確かにスマホは便利だ。修学旅行の時にみんなが必要としていたようにマップがあり自分の現在地を照らし合わせながら行きたいところまで行くことができる。現金やカードを持っていなくてもスマホで代金を払うことができる。しかし、今回色々な方法を考え、スマホを使う以外にもやり方がたくさんあることに気づいた。そして



私に「しか」できないこと

光陽中三年 勝 占 幸 花

その方法も悪くないと思った。私は家族で旅行に行ったときにその場でスマホを出して気になることを調べていたが、修学旅行には事前に詳しく調べてから行ったので実際に行く喜びも味わうことができた。こんなに楽しいなら、次に旅行に行くときはもつと調べて行こうと思っただくらいだ。また、友達と地図を見ながら考えて移動したり、ガイドさんに現地のことをたくさん教わったりしたことで、いつもより周りの人とコミュニケーションを図ることができた。スマホを持っていたらずつとスマホを見ていたに違いない。修学旅行にスマホがなくてよかったのだ。

これからはもつとスマホや電子機器が発展していき便利な世の中になると思う。しかし、使い方を判断するのは自分自身だ。親に管理されなくなっても自分でしっかり責任をもち、スマホを使うかどうかも含め使い方を判断しなければならぬ。自分の生活がより豊かになるように、自分の判断に自信を持って必要を見極められる大人になりたい。

新年を祝う行事、正月。今年の正月に大きな地震が発生した。能登半島地震である。私はちょうどその頃、父と母とゲームをしていた。「なんか……揺れてる？」母が言った。父がテレビのチャンネルを変え、ニュースを見てみると、ニュースキャスターが必死に避難を呼びかけていた。父はニュースを見ながら石川県近辺にいる会社の仲間に連絡をし、母はそんな父と話しながら夕飯の準備を始めた。私は少し不安になったけれど、どこかで大丈夫だろうという楽観的な考えをもっていて、そんなに深く考えていなかった。

次の日。テレビでは昨日の能登半島地震の話題でもちぎりだった。冬休みが終わり、学校が始まって朝のニュースでは被災地の状況が報道されていた。日に日に地震の被害が明らかになっていき、それは私の想像よりも遙かにひどいものだった。次第にニュースでは、被災地の受験生のために学習塾を無料で利用できるようなするなど、ボランティア活動に協力する企業の話や、有名人が被災地にエールを送る話が、報道されるようになって

た。

報道されたニュースの中で、私はあるニュースに感銘を受けた。学生ボランティアについてのニュースである。そのニュースでは、学生が行っているボランティア活動について報道されていた。若者によるボランティア活動は被災者の方に元気を与えていた。被災地の年配の方は「若者と話す元気がある」とか「元気な子どもたちの姿を見ると私達も笑顔になれる」というような話をしていた。私達学生「でも」できる、じゃなくて私達に「しか」できないことがある。私にはなかった考えだった。

学生が行う活動よりも、企業や有名人が行う活動の方が大きな力をもっていて、たくさんの人を助けられる。もちろん、私が寄付したり、募金したりしたものは困っている人の助けになると思う。でもそれは私「でも」できることで私「しか」できないことではない。中学生の私は、大企業の人達のように数百万や数千万のお金を寄付することはできないし、有名人の方のようにたくさんの人にエールを送れるほどの発言力があるわけでもない。けれど「中学生」の私だからこそ貢献できることがあると気付いた。例えば、ニュースでいっていたように私がつ「元気」で被災者の人達を笑顔にすることができ。地域の行事に参加したらお年寄りの方と小学生や

幼稚園生との会話を繋ぐ架け橋になることができると思う。これはきっと中学生の私にしかできないことだ。

私は、自分のもつ力でたくさんの方の助けになるために意識すべきポイントが三つあると思う。一つ目は、自分の強みを探すこと。私ができることや、自分しかもっていない強みを見つけて、それをどう使っていくか、しっかり考えることが大切だと思う。二つ目はどうすれば自分の強みが最大限生かせるか考えること。今自分が置かれている現状で自分の強みを生かせる場所や方法は何か考えることが必要だと思う。そして三つ目は行動すること。これは誰かの指示を待つのではなくて自ら行動することだ。なぜなら、自分の強みを一番知っているのは自分だと私は考えているからだ。自分で適材適所を見つけて行動していく。これをたくさんの方が行ったら自分の強みを生かし、自分に「しか」できないことでたくさんの人を助けられると思う。

だから私は、自分に「しか」できないことをする。私ができることは、能登半島地震で気付いたこの考えを、たくさんの方に広めていくことだ。自分に「しか」できないことを探して、考えて、行動してくれる人が一人でも多くなるように。これが私に「しか」できない、よりよい社会に向けても最初の一步だ。

## 私の将来の夢

平方中三年 佐藤 樹 菜

皆さんは、将来の夢はもう決まっているのだろうか。私の友達のはほとんどは、将来の夢がもう決まっている。教師やイルカのインストラクター、薬剤師などの素敵な夢。

まだ、私は、将来の夢が決まっていない。だが、興味のある職業がいくつかある。

一つ目は、ヘアアンドメイクアップアーティストである。私の母がこの仕事に就いている。そのため、小さな頃から母が仕事をしている姿を見てきた。始めは暗い顔をしていた人も母がヘアメイクを施すと本当に同じ人か疑うほど明るい顔になる。初めて母が人にヘアメイクを施しているのを見たとき、

「シンデレラの魔法使い、フェアリーゴッドマザーみたい。」

と思った。母のヘアメイクは見た目だけでなく、心まで明るくきれいに变えてしまうものだから、私はこの仕事に興味をもち、憧れた。

二つ目は、ウエディングプランナーである。母や父の

仕事関係や交友関係が広がったため、小さな頃から結婚式に参列させていただくことが多かった。色々なかたちの結婚式があり、全てがとても素敵で美しかった。小さな頃、結婚式に参列させていたくれたびに、

「新郎は王子様で新婦はお姫様みたい。私もあんな風になりたい。」

と思った。けれど、小学生になると、素敵な結婚式をするためには、新郎新婦やその御家族と計画するウエディングプランナーという仕事があることを知った。母が結婚式場で仕事をしていることもあり、私はよく話を聞いていた。結婚式は、多くの人が人生に一度だけしか行わない大事なイベントだ。今までお世話になった家族や友人に感謝をし、みんなで幸せを祝う失敗の許されないイベント。とても緊張するだろうが、達成感は何倍ものにならないと思う。だから、私は、ウエディングプランナーという仕事に興味をもち、憧れた。

三つ目は、パーソナルトレーナーやアスレチックトレーナーなどの運動系の仕事である。私の父がこの職業に就いている。父は私が小学三年生ぐらいのときに勉強をして、パーソナルトレーナーの資格をとった。大人になつてから仕事をしながら勉強をして、資格をとるのは私には想像ができないほど大変だっただろうし、父のこ

とをとでも尊敬している。私は父の仕事場へ行き、お客さんに挨拶をすることが多かったので、近くで父が仕事をしている姿を見てきた。ストレスや病気などで体重が増加してしまった方など、人に合わせてトレーニングメニューを作り、食生活の相談にのつたりしている。そのおかげで皆、除々に成果をだし、どんどん明るい顔になる。本当に同じ人か疑うほど、心も体もきれいになる。父は母と同じで私にとって、魔法使いである。だから、私は、この仕事に興味をもち、憧れた。

社会には、色々な仕事がある。私はまだ知らない職業もたくさんあるだろう。自分が楽しく働ける職業を見つけ、その職に就くために志望校に受かるよう受験勉強を頑張る。自分の未来の幅が広がるように。



あなたの勇気がみんなを繋ぐ

東中三年 賤 機 瑠 花

「普通」って何ですか。「異常」って何ですか。皆さんはこう聞かれたら何と答えますか。まずは「普通」について思い浮かべてください。それは本当に普通ですか。では質問を変えます。その中に「異常」があつたらどうしますか。

世の中には普通のことをしただけで責められてしまう人がいます。確かに人を傷つける行為はしてはいけません。特に殺めるなんて言うまでもないが立派な犯罪です。他にも同性婚や同性カップルなど憲法には定められていないものの完全に認められていないためこの国では賛否両論あるようです。

ではそもそも「普通」と「異常」って何でしょうか。簡単にまとめようと思います。まず普通について調べたところ「いつ、どこにでもあるような、ありふれたものであること。」とでてきます。さらに調べると「他と特に異なる性質を持っていないさま。」とでます。要するに普通というのは特別感のない一般的な人物や物ということになります。

次に「異常」についてです。異常とは「普通またはいつもと違って、どこかくるっていること。」さらに調べると「不快や奇妙」だと思ったときに使われる言葉だそうです。要するに特別感のある変わった人物や物ということになります。

言葉の意味がわかった上でもう一度考えてみます。あなたの思う普通は本当に普通ですか。少しでも不安になつたり考え直したならあなたが普通なのか疑つた証拠です。反対に少しも不安にならずこれだと決めたならそれが自分の普通だと胸を張って言える証拠です。では今のあなたの判断は普通ですか。どうでしょう。普通ですかという言葉に終わりが無いことにお気づきですか。そうです。普通ということへの追究は無限に続きます。幼い子が親に「なんで」「どうして」と終わらぬ質問を投げかけるのと同じようなのです。だから、世の中の人は自然と自分の「普通」を見出し無限の追及にけじめをつけるのです。でもそれはあくまで自分自身が勝手に創り上げた理想像であり全員が共感するはずがないのです。その共感できなかつた人々のことを「異常」と決めつけているのが私達、僕達の現状であり否定された側を傷つける元凶、つまり、「普通」でないことは「悪い事」だと考える世の中にしてしまったのは自分達とい

うことです。

今、「差別」ということについて多くの活動やそれに関わる報道があるのは、異常だと言われ続けた人々が団結し世の中を変えようと必死になつているからです。勿論、簡単なことではありません。何ヵ月、何十年とかかる内容もあると思います。でも実際、変わり始めているのも紛れもない事実です。怖くて周りに合わせていた人が自分も周りも変えようとまつたくの他人と協力しているのですから。受け入れるのは難しい、すぐに変われなくてできません。しかし、その心が変わろうとする彼らの思いが少しでも届いたなら新しい一步を踏み出してほしいと思います。この世の中を創り出した中の一人あなたの勇気がもう一度人と人とを繋いでくれるはずです。「多様性」への一步踏み出してみませんか。

## 日本の伝統文化の魅力に気づけるか

光陽中三年 大野彩華

相撲、茶道、箏曲。これらは、日本の伝統的な文化である。私は日本人でありながら、日本の伝統文化に大きな関心をもつことなく過ごしてきた。しかし、妹がたまにテレビで大相撲を見ていたこと、中学校の茶道・箏曲部に興味をもったことがきっかけで、私は日本の伝統文化の魅力に気づくことができた。

私は相撲が大好きだ。初めは、力士と力士がぶつかり合うのが少し怖かったのだが、何度も見ているうちに、すっかり相撲の虜になった。相撲は日本で古くから行われている神事だそう。横綱の土俵入りは迫力があつて特に魅力的だし、取り組みの前後に両力士がお互いに礼をするのはとてもすてきだと思う。今も家族で楽しく相撲を観戦している。先日、相撲が外国の人々から注目を集めているというニュースを見た。日本の相撲に興味をもってくれていることを嬉しく思いつつ、日本人に相撲をもっと知ってほしいと感じた。

私は茶道・箏曲部に所属している。お箏の美しい音色に惹かれて、茶道も楽しそうだなと思ったからだ。箏曲

にはオーケストラのような指揮者がいない。そのため、お互いの音をよく聞き合い、気持ちを合わせる大切になる。だからこそ、音がきれいに合ったときはとても嬉しい。

茶道には作法がいくつもある。初めはとても難しく感じたが、お稽古を重ねるにつれて難しさよりも楽しさが勝るようになってきた。掛け軸や茶花、亭主がお点前している姿を見て楽しむことが、日本の伝統的な美しさなのだと感じるようになったのだ。三年生になってお点前ができるようになり、茶道がより好きになった。

この三つの日本の伝統文化の共通点は、相手のことを考えて行動すること、相手を敬うことだと思う。自分のことを優先的に考えるのではなく、相手を思い、考えて行動することが大切だということを改めて気づかされた。日本の伝統文化はすてきなものばかりだと感じた。

「隣の芝は青い。」という言葉があるように自分のものより他の人のもののほうが良く見えるのは当たり前なのだと思う。確かに外国のものがかっこいい。しかし日本には日本の良さがある。わびさびや上品さ、相手を敬う気持ちなど日本にしかない良さを大切にしていきたい。

私が気づけていないだけで、日本の伝統文化にはまだまだ魅力が隠されている。外国の良いところをしっかりと

取り入れながら日本の魅力をたくさん知っていきたくいと強く感じた。箏曲や茶道の技をより一層磨いて、日本に住む一人として、日本の伝統文化や魅力を外国の人にも胸を張って語れるようになりたい。



一人でも多くの命を救いたい

光陽中三年 内田 爽

みなさんは一人でも多くの命を救うためにできることとして何を思い浮かべますか。病氣と闘っている方へのボランティアや募金、沢山の支援の方法があります。その中でも私は看護師の道に進み一人でも多くの命を救いたいと思っています。私が将来、看護師になりたいと思うようになったきっかけは、母が病氣にかかって入院したことです。

私が小学校五年生の頃、母が病氣で入院しました。病院には救急車で運ばれ、救急車が来るまでの間、母が何度も腹痛を訴えていたのにも関わらず、私は母のためになることをすることができませんでした。母が何度も痛みを訴えているのに何もできない自分がとても悔しくて、胸が苦しくなりました。母の入院中、お見舞いに病院に訪れた際、一人の看護師さんが患者さんと一緒に院内を歩いて、リハビリをしているのが目に止まりました。患者さんをはげましながら一緒に歩いている看護師さんの姿はとてもしっかりと、患者さんのために手を貸しながらリハビリを手伝う姿に心を打たれました。その姿を

見て、母が病院に運ばれるまでの間、自分は何もできなかったから、母のように病氣と闘っている患者さんを自分で救うことのできる看護師になりたいと思いました。

また、看護師さんだけでなく、患者さんの様子を見ると笑顔があふれていて、積極的にリハビリに取り組んでいることに気づきました。

「リハビリは大変なはずなのに、なぜ笑顔で積極的に取り組むことができるのだろう。」  
と不思議に思いました。

しかし、患者さんと看護師さんの様子を見ていくうちに段々と患者さんが積極的にリハビリに取り組むことができる理由に気づきました。

患者さんが、転んでしまいそうになった時リハビリをあきらめてしまいそうになった時看護師さんはいつも、「頑張った分だけ結果は返ってくるよ。」とはげましていました。一回だけでなく何回も何回も患者さんをはげましていました。患者さんは、

「元気をもらえたよ。」と笑顔があふれた顔で言っていました。

看護師さんは「リハビリ」としての体のサポートだけでなく、患者さんが辛い時、くじけそうな時に心のサポートもしているからこそ患者さんが積極的にリハビリに取

り組むことができるのだと気づきました。

この看護師さんを見て、沢山の人達を幸せにでき、一人でも多くの命を救える看護師になりたいと思いました。今まで、看護師は医師のサポートや患者さんのお世話をする仕事だと思っていたけれど、患者さんの心のケアもおこなう病氣と闘う沢山の患者さんに幸せを届ける仕事だと考えが変わりました。

看護師は患者さんの命を扱う大事な仕事であり、失敗をおこしてはならない仕事です。

しかし、患者さんの笑顔を見ることができ患者さんに直接貢献できて、元気になる様子を見届けることができます。やりがいのある仕事なのだと思います。

「一人でも多くの命を救いたい。」これは私の将来の夢です。病氣と闘う患者さんの支えとなる看護師を目指しています。看護師になるまでの道はとて大変です。看護学生として沢山の専門知識を身につけ、国家試験に合格しなくてはなりません。

けれども、沢山の患者さんに幸せを届ける看護師になりたいと心から思っています。

一人でも多くの命を救える看護師になり、沢山の患者さんに幸せを届けられるようになります。



私達は、人間ではないのかもしれない。いや、「人間」になりきれない「ニンゲン」もどきなのだと思は思う。「ニンゲン」もどき、つまり「怪物」だ。「ばけもの」だ。だが、アニメや漫画などで見る怖い「怪物」よりかは「人間」に近い存在であると私は信じたい。だから私達は「人間未満、怪物以上」の存在なのだと思っている。私がそう考えだしたのは、スマホを持ちネットに足を踏み入れてから少したった頃だった。最初はこんなにはつきりと考えていた訳ではない。漠然とした思考の中、徐々にはつきり、具体的な言語になっていった。この作文の題名「人間未満、怪物以上」に私が辿り着いたのも、ここ最近のことだ。しつくりくる言葉があると、自分の考えを伝えやすい。人に何かを伝える作文にはびつたりだといえる。この、「しつくりくる」言葉というのがこれだった。まあ、そんなことはおいておいて、私が人を「人間」としてみていない、ということではないことを先に言うておく。ここから先は、ただただ私の考えや思った事がぐたぐたと書いてある。その文で、私が人を「人間」

としてみていないのではないかと考える人もいるだろうから先に言うておく。私は、匿名性のあるものが好きだし、嫌いでもある。ネットも同じだ。好きだけど、嫌い。ネットのすばらしい所と、私が嫌いな所。それらはすべて同じであり、人々が見て見ぬふりをする所ではないかと思う。アンチコメや暴言、悪口などネットではすぐ言える。逆に自分が感じた心や美しさを世界に発信することもできる。これらは全て、匿名という壁に守られているから人々は発信できるのではないかと、私は考えてしまう。そしてこの匿名性、壁が人々を「怪物」にしてしまう。私達は進化によつて退化を得た。いや、退化ではなく、私達が欲している進化とは別の進化だったのかもしれない。だが、今何かをここで考えたとして、何が変わるというのか。人々は「ネット」で進化し続け、退化を得ている。「ネット」で真の「人間」になれたり、別の何かになれた人もいるかもしれない。けれども、それはごくわずかな人々のみだ。私達は「怪物」にしかならない今日で生きながら、「怪物」であるという、それにはかなれないという本質から、目をそむけている。分かっている人もいるだろう。でも、分からない、何も知らない、見ていないふりをする、その方が、「怪物」たちは優しいから。「怪物」は仲間だと思っっている中は特に何

もしないから。

私は、「人間未満」であることを知っている。私は、「怪物以上」であることを知っている。でも、それでも、私という「人間」になりたい。だからこそ、今私は生きて、世界を楽しんでいる。楽しんでいくからといって自分が「人間未満、怪物以上」である「人」ではないことは分かっている。でも、世界は私に色と美しさと物語と愛をくれた。だからこそ、もつと楽しんでいきたい。楽しめば楽しむほど、人間に近づけると思うから。途中から何を書いているか分からなくなつたが、私が言いたいののは、人々はみんな「人間未満、怪物以上」の中途半ばな存在なんだ。もつと、美しさやきれいなものを世界に求めたらどうだ。自分がきたないと思うものは見なければいい。世界に生まれた以上完全に見ないのはきびしいが、そんなんどうでもよくなるくらい、世界の美しい所で君の心をうめたらどうだ。美しいものは人それぞれ。そう思いながら、世界を楽しもうじゃないか。

受験に向けての心ざし

栄進中三年 井上愛琉

「あなたの短所はどこですか？」この質問には答えを出せる人が大半だと思う。だが、「その短所を直すためにあなたは何をしますか？」これを聞かれると悩む人も出てくるだろうし、もし答えを出せても実行に移せない。継続できない人が多いと思う。誰だつて自分の良いところを見ていたいし、なるべく苦労はしたくないだろう。かくいう私もその一人だ。だからこそ過去の自分を超越し続けなければならぬ受験勉強は、私たちの人生の関門として立ちはだかるのだと思う。「最大の敵は自分自身」修学旅行を終え、本格的に受験勉強がはじまっていくこれからの自分へ、私はこの言葉を忘れないで欲しいと思う。

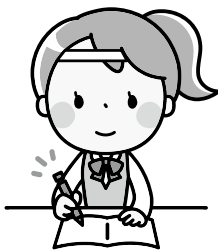
私が受験を意識しはじめたのは、高校説明会の手紙が学校で配られるようになった六月の初めだ。親にも塾の先生にも高校の話は何度もされたが、「面倒くさい」の一言で後回しにしてしまっていた。そんな私が、「最大の敵は自分自身」なのだ、自分の弱さに向き合いたいと思つたのは親に無理やり行かされた塾の自習室での出

来事だ。どうせ誰もいないだろうとドアを開くと同じ中三の人たちが一生懸命勉強していて、自分の考えがいかに甘いものなのかを知った。焦りを覚えた私は次の日も自習室に行くと、昨日と同じように多くの中三生が黙々と勉強をしていた。とりあえず周りと同じように勉強をし始めた私に、怠け者の自分が顔を出す。苦手な問題や難しい問題が出てくると後回しにして放置、集中もすぐに途切れてしまうのだ。私がそうしている間も真剣に勉強に取り組み、己を高め、過去の自分を超えようとする彼らと違って、私がいかに自分の弱さと向き合おうとしてこなかったのかを強く実感した。

様々な「自分」がある中で、受験に向け私は特に「面づくしがりな自分」を克服したいと考える。私は提出物やテスト勉強、家の手伝いなど自分にとって面倒なことは後回しにしてしまうことがあり、その結果、結局取り組むのを忘れてしまったり時間が足りなくなつて後悔することがとても多い。志望校選びも様々なことを考えなければいけないのが面倒くさくて逃げてしまっていた。面倒くさいと感じることは人間誰しもあると思うが、そこから逃げるのは自分に無責任な行為だと今ではしっかりと分かる。本番の答案をかくのは自分だけで誰も助けられないのだから、時間に余裕を持って行動すること、

やりたいことよりやるべきことを先に終わらせることを徹底し、「面倒くさがり」な自分を「やりきる自分」に変えていきたいと思う。具体的には一日のスケジュールや、やることリストを事前に作成しやるべき事を見える化させることで時間を効率良く使えるようにしていきたい。また、難しい問題は自分一人でなんとかしようとしてもほとんど分からなくなつていたり、間違つた解釈をしてしまうことにもつながるので、面倒くさがらず教科書やネットを利用して基礎から丁寧に理解するよう心がけていきたい。

受験はスポーツと違って功撃もブロックも無く、いかに自分を高めることができるかが重要になってくる。だからこそ弱い自分を克服し、最大の敵である昨日の自分を超えていけるよう一生懸命に勉強していきたい。



「失いたくないもの。」

栄進中三年 葛 貫 陽 頼

「進路」という言葉をきくだけで頭を抱えてしまう。そんな季節がやってきた。私はもう、受験生なのである。学校選択、将来の夢……。考えなければいけないことが山ほどある。家庭学習、テスト、部活……。やらなければいけないことが山ほどある。

どんな高校生になりたいか。考えてみたとき、まっ先に浮かんだ答えは「一人になりたくない」だった。私は少し人見知りの部分があり、積極的に人に話しかけられないことが多い。そんな私にも友達がいる。クラスや部活動、生徒会。たくさんの場面で私を支えてくれた仲間達を失うと考えると、胸が締めつけられるような思いになる。高校生になっても関わりをもてる人なんているのかも分からない。

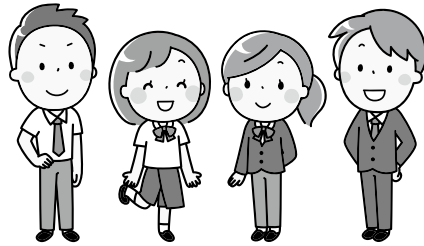
他にも、失いたくないものがある。それは生徒会の仕事である。私は一年生の頃から生徒会本部役員として、学校行事の運営や、日々の学校生活の様々な場面で動いている。生徒会の仕事は、自らが考えて動かさなければいけないことが多く、大事な仕事なので、間違いを犯して

しまったときの責任は重大である。しかし、私はこの仕事が好きだ。私は忙しいことに充実感をおぼえやすいからだ。そして、何より人の役に立てるといふことがとても嬉しく、やりがいを感じる。私達生徒会がいなければ、多くの学校行事は運営が困難になってしまう。一人一人が大切であり、必要な存在なのだ。生徒会の仲間達も選挙でみんなから票を獲得しているだけあり、みんなが積極的に仕事に取り組むし、話していて楽しい人ばかりだ。私はその空間がとても心地良い。失いたくない。ずっとこの生徒会で仕事をしていたい。

仲間や生徒会以外にも、中学生ならではの無邪気さであったり、中学校生活を一番に支えてくれた先生方だったり、義務教育の安心感だったり、失いたくないものがたくさんあることに気がついた。それは、私の中学校生活が充実していたということであろう。これまでの中学校生活に感謝をしなければならぬ。そして、残りのわずかな中学生でいられる時間を大切にしようと思う。

失うことは怖い。けれども、私が今失われてしまうと思っているものは本当に無くなるわけではない。環境が変わるだけ。私が大好きな仲間や仕事は私の心の中に必ずあって、きっと私を助けてくれると信じている。中には失ってしまうものもあるだろう。けれど、何かを得る

ためには、大切なものを捨てなければならない。失ってしまった分、何かを得ることができると信じて、明るく心もちで、高校への道を歩んでいきたい。自分と思いを信じて、大人になつていきたい。



### 終わり方から学ぶ経験

東中三年 中村 茉広

三年生になり、運動部はだいたい六月中に引退する人が多いと思う。一つの部活を選んで二年と少しの間、全力でプレーしてきた。私は陸上部に入っていて、中学校の部活動を陸上だけに力を注いでいた。気づいたら一年生が終わりを迎えて最初と比べれば、記録も伸びていた。すぐに後輩が入ってくれば、後輩に記録を抜かされないように必死に頑張つて二年生の十一月まで調子が上がり続けていた。あの時に戻りたいと何度願ったことだろうか。二年生の十二月に肉離れをしてしまった。その時には早く治してまた自分の種目に集中できる日が来ると思っていた。だけど肉離れを繰り返してしまった。今思えば二回目の肉離れが全ての地獄の始まりだつたと思っている。その日のコンディションというものがあるが、競技場に立つた十二月に走れない思いを経験するとは思っていなかった。肉離れが癖になってしまったのも、治つて走ろうとしても足が動かさなくて本来の二十パーセントの力しか出せなかったこと。一番恐れていた引退の終わり方だつた。仲間の三年生がそれぞれ「ラスト！」

や「全力を出して終わろう。」と言っている姿を見て、私は応援するよりも最初に羨ましいと思った。誰も経験していないから気持ちを理解してもらえないのは当たり前だし、仕方ないとも思った。去年うれしい思いをしていたから、今回はよりド心底に落ちた気分になった。

ここで私を感じたのは、自分が自分の事を知り尽くして調整をすること。自分が感じた思いを自分の中で共有すること。周りの環境は自分でつくること。自分を変えられるのは結局、自分だけだということを学んだ。チームでやってきても陸上はトラックに一人で立つ競技だし、自分の体をつかって記録を出すスポーツだ。周りがどれだけやる気がなくても、そんな環境の中で最後まで頑張れた自分を認めようと思う。

これからを生きていくには、一人でも夢をもち続けること。そして自分と同じ気持ちをもっている人を見つけてもらうこと。私の場合は、後悔をした時にいつもそばにいてくれたのは陸上を一緒に本気で取り組んでくれた後輩だった。私は今回の後悔は一生残ると思う。だけれども、それまでの二年と少しの陸上に向きあつた思いも一生残る。この辛い思いをバネにして自分の中の最大限を發揮していきたい。もう悔いを残さないうちにも。これからの物事の終わり方に満足していくためにも。二年と

少しの間、仲間と共に成長してきた。誰よりも速くなるために、誰よりも目標をすぐに達成するために。それでも、私の場合には上手いかなかった。あの時の怪我がなければ自分はどこまで強くなっていたのだろうかと思う。スポーツの世界は厳しく、活躍して輝ける選手もほんの少し。一握りの世界。私はそんな厳しい世界でも陸上をやってよかつたと思う。○・一秒早くなるためにかけてきた時間。常に自己記録を出そうと共に戦つたライバル。全てが思い出。夏の暑い中の練習も冬の活動時間が短くひたすらに筋トレをしていた冬の練習も今思えば全て良い思い出だつた。体を動かしていた日々は、これからの受験生という期間では、あまり来ることはないと思う。だけれど受験生を乗り切つた次の春からまた走りはじめたいと思う。後悔をなくすには努力で納得のいく成果を出すしかないと思う。今度は笑顔で走り終われるように未来の自分がどんなスポーツをやつていても仲間と熱い気持ちで、笑顔で結果を出せますように。

大袋中三年 濱 口 直 子

私は日常のふとした時に差別をされた、等人権に関することを感じることはほとんどないです。しかし、「〇〇らしく」という言葉は生活しているうえで、少し気になるところがあります。

「女性らしく」、「子どもらしく」、「普通らしく」。これが私で言う「直子らしく頑張れ」のような相手、個々を思いやる「らしく」であれば素敵だと感じるのですが、先程のような複数の人々をもととした「らしく」だと、少しの差別のような気がしてしまうのです。人権とは「誰かが生まれながらもつていて、誰からも侵されることのない権利」のこと。しかし、周りに恵まれず、生まれながらの個性で差別されなければならない人々がとても多くいるというのです。私は、このように、生まれながらの肌の色、性別、障がいなどで差別をうけてきた人の動向を見たことがあります。そこで見たのは、自らの個性を否定しなければならぬ、自分自身が嫌になる、という差別が生んだ苦しい結果でした。私はこの動向を見て、生まれながらの変えようのない自分を恨むことになる環

境が存在するということにとってもショックをうけました。また、その変えようのない自分の個性で、「〇〇らしく」と偏見や主観のこもった差別のされ方が、とても苦しい思いになりました。「〇〇らしく」という言葉は、「〇〇のくせに」という言い方にも変えることができます。それは「らしく」よりもひどく、「貴方は私とは違う」、「私より劣っている」等の意味すらこめられていると私は思います。よく「言葉の刃」や、「言葉が胸に、心にささる」といった比喩を聞きます。それ程までに、言葉が人に与える力とは大きく、強く相手の思いにはたらくかけるものだと考えることができます。だからこそ、「〇〇らしく」という言葉は、人の個性や各々の考え方、思想を認めるときに使い、相手と気持ちの良い会話をしたときに言うべき言葉だと私は思います。

夢への道

優秀作品

蒲生小四年 千葉 悠斗

自分の夢を見つければ

一歩 道が開く

自分の夢に向かつて

そのためのじゅんぴをすれば

二歩 道が開く

たとえ失敗をしても

またチャレンジをすれば

三歩 道が開く

前へ前へと

あきらめずに進んでいけば

必ず夢にたどりつける

きれいな地球を守るために

大間野小四年 村田 桜

私たちには何ができるかな

地球のためにできること

これからでもおそくない

みんなできがしてみよう

地球の温度がどんどん上がっている

STOP地球温暖化

二さん化石をへらす取り組み

物を大切に、ごみをへらしてリサイクル

自転車、バス、電車を使おう

電気やガスを大事にしよう

一人一人の小さなエコ活動が

大きなきぼうになるんだよ

緑ゆたかな地球を守ろう

私たちの未来のために



優しい自然

新方小四年 濱野 菜摘

私はいつも  
ささえられていて  
優しい自然に  
ささえられている  
なみ木の緑や草花に  
あたたかくつつみこんでくれる  
お日様に  
優しい自然に  
ささえられている  
私は自然と友達で  
自然にささえられている  
優しい自然が  
私は大好きだ

わたしの家族

大袋小四年 山田 知帆璃

わたしの家族は、面白い  
でも、ときどきけんかする。  
わたしの家族は、面白くてけんかするって  
いみわからない。  
でも、いみわからなくても  
とても楽しい家族なんだ  
一人一人の家族それぞれ  
しゅるいのちがう  
家族なんだ

「わたしのゆめ」

南越谷小四年 黒須佑菜

歌は体の中から自然と元気がわいてくる  
だから私は歌手になつて  
みんなを笑顔でいっぱいになりたい

わたしのゆめは  
大すきな歌で

みんなを元気にするこ

歌は

うたっている自分も元気になるし

聞いているみんなも元気になる

わたしのゆめは

将来 歌手になること

元気で明るい歌手になること

歌でみんなを勇気づけたい

漢字テストがよくできなかったとき

妹とけんかしたときも

ゆっくり流れる歌で

心が落ち着いたから



願うこと

鷺後小四年 瀨中結愛

私はたまに  
戦争のことを考える。  
なぜ人は戦うのだろう。  
なぜ争うのだろう。  
なぜ欲にまみれているのだろう。  
ふしぎだ。  
土地の取り合い  
国と国との考えのちがいが  
そんなことのせいで  
何百万人も人が亡くなってしまふ。  
悲しい。  
戦争なんてなくなつてほしい。  
平和になつてほしい。  
命を大切にしたい。  
ただそれだけだ。

人の心

川柳小四年 寺田将生

人の心つてなんだろう  
あの人はきらい  
あの人はやだ  
そう思った事はないだろうか  
でもそう思われている相手はどうだろうか  
ほんとうはやさしくてそれを  
行動にできていないだけかもしれない  
だから一回ぐらい  
心の視点をかえようよ  
そしたらぜったいなかよくなれる

あいさつ

大袋小四年 田中陽都

みんながあいさつすれば、  
みんな仲良くなつて心ゆたかになる  
あいさつをすれば心ゆたかじゃない人も  
みんな元気になる  
あいさつはまほうの言葉だ  
あいさつをするとしようらいをかなえられる。  
みんなもあいさつをしようみんな  
さあいっしょにあいさつを

あいさつで気持ちを変える

大間野小四年 小林優莉菜

あいさつってなんだろう  
「おはよう。」「さようなら。」  
ちよつとのことで気持ちをかえられる  
まるでまほうみたいなことなんだ  
相手も自分もハッピーに  
元気よく、相手の目を見てできると  
パーフェクト  
これがいさつ



弥栄小五年 家村 美羽

「一歩でも踏み外すと崩れる世界」  
そんな世界で生きていく。  
完璧などは求めない  
人間に完璧なんてないからね  
輝く明日と未来の自分たち

「ペンは剣よりも強し」

そんなことわざがある通り、

暗い言葉や人が苦しむ言葉

そんな言葉が

刃物になったように

人を傷つけていく。

でもね、

正反対に

明るい言葉や人が嬉しい言葉

そんな言葉を使えば

みんなが明るく

そうして世界が変わっていく

とても明るい未来へ。

「言葉のある意味を考えて使っている」

本当にそうだろうか

言葉は、

人を喜ばすためにあり

人をけなすためにあるものではない。



大切な家族

川柳小五年 澤 花 英

生まれたときから

ずっと、

ずっと、

大切にしてくれた

家族といるとほつとする

ぽかぽかしていい気分

こんな私の事だつて

大切にしてくれて、

家族といると、

ほっこりして、温まる時間

生まれた時から

ずっと、

ずっと、

やさしくしてくれた

時にしかられ、

時にほめられて、

こんな私の事だつて、

やさしくしてくれたことが、

うれしくて、ほつとする時間

今も、

ずっと、

ずっと、

家族は大切にしてくれて、

やさしくしてくれる

恥ずかしくて言えない気もち

だけどやっぱり変わらない

お父さん、お母さん、兄弟が

やっぱり大切に、大好きだ

「言葉の刃物」

新方小五年 加藤 蒼 乃

一つの言葉で全てが変わる。  
言葉で印象を変えることになる。  
言葉は刃物になる。  
一つの言葉で相手を傷つける可能性がある。  
しかしその言葉の刃物で助け出すことができる。  
言葉の刃物は使い方に気をつける。  
そうすれば救えることができる。  
一つの言葉で全てが変わる。

ファッションデザイナー

蒲生南小五年 栗原 希実

大きなフリル、うしろにリボンのついた黄色のワンピース  
ゆったり着れる、ポケットのたくさんついた白色ズボン  
丸えりの、レトロなお花のついたトレンチコート  
小さなビーズ、たくさんちりばめた海の中にいるような  
ウエディングドレス  
でてくるでてくる止まらないアイデア、いつか私も  
つくりたいな。



ぼくのおとうと

蒲生南小五年 徳田 瑠輝

おかあさんのお腹が  
風せんみたいに大きくなった  
四年生の秋  
ぼくにおとうとが生まれた  
ふにやふにやでおれそうな  
ちいさな手と足  
一生けん命大きな声で  
泣いていた  
ぼくのゆびを  
ちいさな手でにぎってくれた  
どんどんできることがふえて  
成長していくおとうと  
ぼくのことをみてわらうおとうと  
追いかけてくるおとうと  
どんなおとうともかわいい  
おとうとがわらうとみんながわらう  
世界で一番かわいいおとうとだ

私

優秀作品

南越谷小六年 細谷 宇

私をつくりだしたのは私  
この私は、私という名の「芸術」  
これから先どんなにつらく困難なことがあるうとも、  
それは、私の人生の通過点に過ぎない  
私という名の「芸術」は、私にしか理解できない「芸術」  
他人という名の「芸術」に支配されていては、私という  
名の「芸術」にはならない  
私という名の「芸術」は、いつも進化をし続けている  
たとえ私という名の「芸術」がボロボロになったとして  
も  
これは、私の人生の通過点に過ぎない  
私という名の「芸術」は、これから先の  
未来ずっと清らかな心をもちつづけたい



みんなと私

新方小六年 金子花愛

みんな自分だけでは生きていけない。  
だからいろんな人と  
いろんな関わり方で  
お互いに支え合っている。

だから

あなたの周りにいる

友達 家族 先生

普段は言えない

「ありがとう」を伝えよう。

いつの間にか笑顔になっているはず。

今の自分と未来の自分

弥栄小六年 今泉杏俐

未来の自分は何してる？

ときどき

未来の自分に聞くけれど

未来の自分は答えてくれない

ときどき

未来の自分が心配になるけれど

未来の自分は答えてくれない

だけど たまに

未来の自分が言っている

未来の事は気にするな

今は今を

自分らしく

生きようよ！

「失敗」

蒲生南小六年 平野月海

失敗を恐れてはいけな  
失敗をするのが怖い  
みんなの目が怖い  
いろんな感情が湧き、  
自分を責めてしまう  
だけれども、  
だれでも 失敗はする  
みんな失敗をしていても  
成功を信じて 挑戦する  
だから 失敗を恐れずに  
成功を信じて  
挑戦しようじゃないか

「希望の星」

蒲生小六年 久米希智

悲しい  
はなしたい  
知りたい どうしてここにいるのか  
ただただ 毎日思うこと  
変わらない毎日：  
そして あしたがくる…。  
「大じょうぶ？」  
そう言われるのが きらいだ  
泣きたくなる どうして？  
悲しいから？ さびしいから？  
「ずっと一人で かかえこんでるから？」  
もしそうなら：  
本当は だれかに言いたいのかな  
自分の気持ちを  
知りたいのかな  
自分がここにいる意味を

勇気を持つとう どんなに苦しくても  
しっかり伝えることが

自分にある「希望の星」だと思いませんか？



## ポジティブ

蒲生南小六年 浅野礼奈

自分を好きになるすてきな魔法  
みんなもいつしよにやってみよう！

引っこみ事案？ サポート役が得意なんだね  
おつちよこちよい？ 天真爛漫だね  
めんどくさがり？ 省エネ思考！  
ふんいきが暗い？ 落ちついてるね  
のろま？ マイペースってことだね  
わがまま？ 自分の意思があるね  
頭が悪い？ お気楽だね  
気が弱い？ 思いやりがあるね！  
失敗ばかり？ 学べてるってこと  
優柔不断？ 慎重なんだね  
繊細？ 感受性が強いね  
ネガティブ思考？ 物事を深く考えるね  
ちよつとは自分を好きになれたかも？

個性って何だろう

弥栄小六年 加藤 紗也

他の人とちがうからって「おかしい」「へんだ」という人がいる

でもそれって本当におかしいことなのかな

人がそれぞれちがう個性を持つているのはあたりまえ

他の子とちがうのは一人一人もっている個性だから

他の人ができないことをばかにする人がいる

でもそれって本当にばかにすることなのかな

相手はその言葉にぎずついているかもしれない

だれだってできないことはある

自分ができることができない人もいる

逆に自分ができないことができる人もいる

それこそ本当の個性だと思う

だからそれを大切にしようと思う

私は思う 私も思う ぼくも思う  
手をさしのべられたら

大間野小六年 岡 安 藍 九

私は思う

どこでも一人ぼつんと

泣いている子が

いるかもしれないと

私も思う

円になつて笑っている子

だけじゃないかもしれないと

ぼくは思う

そして願う

みんなが笑って

いつまでも幸せを

かみしめていられたらと

いつか

悲しみをかみしめている子

そんな子に

手をさしのべられたら

どれだけ大きな幸せを

わかちあえるだろう



昔のわたし、今のわたし

桜井小六年 松本恵奈

人を見て 真似するけれど 失敗しそう

人混みを 進んでいくのは 勇気がない

周りばかり 気にしてしまつて疲れてしまう

外に出て 遊びたいけど だるくなる

外に出る 人がたくさん 頭痛い

人と会う しゃべりたいが 避けてしまう

人と会い 趣味が合うけど 口開かない

人を見て 真似してみるのも いいかもね

人混みも イヤーマフあれば 大丈夫

外に出て たまに遊ぶのも いい感じ

外に出る イヤーマフなしでも 慣れてきた

人と会い 挨拶くらいは できるかな

昔のわたし、今のわたし

どちらのわたしも 大切なわたし

大切な家族と友達

弥栄小六年 中島優芽

私が笑っている時  
友達はいっしょに笑ってくれる  
私が悲しい時  
家族はいつもはげましてくる  
私が悩んでいる時  
家族や友達が相談に乗ってくれる  
私はあらためて思った  
家族や友達がいてくれてよかったと  
家族や友達がいるから  
私は今すごく幸せだ

帰り道

武蔵野中一年 小船なつみ

一人で歩くいつもの道  
今日は空気がどんよりして  
いつもと違う風景を見る  
暗くて不気味だけど  
雨のささやき声で  
ポツポツ ポツポツ  
なんだか私に話しかけているよう  
そのきれいな音色を聞くために  
今日はゆつくり帰ろうか

優秀作品

いつもどおり

武蔵野中一年 大塚 芽 依

いつもどおり起きて

いつもどおり学校に行って

いつもどおり勉強して

いつもどおりの景色を見て

いつもどおり寝る

楽しいことがあった時は

太陽みたいに笑って

悲しいことがあった時は

雨が降ったみたいに泣く

いいことばかりじゃない

辛いこともある

けれどそれを感じられることが

幸せなのだ

大切なことほど

なくなつてから気づく

「いつもどおり」が

幸せなことに



夢の世界

武蔵野中一年 松本 星凜奈

寝る前に

窓から溢れる

月明かり

時計の音と 外の音が 重なって

私に歌を 届けてくれる

月と歌のデュエットが

私を夢の世界へと

連れていつてくれる

連れていつてくれる

朝虹

武蔵野中一年 三好 深月

雨上がり

傘を片手に

うつむいて

「また降るかもな」と

傘閉じる

顔を上げて

空見れば

七色の虹が笑ってる

「今日も頑張ろう」

一歩踏み出した午前八時



新栄中一年 本田 和蓮

新栄中二年 吉田 ちひろ

チャリン チャリン  
ある日の帰り  
菜の花がさく土手の  
雲が夕陽にかさなつて  
こがねいろにひかつていた

チャリン チャリン  
風にのつて走っている  
菜の花がさくあの土手の  
川にうつる夕陽や花  
ゆらゆらゆれて  
ココロもゆれた

春はエッセイ。新たな環境に怯えながら、ままならな  
い人生の一部を読む。

夏はホラー小説。真夏日なのにもかかわらず、想像す  
る光景はなんだか肌寒く感じさせる。

秋はライトノベル。空想世界に浸るのもよし。固定化  
された世界観設定を楽しむ。

冬は青春小説。甘い恋に触れるのも、生きづらさに漬  
けこむのも憂し。



思い出春夏秋冬

新栄中二年 石野優茉

春は夜

陽落ちる頃

月の光に照らされて

咲き誇る姿はまさに圧巻

一人で眺めるも良い

友や家族と見るのもまた良い

夏は夜

祭りの屋台が立ち並び

散策しつつ食べ歩く

花火を見るのは土手の上

友と楽しむ至福の時間

金は尽きるが思い出は残る

秋は昼

なんだか寂しく感じる一本道

街路樹をふと見れば

冷たい秋の風に乗り

流れ行くのはイチョウの枯れ葉  
そんな少しの寂しさこそまた良い

冬は朝

二度寝したい体を起こして

屋根の氷柱と朝日を浴びる

大小様々な氷柱の背比べ

家族みただいと呟いた

そんな些細な時間が良いものだ

花鳥風月

新栄中二年 岡 田 大 輝

春は正午。ほのかに温かい気温が僕の眠気を唆す。睡魔がまぶたにのしかかる。目をこすり抵抗して花霞の映る真昼時。

夏は夜。まだ昼のなごりを見せつけるかのような暖かな月夜。南風の吹く晴天の暮夜、風鈴の聲が響き渡る。

秋は昼下り。涼しげな風も吹き荒れるいなさも、山装う化粧を良くも悪くも時期を感じさせられる。

冬は朝。寒き頃に目が覚めても、心の欲が抑えられない。凍てつく体を暖かく覆う至福の一時。



四季折々

新栄中二年 戸ヶ崎 莉緒

春は朝惑い。窓掛けのすきまからさす陽光は、美しきことかぎりなし。

夏は昼。太陽の照り輝く日はもちろん、雨が降る日も乙なもの。ただ、梅雨寒が続くのはいただけない。

秋は夕。日没後も残る照柿はえも言われぬほどの美しさ。

冬は夜。冷気によつて澄んだ星々は満月にもまさるほど。

「他人事じゃない」

北陽中二年 石井 里衣菜

世界には

きれいな水を飲めない人がいる

世界には

十分に食事ができない人がいる

そんな今

綺麗な水を飲むことができています

そんな今

十分に食事ができています

毎日八時間かけて歩いていている人がいる

茶色い泥水を手に入れるために

出しゃばなしにしている人がいる

綺麗な水を

必至に求めている人がいる

生きるための食料を

平気で捨てている人がいる

まだ食べられる食料を

当たり前のことが実はとても

幸せなんだ

ありがたいことなんだ

その「当たり前」が当たり前じゃない人がいると思うと  
これまでの自分の行動を見つめ直すべきだと気付かされる

海を越えた遠い世界で起こっていること

でもそれは決して他人事じゃない



「自分らしく生きる」

平方中二年 小林 ひかり

とがめられたりしても

自分らしく生きることを邪魔する

権利は誰にもないのだから

自分らしく生きよう

自分らしく生きる

それは

楽しいとき

嬉しいとき

自然と笑顔になること

悲しいとき

悔しいとき

涙が溢れること

友達と話すとき

家族とご飯を食べるとき

幸せだなと感じること

ありのままの自分で良い

偽物の笑顔ではなく

本当の自分の感情を表に出して

誰かに悪口を言われたり

そうして

いつか世界中の人が幸せと思える

そんな社会にしていこう

人生の木

優秀作品

北陽中三年 関 郁 哉

人生は木のようだ  
根のように考えを張り巡らせ  
幹のように強い意志をもち  
枝のように夢へと進む  
人生には木の枝分かかれのように  
無限の道がある  
綺麗な花を咲かせるのは自分次第  
いろいろなことに挑戦し  
いろいろな感情とふれ  
いろいろな人と関わり  
人生の木を丈夫にすれば  
寒い冬がすぎ暖かい春がやってくる

言葉と心

大袋中三年 久 米 悠 愛

心それは氷のようだ  
言葉それは水のようだ  
あたたかい言葉は心を溶かし、  
冷たい言葉は心を凍らす  
あたたかい言葉は人を元気づけ、心を癒す  
冷たい言葉は人を傷つけ、氷の刀となって  
突き刺さる  
人の心を傷つけるのも言葉  
人の心を癒すのも言葉である  
ある人の言葉で傷つき、  
ある人の言葉で救われる  
言葉は形や温度を変え、私たちの心に触れてくる  
自分の心も 人の心も  
あたためよう 優しい言葉で  
触れよう 優しい心で  
そうして人の心と関わっていきこう

四季という名の地球の宝

北陽中三年 篠原せり

春眠日和の桜道に陽炎

夏夜に響く自然の鳴き声

綿秋 朱色に包まれ山粧う

露草色の凍晴に冬木立

地球の温度上昇

四季の数字が減っていく前に

この自然を堪能して

この自然を大切に

この自然を承けていきたい。

大きな世界で

新栄中三年 若林花奈

世界は広い。

物理的にも広いけれど、

たくさん知らないことであふれている。

あまりに広いものだから

遠くの方ばかりを見て、

足元が見えなくなってしまう。

しかし、よく周りを見てみよう。

今まで、ぼんやりしていた世界の輪郭が

はつきりと見えてくる。

小さな日々の破片の、

さらに細部まで観察すれば、

世界に対する解像度が格段に上がる。

そして、今、私が生きる場所が

もつと広く鮮やかに感じられる。

私は誰よりも広い世界を生きたい。

宝物

大袋中三年 藤江泉誓

僕らは時が経てば成長する  
大人になる  
それでも、忘れない  
何年経つても色褪せない  
僕らの記憶の中で  
光り輝く大切な思い出がある  
友と笑い合った日  
友と競い合った日  
友と喧嘩した日  
そんな思い出一つ一つが  
自分の中で忘れられない宝物になる

私の見る景色

大袋中三年 丸岡舞莉

失敗が嫌いだ  
今までの自分に裏切られた気がするから  
今までの自分に負けた気がするから  
失敗が嫌いだ  
失敗が嫌いだ  
大切な場面  
大事な立場  
失敗は許されない  
周りの人の期待が応援が  
目に見えない凶器となつて  
私を押しつぶしていった  
失敗した  
絶望で何も考えられなくなつた  
周りの人の励ましは気遣いは  
目に見えない場所に閉じ込め



私をさらに苦しくさせた

あなたは言った

成功が全てではないこと

失敗は経験で成功のもとだということ

そうやって得た経験は宝物だということ

私の見る景色が変わった気がした

失敗が嫌いだ

今までの自分に裏切られるから

今までの自分に負けるから

でも

失敗しないと得られない経験

失敗の先に得られる成功

失敗を恐れなければ開ける未来

あなたが教えてくれたのは

成功以上に大きなもの

《作文の部門》小学四年生

氏名	題	名
竹内 友香	大切	越ヶ谷小四年
酒井鳳之介	思いやりの心	大沢小四年
下平 豊輝	思いやりをもつ心	大沢小四年
堀江 優奈	私の将来の夢	新方小四年
石渡 初姫	友達を大切に	新方小四年
栗原 蓮	障がいがある人	新方小四年
鈴木 桜音	人間はなぜ戦争をするのか	新方小四年
井戸川日向子	「ゆずってくれてありがとう」	桜井小四年
上山乃々華	「おばあちゃんのお手伝い」	桜井小四年
中川 千穂	みんなが使うまほうの言葉	桜井小四年
望月 裕太	ぼくの弟	桜井小四年
野中 智陽	将来の夢	大袋小四年
濱野 陽葵	しよう来のゆめに向かつて	大袋小四年
川島衣茅乃	わたしががんばっていること	大袋小四年
小窪 志織	わたしの未来について	大袋小四年
藤原 樹菜	わたしの将来のゆめ	大袋小四年
伊藤 駿	今、がんばっていること	荻島小四年
堀江 結愛	ぼかぼか言葉ととげとげ言葉	荻島小四年
大熊 燈	将来の夢	荻島小四年
加藤 空歩	今のわたしの二つの夢	荻島小四年

棚井 遙希	ぼくを育ててくれた家族	荻島小四年
久野 絆夏	目標に向かつて	荻島小四年
加藤 莉子	「ボランティアの人たちを見て」	出羽小四年
柳澤 美慶	耳が聞こえない人にやさしくしていた	大相模小四年
尾川 耀紀	親切な気持ち	増林小四年
早船 愛莉	女の子の人生は	増林小四年
星野 理佐	ゴミをへらそう	増林小四年
横井 穂希	おばあさんへのおてつだい	増林小四年
千葉 結月	みんな仲良くなれるといいな	川柳小四年
飯村 結花	どうして車いすは入れないの？	川柳小四年
小山内美稀	「夢はペットトリマー」	南越谷小四年
杉山 こな	「大好きな家族」	南越谷小四年
安原 琉桜	「自分のゆめ」	南越谷小四年
島倉 桃香	「事故、けがをへらすために」	南越谷小四年
下野 玲花	わたしの兄姉	東越谷小四年
田島 由梨	お助けできる先生に	東越谷小四年
松嶋 京吾	「平和をあたり前に」	大沢北小四年
岡本 一弥	家族の一員	大袋北小四年
石原 奈月	バスケットボールを通じて	大袋北小四年
小川 夏芽	友達と自分のちがうところ	大袋北小四年
大橋 凜也	「科学者になりたい」	蒲生南小四年
有澤 葉奈	私の色々な友達	蒲生南小四年

白川	那奈	男女のさべつ	蒲生南小四年
山中	暉也	「やさしいところを大切に」	蒲生南小四年
奥村	璃花	「できてもできなくても」	北越谷小四年
高橋	幸源	家族	大袋東小四年
新井つむぎ	幸源	家族の大切さ	大袋東小四年
瀬村凜汰朗	凜汰朗	しよう来の夢 サッカー選手	大袋東小四年
窪田	柚奈	大切な家族	平方小四年
三井	清登	将来の夢に向かつて	平方小四年
中島	勝夢	ゆめへの第一歩	宮本小四年
山内	伸弥	やっていることは夢になる	宮本小四年
荒木	奏音	夢へ向かう	宮本小四年
池田	悠真	しよう来のゆめに向けて	宮本小四年
猪股	柚希	みんなの平和	宮本小四年
石塚	陽莉	体が不自由な方たち	鷺後小四年
飯島	蒼太	ぼくのしょうらいのゆめ	鷺後小四年
甲斐田よつ葉	よつ葉	戦争をするのはなぜか	鷺後小四年
岩谷	柚希	ありがとう	明正小四年
山田	華	なかまは大切だ	千間台小四年
原田	結菜	親切な友達	千間台小四年
遠藤	穂香	わたしのこっせつ	千間台小四年
羽澤	陽莉	みんな仲よく、楽しく	千間台小四年
一條	莉子	わたしのしよう来のゆめ	千間台小四年

山口	優衣	将来の夢を決める心と心の変化	南越谷小五年
横坂	菜々美	あいさつの大切さ	増林小五年
森藤	心結	障がい者に対する行動の大切さ	大相模小五年
松木	優歩	「見のがさない」の大切さ	出羽小五年
熱田	柚咲	声をかけることから「やさしさ」がはじまる	出羽小五年
山崎	百華	希望の光	荻島小五年
鈴木	夏菜	かなうといいな しよう来の夢	荻島小五年
齊藤	蓮	努力することの大切さ	桜井小五年
春日	一花	あいさつの温かさ	桜井小五年
土居	ななみ	ゆずりあい	桜井小五年
坂井	亮太	あいさつ	桜井小五年
市川	さやか	「私自身」	新方小五年
鈴木	杏果	「友達と私」	新方小五年
鈴木	恵菜	私たちと高れい者のちがい	大沢小五年
畑野	佑羽	言葉が持つ力	越ヶ谷小五年

《作文の部門》小学五年生

野村	春翔	心であいさつ	桜井南小四年
大塚	あゆ	大人になった自分	花田小四年
須賀	優月	みんなをえがおにするかんごしさん	花田小四年
谷口	ことみ	ブライインドサッカー	城ノ上小四年
加納	麻衣	ステキなあいさつ	城ノ上小四年

中島なつき	マンガで世界を幸せに	南越谷小五年
前田ちひろ	図書館がくれた夢	南越谷小五年
神代 橙花	九才の入院	東越谷小五年
小川 実咲	メッセージ	東越谷小五年
片野 巴華	ふつう	東越谷小五年
根本 晴太	人の自由をうばってはいけない	大沢北小五年
浦 友哉	仲間の大切さと感しゃの気持ち	大沢北小五年
熊野 結菜	私の気持ち、あなたの気持ち	大沢北小五年
黛 維心	思いやりの気持ち	大袋北小五年
増山小百合	外国人だからって決めつけないで！	大袋北小五年
松本 芹	いじめをなくすには…	大袋北小五年
長戸 彩夏	女性の気持ち	大袋北小五年
西元 涼太	電車で見たぎ足の人	大袋北小五年
織田小百合	かなえない夢	蒲生南小五年
岸 孝乃輔	今がんばってること	蒲生南小五年
田中 希宝	「人々の分かち合い」	北越谷小五年
奈雲 美優	障がい者のイメージ	大袋東小五年
高野 心音	自分らしさって何だろう	大袋東小五年
西中 詩織	身がぎれてうれしとは相手もぎれてうれしとは	大袋東小五年
豊田花菜美	等身大の自分	弥栄小五年
斉藤 瑞季	子どもの人権	大間野小五年
桜井 柚輝	「責任」を感じる力	宮本小五年

中津 駿	命を守る大切な仕事	宮本小五年
魚住 新太	人のために	宮本小五年
長嶺 百華	やさしさと努力	宮本小五年
笹野 大翔	ぼくとサッカー	宮本小五年
新保 碧人	ぼくと自学と未来	宮本小五年
鈴木 要太	将来の夢	宮本小五年
中島 唯夏	仲間はずれ	鷺後小五年
宇佐美いち花	いじめ	鷺後小五年
迫田 麗心	お年よりの人などの大変さ	鷺後小五年
角田 梨紗	権利がないのにやっていること	明正小五年
住吉 千秋	私の『こせい』とみんなの思いやり	明正小五年
土井 心愛	自分を信じてあげたいな	千間台小五年
三浦 花蓮	メタバースで広がる未来	千間台小五年
八木のののか	一つ一つの言葉の意味	桜井南小五年
茂木 翔	世界一の野球選手になる	花田小五年
浅間 花恋	未来に向けてボランティア	花田小五年
今井 岳	大切なゆめ	花田小五年
千波 暖恵	しょうらいの夢	城ノ上小五年
伊東 大裕	平等と言っているのに、平等ではない	蒲生小五年

《作文の部門》小学六年生

野澤	瑠子	スカートで雰囲気比較	越ヶ谷小六年
關田	爽来	個性を楽しめる社会	大沢小六年
野口	琴李	今頑張っていること	新方小六年
石川	円香	私が今年頑張りたいこと	新方小六年
伊藤	永真	あこがれの人に向かつて	新方小六年
小黒	仁菜	きらいの中の小さな楽しい	桜井小六年
藤枝真奈実		平和な社会へ差別へ	桜井小六年
江辺	袖羽	相手の気持ちを考えて	桜井小六年
田中	那英	いじめを「ゼロ」に	桜井小六年
高野	陽太	色々な人を救う子ども食堂	桜井小六年
田中	愛彩	昔と今の人権のちがい	桜井小六年
戸田	会美	みんな宝物	桜井小六年
武松	芽依	「男らしさ」「女らしさ」を求めない社会へ	大袋小六年
埜口	優	私の夢は、小学校の先生	大袋小六年
関根	知衿	「戦争」と「平和」どちらが大事?	大袋小六年
長山	輝	俳優とダンサーどちらを選ぶ?	荻島小六年
中村	梨奈	勇気をくれてありがとう	荻島小六年
太田	栞織	いじめや差別をなくすために	出羽小六年
三田麟太郎		言葉がある意味	出羽小六年
吉村	優花	人種差別をなくすために	大相模小六年
山田	光希	雨の日の通学路	増林小六年

高木	瑞夏	どんなときでも、差別はだめ	川柳小六年
吉田	琴乃	みんなのために	川柳小六年
鈴木隆之介		男女の差別	川柳小六年
横井	悠	私にだってできること	川柳小六年
堀越	怜奈	「人をただす。」	南越谷小六年
安田	真琴	将来に向けて	南越谷小六年
井上	咲希	挑戦	南越谷小六年
山本	咲良	「当たり前ではない教育」	東越谷小六年
榎本	七望	人種によって区別される世界	東越谷小六年
篠崎	清花	言葉に責任を	東越谷小六年
佐藤	愛梨	自分の一人称	大沢北小六年
葛貫	大	初めての人の助け	大沢北小六年
平野	夢夏	差別なく、支え合う社会を作ろう	大袋北小六年
牟田朱佳里		「子どもも人だよ」	大袋北小六年
木村陽奈子		自分らしく生きていこう	大袋北小六年
藤縄	泰葉	命の重さ	大袋北小六年
黒田	桃羽	自分らしさ	北越谷小六年
武井	健太	命の大切さについて	大袋東小六年
田端	心美	男女平等な世界を目指して	大袋東小六年
油本	楓	それぞれの幸せ	大袋東小六年
須藤	悠月	「わたくしは社会のために『自立して、自立を伝える』」	平方小六年
渡辺	仁彩	「未来を願って」	平方小六年

小川	智也	「今とこん後」	平方小六年
六笠	佑香	母と兄から教えてもらったこと	平方小六年
藤吉	湊介	心の中のバリアフリー	平方小六年
松下	颯希	「いじめのない世の中へ」	平方小六年
栗原	美風	ジェンダーレスへの理解を	弥栄小六年
栗原	彩心	自分らしく	弥栄小六年
佐藤	結葵	この街の大事な良き	宮本小六年
中村	太洋	バスケットボールで世の中を笑顔に	宮本小六年
藤江	葵	志を持つて生きたい	宮本小六年
角本	愛実	あこがれの学校の先生になるために	宮本小六年
中嶋	芽唯	あこがれのかんごしさん	宮本小六年
桃木	心春	お父さんとお母さんみたいに	宮本小六年
中山	采華	負けずぎらいを夢へ	鷺後小六年
星野	まなみ	ゴミをより少なくしていくために	鷺後小六年
西山	晴陽	将来の夢つてなあに？	鷺後小六年
村上	朱里	「いじめは絶対に許されないこと」	千間台小六年
栗原	巧	「男だから」「女だから」とは	千間台小六年
小島	希華	相手を知ろう	千間台小六年
宮島	美空	一人ひとりの明るい未来と人権	千間台小六年
市山	藍莉	動物たちの自由を守る	千間台小六年
堀内	りん	「たったひとつの命」を大切に	千間台小六年
西田	怜音	小さいころのあだ名と名前	千間台小六年

遊佐	陽人	夢は無限大	千間台小六年
崇田	陽菜	「食のありがたみ」	千間台小六年
吉田	茉希	東日本大震災から学んだこと	桜井南小六年
渡辺	ひなた	「言葉の効力」	花田小六年
吉澤	遙人	生きているのに会えない大切な人	花田小六年
岡田	彩雪	私の親戚	花田小六年
小田部	遼	すこしやさしい世の中になる第一歩	城ノ上小六年
大竹	永真	家庭内の男女差別	城ノ上小六年
竹内	凜花	多様性を受け入れる輪	城ノ上小六年
鈴木	緋紗	憧れの司書さんへ	蒲生小六年
笠井	麻帆	人と関わること	蒲生小六年
松浦	悠真	小さな頃から変わらない僕の夢	蒲生小六年
石田	弓晴	人の心にふれて	蒲生小六年

佳作者名簿

《詩の部門》 小学四年生

氏名	題	名	学校名・学年
染谷 香帆	なおらない心のケガ	新方小四年	新方小四年
野口 力馬	ぼくらのいのち	新方小四年	新方小四年
染谷 樹菜	言葉	新方小四年	新方小四年
ダンガン 柊音 <sup>テイナ</sup>	夢を追えば	大袋小四年	大袋小四年
吉葉 美来	命はあつて何かできる	大袋小四年	大袋小四年
松井 碧葉	きずな	大袋小四年	大袋小四年
片山 康	ゆめをおいかけて	大袋小四年	大袋小四年
前田 一樹	サツカー	川柳小四年	川柳小四年
村松 朔也	毎日こつこつ	川柳小四年	川柳小四年
佐藤菜乃葉	家族と気持ち	川柳小四年	川柳小四年
嶋田 拓真	自分	南越谷小四年	南越谷小四年
河田 新太	けんか	蒲生南小四年	蒲生南小四年
内田 楓太	がんばる言葉	弥栄小四年	弥栄小四年
千吉良葉月	将来に向かって	弥栄小四年	弥栄小四年
松尾 咲	大事な友達	弥栄小四年	弥栄小四年
栗原 観鈴	イラスト	弥栄小四年	弥栄小四年
花野莉明菜	未来の自分	弥栄小四年	弥栄小四年
石田 優月	がんばるっておもしろい	弥栄小四年	弥栄小四年
塩野 紗彩	私の将来なに色かな	大間野小四年	大間野小四年
北村 彩芽	ゆめに出会うまで	大間野小四年	大間野小四年

《詩の部門》 小学五年生

板野 星馬	ぼくの虫はかせ	大間野小四年	大間野小四年
三谷紀実佳	わたしがすきなこと	大間野小四年	大間野小四年
永松 花菜	自分	大間野小四年	大間野小四年
高橋 李花	「みんなを笑顔に」	大間野小四年	大間野小四年
村田 祐明	やさしい気持ち	大間野小四年	大間野小四年
池田 弥琴	わたしのしよう来のゆめ	大間野小四年	大間野小四年

《詩の部門》 小学五年生

氏名	題	名	学校名・学年
梨本 結陽	みんなそれぞれちがう色がいい	新方小五年	新方小五年
鳥居 拓飛	命は一つ	荻島小五年	荻島小五年
吉岡 華乃	一日一日の日常	荻島小五年	荻島小五年
市村なびき	心の手紙	荻島小五年	荻島小五年
村上 陽奏	メガネをかけている妹	川柳小五年	川柳小五年
加藤 遥輝	家族みたいな友達	川柳小五年	川柳小五年
高原 玄晟	人生の選択肢	川柳小五年	川柳小五年
瀧谷 祐梨	ぼくの弟	蒲生南小五年	蒲生南小五年
宮本 奈々	命があるしあわせ	蒲生南小五年	蒲生南小五年
福岡 沙笑	戦争の悲しさ	蒲生南小五年	蒲生南小五年
内山 滯	あなたと私	弥栄小五年	弥栄小五年
平井 咲衣	治らない心の傷	弥栄小五年	弥栄小五年
堀 結斗	鏡	弥栄小五年	弥栄小五年

金子 晴翔	平和な未来	蒲生小五年
-------	-------	-------

《詩の部門》		小学六年生
氏名	題	名
井上 深愛	わたしの好きなもの	新方小六年
金森健太郎	ぼくの友達	新方小六年
染谷 真帆	夢へ	新方小六年
熊本悠之介	「夢をかなえるために」	大袋小六年
岡野 心実	今、一番楽しい時間	大袋小六年
江口 桃愛	「だいじょうぶ」	大袋小六年
高橋 蒼輝	「大人になつたぼくへ」	大袋小六年
川崎友梨南	わたしのすき	荻島小六年
石山 珠梨	おかあさん	荻島小六年
吉田恵美佳	未来	南越谷小六年
青木 七海	「小さき大先輩」	南越谷小六年
石田まなか	「生きてる感じ」	蒲生南小六年
米田 雪菜	楽しい時間はあつというま	蒲生南小六年
北山 桃花	一言で…	蒲生南小六年
高橋 優月	努力の力	蒲生南小六年
赤沼 帆夏	生きている証拠	弥栄小六年
三富菜那佳	私の夢はお花屋さん	弥栄小六年
羽田 蓮	サッカーボール	弥栄小六年

佐藤 優羽	一人でかかえこまないで	弥栄小六年
鈴木 伶奈	平和と希望	大間野小六年
関谷 心花	いじめはいけない・いじめほんなにっらいか	大間野小六年
池田小茉莉	幸せ	大間野小六年
須永ここな	仲間	大間野小六年
我妻 紗奈	「色」	大間野小六年
小幡 光希	「今日と同じ明日」	大間野小六年
山下 想太	「人権」と「平和」をつなぐために	大間野小六年
森岡 結衣	忘れちゃいけないもの	蒲生小六年
山崎 大地	友達	蒲生小六年



佳作者名簿

《作文の部門》 中学一年生

氏名	題	名	学校名・学年
大和 杏寧	友達をつくる経験		西中一年
蕪木 心咲	一工夫の凶器		西中一年
川越亜桜葉	夢を叶えるために		西中一年
堀越 莉桜	私の将来の夢		西中一年
金子 和乎	夢を見つけない		西中一年
後藤 楓佳	将来の夢に向かつて		西中一年
鈴木 瑠太	未来に今に本当の平和を…		西中一年
西村 心春	日々の生活で感じることに		西中一年
伊藤 義仁	僕の将来の夢		西中一年
金井 愛夏	世界につながる「スママセン」の心		西中一年
清水 麻希	人それぞれの価値観		西中一年
田村誠乃介	「努力はうらぎらない」		西中一年
小山 心暖	無限の可能性をつくるために		西中一年
佐藤 薫	作文って難しい		西中一年
鈴木菜々子	いつも家族に感謝してること		西中一年
中川美穂子	みんな平等に接されるように…		西中一年
石田あおい	幸せ配達人		西中一年
稲玉 美月	協力して、よりよいクラスへ		西中一年
久保 実愛	人が人の命をうばうのは…		西中一年
島根こゆき	中学生になつてから		西中一年

氏名	題	名	学校名・学年
熱田 結香	親切の意味		南中一年
石崎 菜裕	努力のしかた		南中一年
梅田 莉那	病気で苦しむ人をへらすために		南中一年
中井 結々	感謝の伝え方		南中一年
茂木 杏樹	ボランティア		南中一年
岩本 純	「私だけの夢」		南中一年
小幡 皓太	努力すれば、毎日楽しくなる		南中一年
藤田 寛奈	友達の大切さとは		光陽中一年
宇野ほの香	人間関係		平方中一年
金森 穂真	これからの世界は…		平方中一年
倉持 冴理	僕が今がんばっていること		平方中一年
酒井 梨帆	個性を尊重し合える社会へ		平方中一年
中村 心美	その時間を大切に		平方中一年
添田 乃愛	目には見えない		大袋中一年
下田 怜奈	将来の夢		大相模中一年
花木 真優	小さなことから少しずつ		大相模中一年
藤田 和軌	バスケットで越谷を盛り上げる		大相模中一年

《作文の部門》 中学二年生

氏名	題	名	学校名・学年
平井 結心	私たちでも大丈夫		中央中二年
落合 俊基	言語による解釈の違い		中央中二年

世永 萌有	失敗は成功のもと！	中央中二年
猪俣ひらり	なぜ心の目で見ようとしなののか	中央中二年
片倉 瑞稀	笑顔のうらがわは：	中央中二年
芹澤 羽惟	私達はなぜ勉強するのか	中央中二年
鈴木 伶菜	みんなの思いをふるさとへ	中央中二年
豊島 綺菜	笑顔の力く信頼と信用。そして繋がる事く	中央中二年
和田 琉佑	僕の将来の夢	中央中二年
ハ さつき	宿敵と書いて友と読む	中央中二年
野澤 笑里	私のスケッチブック	中央中二年
井上 咲良	幸せと感動を人々に	中央中二年
関悠 孝	地域のごみ拾い	中央中二年
瀬尾ひまり	今の私の夢と憧れ	中央中二年
中森 丈吉	「自分の色」	中央中二年
門田幸太郎	未来の大人達へ向けて	南中二年
須賀 美月	今がんばっていること	南中二年
小倉 那月	「笑顔の心がけ」	南中二年
小島 菜奈	目指すべき場所	南中二年
磯谷ひなの	私たちにできることは：	南中二年
花澤 彩寧	家族	南中二年
藤司 結奈	「可能性」	南中二年
木村 志穂	歴史をつないでる私たちの舞台	北中二年
横田 晴菜	越谷市の未来 今出来ること	北中二年

眞田 紗弥	少子高齢化について	北中二年
須永 莉子	後悔のないように	北中二年
高木 悠斗	地球温暖化について	北中二年
佐藤 芙紀	あなたは どう使いますか	北中二年
立澤 未来	少子高齢化は進んでいる	北中二年
片岸 凜	叶えたい夢	栄進中二年
袴田 真麻	「失敗も成功も私のお守り」	光陽中二年
齊間 心優	大好きなKBB	光陽中二年
小林 美咲	『言葉』と意味と、感情と相手』	光陽中二年
湯田 結衣	「継承すべき日本文化」	光陽中二年
川岸 由羽	「音楽が教えてくれたこと」	光陽中二年
深田 歩	子どもは外で遊ばないのではない	平方中二年
飯塚 彩音	一つのやさしさ	平方中二年
長井 篤人	日本のエネルギー問題について	平方中二年
平井 絢乃	「聞く」という事	大袋中二年
岩田 美咲	悔いのない思い出を	大相模中二年
川野明花莉	私の退屈な十四年間を変えた言葉	大相模中二年
緒方 心美	自分の将来について考える	大相模中二年
千野 碧音	意識すること	大相模中二年
眞板 柚莉	人としての尊重	大相模中二年

《作文の部門》 中学三年生

氏名	題	名	学校名・学年
高橋 杏	私の将来の夢	東中三年	東中三年
小池ほのか	人との繋がりとその一歩	東中三年	東中三年
輿水 愛梨	未来という名の幻想	東中三年	東中三年
田中 伶來	戦争をなくすために私ができること	東中三年	東中三年
内海 壮大	「一つ目の壁」	東中三年	東中三年
片倉 希美	私の未来	東中三年	東中三年
関口 千璃	私の未来	東中三年	東中三年
手代木惟世	「今があるということ」	東中三年	東中三年
原島 永帆	「最後の一年間の挑戦」	東中三年	東中三年
大澤 咲穂	未来について考えたこと	東中三年	東中三年
岡田 己和	ボランティア、してみませんか？	東中三年	東中三年
木下 敦貴	周囲の人の温かさ	東中三年	東中三年
富澤 優太	これからの自分のために	東中三年	東中三年
小柳 洸	未来の僕らと世界の言葉	北中三年	北中三年
水多陽奈子	想いを届けるために	北中三年	北中三年
鈴木 美奈	今までの経験を糧にして	富士中三年	富士中三年
屋久 真諄	友達という存在	栄進中三年	栄進中三年
須貝 璃海	親への感謝とこれからの自分	栄進中三年	栄進中三年
戸張 嵩彪	選んだ責任と選べない理不尽	栄進中三年	栄進中三年
中島 敦司	将来の夢	栄進中三年	栄進中三年

鈴木 乃愛	私の将来について	栄進中三年	栄進中三年
三好 里奈	自慢の家族	栄進中三年	栄進中三年
千葉 朝陽	レイクタウンに地下鉄を	光陽中三年	光陽中三年
栗原 加帆	起立性調節障害について	光陽中三年	光陽中三年
杉浦 杏咲	二百五十日後まで	平方中三年	平方中三年
藤吉 帆夏	夢に向けて	平方中三年	平方中三年
磯野 歩	ちいさなことからはじめよう	平方中三年	平方中三年
中島 莉沙	助けて学ぶ、私の人生	平方中三年	平方中三年
松本 笑多	同和問題・部落差別について	大袋中三年	大袋中三年
菅野 沙介	自分ごととして	大袋中三年	大袋中三年
櫻井 琉偉	ぼくと祖父	大袋中三年	大袋中三年
紺野 恵馳	戦争のない今だからできること	大相模中三年	大相模中三年
古橋 悠	看護師の夢へ	大相模中三年	大相模中三年
早川 陽斗	親孝行	大相模中三年	大相模中三年
荒 沙津希	卓球に出会えて	大相模中三年	大相模中三年
望月 凜子	私の将来設計	大相模中三年	大相模中三年
山口 紗英	将来の夢	大相模中三年	大相模中三年
中井 駿佑	頑張ること	大相模中三年	大相模中三年

佳作者名簿

《詩の部門》 中学一年生

氏名	題	名	学校名・学年
豊田花梨渚	努力の力		平方中一年
内藤花波	世界の人々		平方中一年
杓野航太郎	タダの旅		武蔵野中一年
関山恵司	帰り道		武蔵野中一年
間宮大貴	田んぼ		武蔵野中一年
足立凌大	空		武蔵野中一年
石川莉緒	帰り道		武蔵野中一年
中島みちる	笑顔の花		武蔵野中一年
合川桜基	晴れた景色		武蔵野中一年
内藤万尋	空みたい		武蔵野中一年
丸岡修羅	授業中		武蔵野中一年
田中里奈	光の架け橋		新栄中一年
菊地琉翔	黄金の夕陽		新栄中一年
鈴木崇翔	僕らの越谷		新栄中一年
齊藤駿	七色の光が越谷に		新栄中一年

《詩の部門》 中学二年生

氏名	題	名	学校名・学年
菊地惺來	夢のために		北中二年
高橋花	友達の大切さ		北中二年

平岡 蒼太  
考え方

平岡 蒼太	考え方		北陽中二年
榎戸 湊	未来とは		北陽中二年
佐々木希花	日常		北陽中二年
鈴木 継人	生きていけば		北陽中二年
田崎莉桜那	言葉のチカラ		北陽中二年
齋藤 修大	未来		北陽中二年
横塚 凜	「たいせつな人」		北陽中二年
松下 夏葵	一つの幸せをつかむために		平方中二年
小林 愛佳	迷っているだけ		新栄中二年
嶋田 未来	成長してるだけ		新栄中二年
三井 結加	むちなだけ		新栄中二年
高橋 步子	前を向くだけ		新栄中二年
原田 結奈	「普通のものさし」		千問台中二年

《詩の部門》 中学三年生

氏名	題	名	学校名・学年
岡安 花音	「誰か」にありがとう		北陽中三年
清水 杏莉	私の道		北陽中三年
菅沼 彩妃	いつか終わるその前に		北陽中三年
富田 美羽	依存症		北陽中三年
前田 尚輝	「あたりまえ」		北陽中三年
矢島 愛子	前を向いて		北陽中三年

関根 輝空	新井 翔	遠藤 蒼士	鈴木 秀直	田中 那奈	石田 匠哉	吉岡 晃	瀧田 悠	小松 佑季子	木尾 悠人
常に自分から	行動	やりきる	この気持ち	ありがとう	自分の好きなこと	自分	夏の青い日	人生お天気予報	今やろうとしてた
新栄中三年	新栄中三年	新栄中三年	新栄中三年	新栄中三年	大袋中三年	大袋中三年	平方中三年	平方中三年	北陽中三年

☆作品を選考されたのは

青少年育成越谷市民会議役員・理事の方々です。

(敬称略・順不同)

団 体 名	氏 名
越谷市子ども会育成連絡協議会	飯 島 孝 子
越谷市ボーイスカウト各団連絡協議会	大 久 保 亨
越谷市青少年育成推進委員協議会	毒 島 美重子
越谷市青少年指導員連絡協議会	石 塚 忠 男
越 谷 市 自 治 会 連 合 会	川 村 耕 治
越谷市ガールスカウト連絡協議会	湯 田 ミノリ
越 谷 市 ス ポ ー ツ 少 年 団	山 口 実
越谷市青少年相談員協議会	山 崎 理 恵
越 谷 市 体 育 協 会	鹿 野 信 恵
越 谷 商 工 会 議 所 青 年 部	横 井 雄 一 郎
越 谷 市 P T A 連 合 会	山 室 舞
越谷市レクリエーション協会	志 村 紀 子
越 谷 青 年 会 議 所	山 田 佑 太

(令和6年8月現在)

## 各種相談窓口案内 (青少年・保護者の悩みごと相談)

### 《 市内相談機関 》

- 越谷市青少年相談室 (月・火・水・金：9時～16時) . . . 9 6 4 - 0 2 7 2  
越谷市教育センター (月～金：9時～19時)(土：9時～16時40分)  
(電話相談) . . . 9 6 2 - 9 3 0 0  
. . . 9 6 2 - 8 6 0 1  
(子ども専用) . . . 9 6 2 - 8 5 0 0  
越谷市家庭児童相談室 (月～金：9時～16時) . . . 9 6 3 - 9 3 1 9  
越谷警察署生活安全課少年相談 . . . (代)9 6 4 - 0 1 1 0  
埼玉県越谷児童相談所 (月～金：8時30分～18時15分) . . . 9 7 5 - 4 1 5 2

### 《 県内相談機関 》

- 埼玉県警察少年サポートセンター (月～金：8時30分～17時15分)  
・少年相談 (非行、いじめ、犯罪被害等) (保護者用)  
. . . 0 4 8 - 8 6 5 - 4 1 5 2  
・ヤングテレフォンコーナー (少年用) . . . 0 4 8 - 8 6 1 - 1 1 5 2
- 埼玉県男女共同参画推進センター (with You さいたま)  
(月～水曜日、金・土曜日：9時30分～20時30分、日曜、祝・休日：9時30分～17時)  
・年齢・性別 (性自認)・相談内容を限定せず、相談受付  
. . . 0 4 8 - 6 0 0 - 3 8 0 0
- 埼玉県精神保健福祉センター「こころの電話」(月～金：9時～17時)  
. . . 0 4 8 - 7 2 3 - 1 4 4 7
- 埼玉いのちの電話 (毎日：24時間) . . . 0 4 8 - 6 4 5 - 4 3 4 3  
埼玉いのちの電話 フリーダイヤル  
(毎月10日8時～11日8時まで／毎日16時～21時まで)  
. . . 0 1 2 0 - 7 8 3 - 5 5 6
- さいたまチャイルドライン (18歳までの子ども専用)(毎日：16時～21時)  
. . . 0 1 2 0 - 9 9 - 7 7 7 7
- 埼玉県立総合教育センター「電話相談」(毎日：24時間)  
(18歳までの子ども用) . . . 0 1 2 0 - 8 6 - 3 1 9 2  
(保護者用) . . . 0 4 8 - 5 5 6 - 0 8 7 4  
《メール相談》 . . . soudan@spec.ed.jp

発行	令和6年11月
編集	越谷市 越谷市教育委員会 青少年育成越谷市民会議
事務局	越谷市子ども家庭部青少年課 電話 048-963-9308





毎月第三日曜日は  
**「家庭の日」**

～みんなで築こう 明るい家庭～

青少年育成越谷市民会議統一テーマ

**あいさつは 心をつなぐ**  
**“愛” 言葉**